

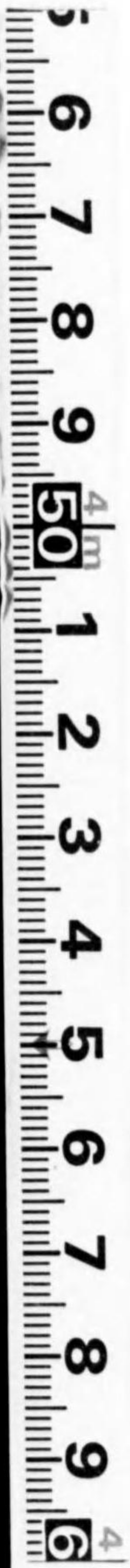
375-421



1200501451263

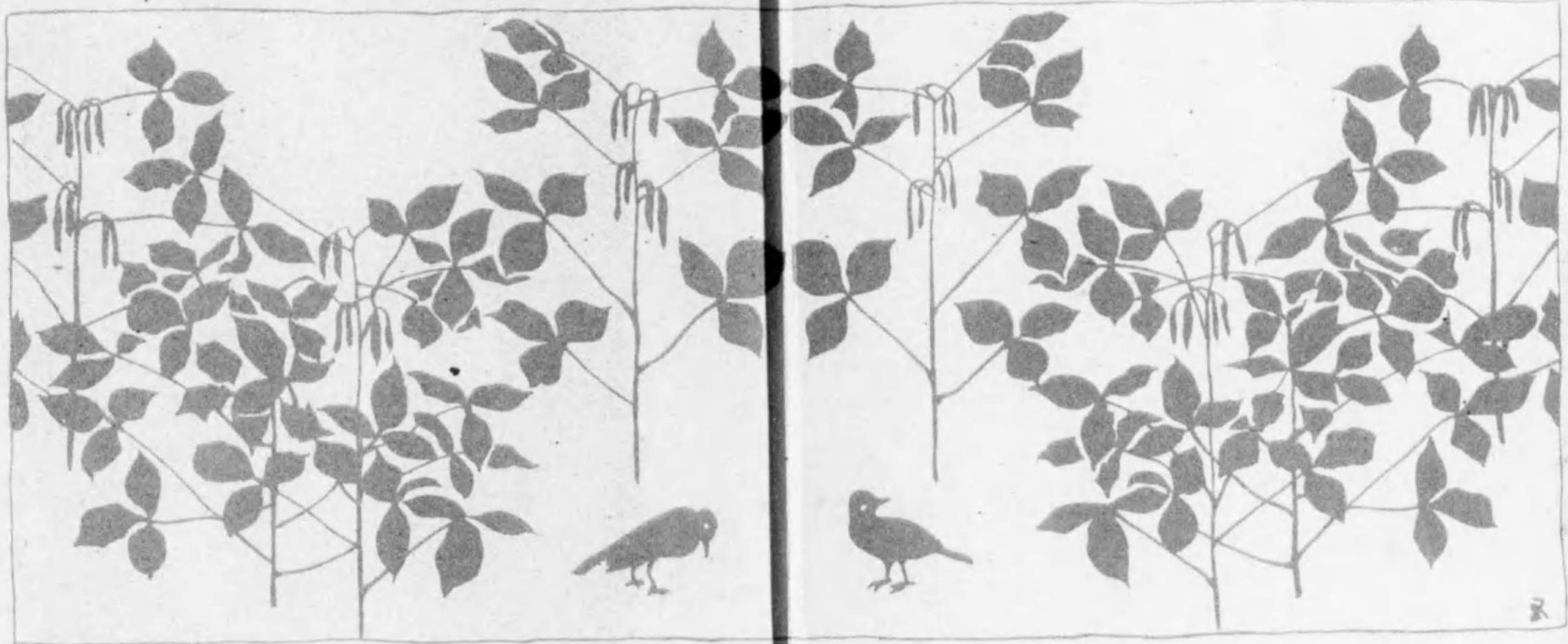
75

21



始





戰



策

全



例言

- 一 戰國策全部を收め、其本文を上欄とし、之に對する譯文及び註解を下欄とし、以て本書一卷と爲す。
- 一 上欄の本文は横田惟孝著戰國策正解が鮑注本によりて立つる所の本文に據る。而して其本文を誤として改譯したる文字には其右側に「・」符を附し、又衍文として削去したる文字には「」を附し、更に其理由を註記す。
- 一 訓讀及び註解亦主として正解本に據り、傍ら諸家の説を參酌して其の宜しきに従ふ。
- 一 譯文の一字下りに始まるは原本の別行なるもの、其然らざるは、譯註者の私見を以て、便宜行を改めたる所と知るべし。
- 一 本書の譯註は本叢書編纂者塚本哲三の手に成る。

戰國策解題

(一)書名—此書は、はじめ國策、國事、長短、事語、長書、修書の如き種々の名稱ありしが、前漢の學者劉向(りうきやう)(西曆紀元前九年歿す)が、宮中の祕書を校定して此書を読むに及び、支那上古の戰國時代に、遊説の策士が各其の用ひらるゝ所の國を輔け、之れが策謀を爲したるものなれば、宜しく戰國策とすべしといひ、遂に戰國策といふ名に定まりたり。

(二)著者—此書の作者は明ならず。戰國時代の諸策士等の記せしものにして、一人の作に非ざりしものを上記の劉向が集録校定して一書となせし者なるべし。

(三)内容—古代支那史上の戰國時代とは、即ち所謂三代(夏、殷、周)の一たる周の末に至り、列國戰爭を事として攻伐して已まざりしより名けし者にして周の第三十二

世威烈王の二十三年より、秦が終に列國を併合して、天下を統一するに至るまでの
 一百八十三年（西紀前四〇三年より同二二一年に至るまで）なるが、此書は即ち大體
 此戰國時代二百年の列國の盛衰興亡に關するを記し、其戰國時代の紀事は、韓、
 魏、趙の三國が智伯を滅すを始とし、燕の荆軻が秦に入るに終る。記す所、多く策士
 の合従連衡の謀策にして、機智測られず、奇變百出し、戰國の前の春秋時代の後より
 秦の統一に至る二百餘年の成敗興亡の事蹟は、此書によりて始めて知る多し。故
 に漢書の作者たる後漢の班固は、前漢の司馬遷の史記を批評して、『左氏國語に據
 り、世本、國策を採る』といひ、實に史記の中の戰國時代の記事は戰國策に採るもの
 十の八九なり。

次に此の書に記さるゝ國數十二といふは、東周、西周、秦、齊、楚、趙、魏、韓、燕、宋、
 衛、中山にして、

一、東周凡 一書二十二章

二、西周凡 一書十七章

- | | |
|-------------|-------------|
| 三、秦凡 五篇六十四章 | 四、齊凡 六篇五十七章 |
| 五、楚凡 四篇五十二章 | 六、趙凡 四篇六十六章 |
| 七、魏凡 四篇七十一章 | 八、韓凡 三篇六十九章 |
| 九、燕凡 三篇三十四章 | 一〇、宋凡 一篇十四章 |
| 一一、中山凡 一篇十章 | |

總計、十二國、三十三篇、四百八十六章

なり。

(四)戰國時代。支那戰國の時、列國大に亂れ、士は智勇を競ひ、學者は各新説を造り
 て以て世人に警告し、楊墨の徒出で、儒者と相抗し、儒は分れて八となり、墨家は離
 れて三となる。又黃帝の道を述ぶる者あり、神農の言を爲す者あり、列子、莊子は虛
 無の辯を肆にし、申不害、韓非は法術の學を論じ、孟子は性善説を唱へ、荀子は性惡
 を説き、宋研、尹文、騶衍、慎到の輩、亦各主張あり。兵家は兵を論じ、縱橫家は權謀を

説く。正邪相混じ、純駁並び陳ぬ。然れども各卓見を出し、敢て前人を踏襲せず。支那人智の活動、未だ此時より盛なるものあらざるなり。以上は故文學博士那珂通世先生の支那通史卷一の一節なり。戰國時代は、其名の示すが如く、列國戰爭已むなきの時代なり。されども單に干戈劍戟、千軍萬馬の戰爭のみにあらずして、智勇辯説、學術文章の競争新出時代とも看るべし。戰國策は實に、斯の如き時代の二百餘年間を描寫したる者と看ざるべからず。

前漢書卷二十に古今人物表を載す。是れ即ち太古より秦末に至る迄の人物を上上、上中、上下、中上、中中、中下、下上、下中、下下の九等に分ちて、堯、舜、孔子の如き大聖人を上上に列し、紂王や妲己や幽王や褒姒の類を下下に列したる者なり。戰國時代には、上上に位する大聖人は無けれども、上中の子思、孟子、魯仲連、藺相如、荀卿を始めとして、人物の多きとは、春秋時代に譲らず、且つ人物の文武多種、多様多方面なるとは、寧ろ前時代に優れり。戰國策は、實に斯の如き時代を舞臺とし、斯の如

き種々の人物を役者とせる大活劇の筋書脚本ともいふべきものなり。

(五)體裁——此書の卷數、古來一定せざるは、多く亡佚あるを以てなり。漢書の藝文志には三十三篇とあり。是れ即ち上記の劉向の校定したる者なり。隋書の經籍志には三十二卷、又は二十一卷とあり、宋史の藝文志には三十三卷、又は十卷とあり、宋の鄭樵の通志には三十四卷、又は二十一卷とあり、宋の馬端臨の文獻通考には十三卷とあり。劉向の校定したる三十三篇、四百八十六章を以て最も普通に行はるるものとす。斯の如く卷篇の數の一定せざるは、一は唐宋の際、書籍の體裁が卷子本より摺本に改まりしが爲に、卷數の分合差異を生じたるに由り、又一は亡佚ありしに由るなり。

(六)傳來——支那には古來圖書の分類に諸説あり。此書の如きも、古來より歴史の部に列ねし者と縱橫家として時勢を審察し、遊説して人を動かすを以て主旨とせる一種の權謀的外交政論を主張せるもの、中に編せし者とあり。即ち隋書の經籍

志と鄭樵の通志は、此書を史部に入れ、宋史の藝文志と馬端臨の文獻通考は、之を子部（經、史、子、集といふ漢籍分類四大別の一にして、所謂諸子の部なり）の縱橫家に入れたり。近世清朝に至り紀昀といふ學者は乾隆帝の敕命を奉じて四庫全書總目提要といふ漢籍解題の一大著作を爲し、其中に此書を史部の雜史類の編入せり。穩當の見解なり。江村北海（播磨の學者、天明八年、七十六歳を以て歿す）の著はせる授業編卷之五の『歴史之學』の章に、

左傳、國語の後に戰國策あり。これも作者はさだかならず。但し國語、國策は、事實を略して、說辭を主としたる書なれば、歴史の列に非ず。

といへるは、穩健の說にあらず。戰國策は、史籍として見ることも最も中正の說なり。次に我國に於ける傳來は、藤原佐世（宇多天皇御治世時代）の日本現在書目錄に『戰國策三十三卷』とあるを見れば、本朝に傳來せるは、支那の唐の代にあり。徳川氏の初め、林羅山之に訓點を施し、寛永元年（西紀一六二四年）之を刊行せり。

(七) 註釋——此書を註釋せるものは、前漢の高誘を以て始とす。但し、其全本は殘缺して完存せず。現存のものは三十三卷中の十卷のみ。其後、宋の鮑彪、元の吳師道も各之を註解し、清の程恩澤は戰國策地名考を、林春溥は戰國策紀年を著はして、共に名あり。

本朝に於ては、

横田惟孝 戰國策正解 文政十二年刊

中井履軒 戰國策雕題

安井息軒 戰國策補正

の三書、尤も著はれ、大正四年書肆富山房發行の漢文大系第十九には、安井小太郎氏校訂の横田惟孝撰の戰國策正解を編入し、且つ清の黃丕烈の戰國策札記三卷を附刊せり。

(八) 諸名家の批評——此事は上記(三)内容の條に記すべきことならんも、特に此一條

を掲げて戰國策の性質を説明する資料となさん。我が寛保元年(西紀一七四一年)刊刻の戰國策(宋の鮑彪註。元の吳師道補正。明の張文燿校補)の初卷に、明の張維昇の戰國策譚極を附録す。六朝唐宋元明諸名家の戰國策に關する批評感想を集めたるものにして、頗る便宜のものなり。今其の中の數條を摘載し、併せて愚見を附録せん。

朱熹(即ち宋の朱子)曰く、

治世の文あり。衰世の文あり。亂世の文あり。國語の如きは、委靡繁絮。眞に衰世の文のみ。是時、語言議論、此の如し。宜なるかな周の振起すること能はざるや。亂世の文に至りては、則ち戰國是れなり。然して英偉の氣あり。衰世治國の文の比に非ざるなり。眞に是れ奇偉、豈に及び易からんや。宋の程子は、孟子を評して、英氣あり、圭角あり、光耀ある大賢人となし、孔子温潤含蓄の氣象あるに比すれば、孔子の玉の如きに對して、孟子は水精(水晶)の如き人物なり。

りといへり。而して孟子は實に此の書の起りたる戰國時代の人なり。時代と人物及び其文章との間には、密接にして離るべからざる關繋あり。孟子の人物と文章に英氣あり、圭角あり、又光耀あるは、やがて又戰國策中の人物と、本書の記事に英氣あり、圭角あり、又許多の光耀ある所以なりと感ぜずんばあらざるなり。

王覺曰く、

戰國の時、當り、強者并吞を務め、弱者守ること能はざるを患ふ。天下方に戰勝を争ひ、攻取馳説の士、因りて其説を以て合ふことを時君に取るを得たり。其要、皆利を主として之を言ひ、合従連衡、變詐百出す。然れども、春秋よりして後、以て秦に及ぶまで、二百餘年、興亡成敗の迹、粗是に見はる。義理の存する所に非ずと雖ども、辯麗横肆、亦文辭の最。學者の廢すべからざる所なり。

一般世人の言行と、世界の活歴史は、必ずしも理想的の道德と一致せず。史籍は修身倫理の教科書にもあらざれば、戰國策の記事が、一々仁義正理に合はざればと

て之を廢すべからざるは勿論の事なり。讀者はたゞ支那上世二百餘年の世態人情を實寫したる者として戰國策を読み、以て歴史の研究に資し、古を察し今を考ふるの好材料となすべきなり。

李塗曰く、

孟子の是非を辨するや、利害を計らずして、利害未だ嘗て明ならずんばならず。戰國策の辨利害を計りて是非を計らず。

言簡なりと雖ども、亦以て上記孟子と戰國策との對比説を補ふべし。

王世貞曰く、

檀弓、考工記、孟子、左傳、戰國策、司馬遷は、文に聖なる者か。其叙事は則ち化工の肖物なり。

胡汝嘉曰く、

初學熱讀潛玩すれば、神意と會す。之を沈澁を吸ひ、朝霞を餐ふに譬ふれば、た

だ以て塵襟を洗滌すべきのみならず、亦將に肺腸を變易せんとす。

以上二家の言は、共に此書の文章の妙をいひしものなり。

(九) 司馬遷と戰國策——司馬遷は支那の文豪にして大史家なり。而して其史記の

著作には、戰國策を採擇する所多し。

高似孫曰く、

班固稱す。太史公(即ち司馬遷)戰國策、楚漢春秋、陸賈の新語を取りて史記を作ると。三書一たび太史公の採擇を経て、後の人遂に天下の奇書と爲す。

(十) 蘇氏と戰國策——宋の蘇老泉、蘇東坡は、支那の大文士なり。

而して陸深は曰く、

余喜びて蘇氏の書を読む。側聞す、先儒悉く謂ふ、蘇は實に戰國策に原づく。書にも遇と不遇あり。戰國策の如きは、幸に司馬遷、蘇氏等に遇ひて、天下の奇書となりし幸運に遇ひし者といふべし。

(一) 毛利貞齋と戰國策——毛利貞齋は徳川時代初期の篤志の學者なり。而して彼は元祿十七年の自序を以て『繪入通俗戰國策』十八本をつくり、寶永元年に出版せられたり。當時の我等の祖先が本邦の歴史小説たる甲陽軍鑑、信長、天正、太閤の三記の如く、戰國時代の歴史小説を嗜讀せしことを得たるは、貞齋の篤志によるといふべし。明治四十四年刊の『通俗二十一史』の第六に此貞齋の著述を出版せり。

(二) 山陽と戰國策——山陽は文豪にして、又大史家なり。支那の文豪にして大史家たる司馬遷が戰國策を採擇參考せしが如く、山陽も亦戰國策を愛讀せり。『山陽先生書後題跋』卷中に『書戰國策後』の一文あり。曰く、

國語は老婆の絮談の如く、國策は壯男の事を論するが如し。時代然らしむるなり。然れども國策を以て孟子に較ぶれば、孟子は太だ明快にして利害を計較し、委曲詭誤、直に道義を説き、心肝を傾倒するとは、固より同じからざるなり。然れども、虞卿の和戰の利害を論するが如き、何ぞそれ剖析明暢なる。南宋の

士大夫をして此齒舌あらしめば、高宗と雖ども、未だ必ずしも悟らずんばあらず。是れ知る此の如き文字は、亦天壤の間にかくべからざる者なり。田單が趙奢と兵を論するが如きは、尤も雄奇なり。

又『山陽小品』卷二に左の一文あり。

戰國策趙奢田單論兵評
國策雖奇。其遊說多出常套。此篇論兵事。文亦非周非漢。一種異彩。○余幼喜讀國策。幾乎絕編。未親奇于此篇者。選家乃不取。願取酒味色莊辛幸臣等平縛文字何也。

山陽が戰國策を愛讀して、『絶編にちかし』といへるは、孔子が易を讀み、反覆熟讀して韋編三たび絶ちしといふ故辭を取りしものなるが、如何に反覆熟誦せしかを察すべし。又『山陽詩鈔』卷下には『詠春秋戰國人物十二首』ありて、戰國の人物には、商鞅、蘇秦、張儀、魯仲連、樂毅、屈原の六人を擧げたり。其一首にいふ、

樂毅 嗣王得豚犬。駿骨化罷驚。辛苦七十城。

成就一紙書。知音遇諸葛。一表力臨摹。

小竹云。十二咏中。吾取此詩。

第五句は、即ち蜀の諸葛孔明が、出處進退の公明正大につきて樂毅を追慕せし故事によるものなり。

(三)清の王韜の戰國と近世西洋諸國との比較評論。清の王韜は近世支那の一文士にして、西洋の事情に兼通し、明治年間我が國にも來朝して本朝の學者と交りたる者なり。其著述少からず。其一を『破園文錄』といふ。其外編卷四に『合六國以制俄』の一文あり。其大要は、明治初年頃の俄羅斯(即ち露西亞)を以て、戰國時代の秦に譬へ、秦の孝公と彼得大帝とを對比し、其國の強大を對比し、而して土耳其を戰國の韓に、奧太利を魏に、普魯西を趙に、意大利を燕に、英佛二國を齊楚の二國に比

擬し、且つ西班牙、和蘭、白耳義、噠馬、葡萄牙、瑞西諸國は、猶ほ泗上の十二諸侯の如しといひ、韓、魏、趙、燕、齊、楚の六國が合同して以て秦に當りしが如く、土、奧、普、意、英、佛の六國が共同して、以て露國に當らざる可らずと論ぜるもの也。

此説は頗る我が國の士人をして傾聽注意せしめ、岡鹿門の如きも、西吉甫(薩摩の人)の露西亞に往かんとする送別宴に臨み、同様の趣旨によつて『方今露西亞の英、佛、普、奧と、もに、雄を歐洲に争ふは、猶ほ戰國七雄が合従連衡を以て事と爲すが如し』と論じ、以て世界の大事を揣摩せり。

(四)矢野龍溪氏の戰國現代世界大戰對比論。大正六年の十一月十六日世界大戰の正に酣にして、特に獨逸軍の勢甚だ猛烈なりし頃に當り、矢野龍溪(文雄)氏は東京日々新聞紙上に連載せる『隨想記』(三十七)に『遠識と義勇』と題して評論していはく、『今支那の戰國時代を拉し來て、今日と比較すると、其相違が的切に分る。周末の戰國時代は、支那の華と云ふべき時である。學説の勃興、人物の輩出、是時より盛

なるは無い。孟子も、荀、韓、楊、墨も、屈、宋も、孫、吳も、荆、軻、聶政も、蘇秦、張儀も、離婁、公輸般も、猫杓子も、此時代に求めて得られぬものは無い程、賑かな世柄である。

韓、魏、趙、燕、齊、楚を脅す者は秦であつた。秦は虎狼の國で、軍國主義の一點張りである。……今世紀に於ける虎狼の秦は獨逸である。佛、露、伊、白は秦に接近する韓、魏、趙であらぬか。日、英、米は燕、齊、楚であらぬか。

獨逸と接壤する佛、露、白は、秦と接壤する韓、魏、趙である。いやとも獨逸と戦はねばならぬ。併し日、英、米の如きは、楚である。齊である。燕である。佛、露、白の如く近迫して居らぬ。故に目前の安を偷めば、今次の大戦に於ても、英國などは無論戦局の外に立ち得られたのである。……處が英人は之を爲さぬ。

又米國となると、獨逸の患は最も遠い。……二十年三十年の安は偷み得られる。……處が米人は之を爲さぬ。……一時の安を偷みて、後を思はざる如きは、墮落の民にして、眞の文明にあらぬ。……

我國の參戰せし如きも、豈營に同盟との條約に従ふとのみ是れ謂はんや。若し單にそれ丈けならば、地中海に働くにも及ばぬ。莫大の兵器を隣邦に供給するにも及ばぬなり。」

以上は、龍溪學人の説の大要なるが、之によりて學人は今日の聯合協約諸國が遠識と義勇によりて、共同作戰せるに對して、戰國の六國は遠識と義勇に乏しく、目前の偷安に耽けるの傾向ありしことを論ぜり。活眼讀史、古史新評、流石に文壇の先輩といふべし。

(註) 結論一則——當時六國が蘇秦の説に服従し、合従して以て秦に當りしと雖ども、六國各自特別の歴史を有し、利害を異にして、眞の協同一致を見難かりしことは、秦の惠文王が六國の合従を評して、「連鷄の俱に棲に止まること能はざるが如し」(五列國の竝立する能はざる譬喩にして、棲は鷄の埒、またはとまり木なり)といひしが如き形勢ありしが上に、遠識と義勇の觀念の不足なりしは、六國の爲め惜む所たり。

さるにても、明治の初年には、強秦に比せられたる露西亞も、大正の現代には、暴秦に擬せられたる獨逸も、世界大戰の爲に、大敗滅に歸し、一は兇險の亂徒蜂起して、弑逆を行ひ、一は皇帝退位して他邦に奔竄し、『國雖大。好戰必亡。』恃德者昌。恃力者亡。』得衆則得國。失衆則失國』の格言を實現し、又唐の杜甫の名句たる、『國破山河在』の状態を示すに至りしは、尤も悽慘可憐の感あり。而して戰國六國の一に比せられたる塊太利も、亦殆んど露獨二國と其運命を同じうし、三國ともに百年の榮華は寒煙に歸して、千里の江山空しく寂莫。酸鼻の極といふべし。

戰國策を讀み、考古察今、感慨の念に禁へず。記して以て解題の終に附す。

大正八年三月十日、日露戰役陸軍記念日
文學士 中村久四郎

戰國策 目次

卷之第一 西周 (一—三)

安王 一

赧王 二

卷之第二 東周 (三四—四九)

惠王 三四

卷之第三上 秦上 (五〇—二九)

孝公 五〇

惠文君 五三

武王 五三

昭襄王(上) 一〇二

目次

卷之第三下 秦下 (一一—一三六)

昭襄王(下) 一一

孝文王 一四

莊襄王 一九

始皇帝 一九

卷之第四上 齊上 (二七—二七六)

威王 二七

宣王 三五

閔王(上) 四八

卷之第四下 齊下 (二七九—三三四)

閔王(下) 二七九

襄王 三三

卷之第五 三三

二一

楚	(三四四—三四七)
宣王	三四四
威王	三五五
懷王	三六九
頃襄王	四〇七
考烈王	四二三
卷之第六上	
趙上	(四四八—四五七)
襄子	四四八
烈侯	四四五
肅侯	四六八
武靈王	四七六
惠文王(上)	五〇九
卷之第六下	
趙下	(五八—六〇五)
惠文王(下)	五八

孝成王	五四三
悼襄王	五九八
幽王	五九九
卷之第七上	
魏上	(六〇六—六七七)
桓子	六〇六
文侯	六〇七
武侯	六一一
惠王	六一三
襄王	六二四
哀王	六三八
卷之第七下	
魏下	(六七三—七三七)
昭王	六七三
安釐王	六九五
景閔王	七三二

卷之第八

韓	(七六一—八〇一)
康子	七六一
烈侯	七七一
昭侯	七九一
宣惠王	七九一
襄王	七九一
釐王	七九一
桓惠王	八〇一
卷之第九上	
燕上	(八二六—八八〇)
文公	八二六
易王	八三〇
王噲	八三六
昭王	八四三
卷之第九下	

卷之第十

燕下	(八八一—九二二)
惠王	八八一
王喜	八八九
宋	(九二二—九二九)
景公	九二三
別成	九二七
君偃	九二八
衛	(九二〇—九三九)
靈公	九二〇
悼公	九二二
嗣君	九二四
中山	(九三〇—九四四)
目次終	



嚴氏爲賊。而陽堅與焉。道周。周君留之。十四日。載以乘車。駟馬。而遣之。韓使入讓周。周君患之。客謂周君曰。正語之曰。家人知嚴氏

戰國策卷第一

西周

安王

嚴氏賊を爲して、陽堅與れり。周に道す。周君之を留むる十四日、載するに乘車駟馬を以てして之を遣る。韓、人をして周を讓めしむ。周君之を患ふ。客、周君に謂ひて曰く、「正に之に語けて曰へ、『寡人、嚴氏の賊を爲して、陽堅之に與れを知る。故に之を留むる十四日、以て命を待てり。小國以て賊を容るゝに足らず、君の使又至らず。是を以て之を遣れり』と。」

● 嚴遂韓に仕へ、韓の宰相韓傀と仲悪しく、終に刺客蘇政(セフセイ)に囑して傀を殺し、韓を以て其後を殺す。賊は逆軌的行爲の謂也 ● 陽堅其徒黨に加はり、韓國を連れて他國へ奔る途次周國を過ぐ ● 留めて款待する十四

之爲賊。而陽
堅與之。故留
之十四日。以
待命也。小國
不足容賊。
君之使又不至。是以遣之也。

日、其出立の際には周君自乘用の馬車に四頭の馬を付けて之を遣はしたり。凡て厚く禮遇したるを謂也。④ 陽堅を厚遇したる事を詰問せる也。⑤ 韓は大國ゆゑに解解の辭につきて大いに憂慮したり。⑥ 曖昧ならずきつぱりと韓に下の如くいふべし。⑦ 抑留する事十四日、以て處分方に關する貴國よりの命令を待てり。⑧ 小國の微力にては永く賊臣を容れ置き難し。

赧王

周共太子死。
有五庶子。皆
愛之。而無適
立也。司馬翦
謂楚王曰。何
不封公子咎。
而爲之請中太
子。左成謂司

周の共太子死す。五庶子有り、皆之を愛して適とし立つる無し。司馬翦、楚王に謂つて曰く、「何ぞ公子咎を封じて、之が爲めに太子を請はざる」と。左成、司馬翦に謂つて曰く、「周君聽かすんば、是れ公の智困しみて、交、周に絶えん。如かず、周君に謂つて、「孰れをか立てんと欲するや、微かに翦に告げよ。翦、楚王をして之を資くるに地を以てせしめん」と曰はんには。公若し太子の爲にせんと欲

馬翦曰。周君
不聽。是公之
智困。而交絶
於周也。不
謂周君曰。孰
欲立也。微告
翦。翦令楚王
資之。以地。公
若欲爲太子。
因令三人謂相
國。御展子。廡
夫空。曰。王類
欲令若爲之。
此健士也。居
中。不便於相
國。相國令三
爲太子。

せば、因て人をして相國の御展子、廡夫空に謂はしめて曰へ。『王若をして之を爲さしめんと欲するに類たり。此れ健士なり。中に居らば、相國に便ならじ』と。相國之をして太子の爲にせしむ。

① 共は隠號、世嗣の君也。② 五人の妾腹の子、又二男以下をも庶といふ。③ 適は嫡也、正也。誰を世嗣とも定め兼ねたる也。④ 楚の卿。⑤ 周君の五庶子中の一人咎に地を與へ、而して其爲めに太子となす事を周君に請ふべし。⑥ 策士左成の策を非とし、別に一策を司馬翦にすゝめたる也。⑦ 君の言葉に従ひ楚王その事を周に勧むるも、若し周君之を聽きいれずば、君の智術究し兩國の交りも絶ゆるに至らん。⑧ ひそかに御内意を拙者に漏し給へ。⑨ 其立てんと思召さるゝ公子に所領の地を獻せしめん。⑩ 君が若し眞に其太子を助けて成功せんとならば。⑪ 楚の宰相。⑫ 御者の展子、小臣の空。一説には展は庶の誤として御展子廡(シヤウ)夫空となす、即ち御展子は宰相の家職の役をいひ、夫空は其名と解する也。⑬ 楚王。⑭ 若は此(コレ)と同義といひ、又廡の誤ともいふ。⑮ 太子を助くる事を爲さしめんとすもの、如し。⑯ 此廡といふ男は仲々やり手なり。健士は健悍(タケクツヨイ)の士の義。⑰ 國の中に居らば始終は宰相の爲めよき事あり、幸ひ楚王が彼をして周の太子を助けしめんと欲するの念あるに乗じ、彼を國より出して周にやるに如かず。⑱ 此左成の計謀圖にあたり、宰相は果して願をして太子の爲めに盡力せしむる事となりたり。一説には、最後まで左成が告ぐる謀計中の言と爲す。

謂齊王曰。王何不下以地。齊最。以爲太子也。齊王令司馬悍。以路進。周最於周。左尙謂司馬悍曰。周不聽。是公之智困。而交絕於周也。公不如謂周君曰。何欲置。令人徵告。悍。悍請令中王進之。以地。左尙以此得事。司寇布爲周最。謂周君曰。君使人告齊

齊王に謂つて曰く、「王何ぞ地を以て周最に齎らして、以て太子となさざる」と。
 齊王、司馬悍をして賂を以て周最を周に進めしむ。左尙、司馬悍に謂つて曰く、「周聽かずんば、是れ公の智困しんで、交、周に絶えん。公如かず、周君に謂つて、「何れをか置かんと欲する、人をして微かに悍に告げしめよ。悍、王をして之に進むるに地を以てせしめん」と曰はんには」と。左尙、此を以て事を得たり。

● 此一節は前條と同事異傳也。單に謂ふとありて其謂へる人の姓名なきは之を失ひて傳はらざるならん。一説には、作者自ら爲し自ら記したるものにて、或はといひ、客といひ、又名を舉ぐるは皆人より傳聞する所を記したる也。● 周の庶子、最一に叛(シユ)に作り、史記衆に作る、或は衆の古字たる「取」の轉訛か、然らば凡て「シウシユ」と讀むべからん。● 賂賂をつかひて。● 太子として推薦する也。● 齊人の策士也、前節の左成に當る。● 太子の位に也。● 齊王。● 君の太子の任に置かんと欲し給ふ其方に。● 此策を献じたるが故に尊寵せられて事を用ふるを得たり。

司寇布、周最の爲めに周君に謂つて曰く、「君、人をして、齊王に告ぐるに、周最が太子たるを肯せざるを以てせしむ。臣、君の爲めに取らざる也。函冶氏、齊

王。以中周最不也。肯爲太子也。臣爲君不取也。函冶氏爲齊太公。買其劍。公不知善。歸其劍。而責之金。越人請買之。千金。折而不賣。將死。而屬其子曰。必無獨知。今君之使最爲太子。獨知之契也。天下未有信之者。臣恐齊王之爲君。實立果。而讓之於最。以嫁中之於齊上。

の太公の爲めに良劍を買ふ。公善きを知らず、其劍を歸して之が金を責む。越人之を千金に買はんと請ふ。折なりとして賣らず。將に死せんとして、其子に屬して曰く、「必ず獨り知ること無かれ」と。今君の最をして太子たらしめんとするは、獨知の契なり。天下未だ之を信する者有らず。臣、齊王の、君の實は果を立てんとし、之を最に讓らしめ、以て之を齊に嫁かしむと爲し、君を巧多しとし、最を詐多しと爲さんことを恐る。君何ぞ信貨を買はざるや。奉養、最に愛むこと有る無く、天下をして之を見しめよ」と。

● 刑法を司る官の役人布といふ者、周の臣也。● 周最自ら太子に立つ事を承知せずといふ旨。● それを不可とす。● 函は姓、冶は官名、因て以て氏とす、鑄冶を司るを以てよく劍を相する也。一説には、世々劍を鑄るを業とする者とす。● 其劍の善良なることを。● 劍を買ひたる金。● それでも尙函冶氏はもとてが切れて損するといつて賣らず。折は折閱の折にて損の義、即ち未だ本値を盡さざるをいふ也。● 死せんとするに當り、獨り其劍の良なるを知りて、多しざりし事を悔い、其子に懇々申遣して曰く、屬は屬也、其劍を遺囑して之を滅しむと解する方策可ならんか。● 其良劍たる事、普く人に知らしめよ、自分だけ知りてよしと思ひ居る勿れ。● 自分一人のみ心に信なりとする事なり。● 齊王が心中に疑を懐きて、周君が人を以て周最自ら太子たるを肯せずと

也。君爲多巧。最爲多詐。君何不買信貨。哉。奉養無有。愛於最也。使天下見之。

告げ來れるは詐にて、實は他の公子果を立てたさに、無理に周最より太子の位を果に譲らしめ、最を齊に追ひ出さんとする也と思はん 衆人の信ずる所の貨の意、即ち衆人に己が眞意を疑はしむることなく、眞に周最を太子に立つる事を示すべしと也 最に對する供給を吝むなく厚く之に奉養し、以て調知の契たちざらしめよ

秦令樛里疾以車百乘入周。周君迎之。以卒甚敬。楚王怒。讓周以三其重。秦客游騰謂楚王曰。昔智伯欲伐我。由遺之大鐘。載以廣車。因隨入以兵。我由卒亡。無備故也。桓公伐蔡也。號言

秦、樛里疾をして、車百乘を以て周に入らしむ。周君之を迎ふるに卒を以てし、甚だ敬す。楚王怒り、周を讓むるに、其の秦の客を重んずるを以てす。游騰、楚王に謂つて曰く、「昔智伯の、我由を伐たんと欲するや、之に大鐘を遣り、載するに廣車を以てし、因て隨ひ入るに兵を以てす。我由卒に亡ぶ。備無かりしが故なり。桓公の蔡を伐つや。號して楚を伐つと言ひ、其實は蔡を襲へり。今秦は虎狼の國也。兼ねて周を呑むの意有り。樛里疾をして車百乘を以て周に入らしむ。周君懼れ、蔡・我由を以て之を戒む。故に長兵をして前に在り、強弩をして後に在らしめ、名は疾を衛ると曰ふも、而も實は之を囚ふるなり。周君豈に能く國を愛

する無からんや。一日の國を亡して、大王を憂へしめんを恐る」と。楚王乃ち悦ぶ。

● 秦の昭王の弟名は疾。其居る里に大樛ありし故に樛里子と號せり ● 兵車百乘 ● 護衛の兵卒也 ● 周人、周の爲めに楚王に説きて一時の難を救ひたる也。秦楚は當時の二大國、周衰へ威力、どちらを恐らしめても困る也 ● 昔の智智襄子の孫名は瑤 ● 夷狄の國の名 ● 其大鐘を大きな車に載せてやり、我由の之を受けんが爲めに道を切り開きたるにつけ入りて兵を其國に入れ、以て我由を亡ぼしたり ● 詐つて楚を伐つを名としたる也 ● 併呑する、奪ひ取る ● 蔡や我由が油斷して亡びたる時の例を戒めとす ● 戈矛の類や強き弩弓を以て樛里疾の前を擁す ● 一朝にして國を滅し、延いては大王の憂ともならん事を恐れて斯かる事々しき迎へ方をなしたるのみ

伐楚。其實襲蔡。今秦者虎狼之國也。兼有吞周之意。使樛里疾以車百乘入周。周君懼焉。以蔡我由戒之。故使長兵在前。強弩在後。名曰衛疾。而實囚之也。周君豈能無愛國哉。恐一日之亡國。而憂二大王。楚王乃悦。

雍氏之役に、韓、甲と粟とを周に徵す。周君之を患へて蘇代に告ぐ。蘇代曰く、「何ぞ患へん。代能く君の爲めに、韓をして甲と粟とを周に徵せざらしめ、又能く君の爲めに高都を得ん」と。周君大に悦んで曰く、「子苟くも能くせば、寡人請ふ國を以て聽かん」と。蘇代遂に往いて韓の相國公中に見えて曰く、「公、楚の計を

雍氏之役。韓徵甲與粟於周。周君患之。告蘇代。蘇代曰。何患焉。代能爲君令韓不徵甲與粟

雍氏の役に、韓、甲と粟とを周に徵す。周君之を患へて蘇代に告ぐ。蘇代曰く、「何ぞ患へん。代能く君の爲めに、韓をして甲と粟とを周に徵せざらしめ、又能く君の爲めに高都を得ん」と。周君大に悦んで曰く、「子苟くも能くせば、寡人請ふ國を以て聽かん」と。蘇代遂に往いて韓の相國公中に見えて曰く、「公、楚の計を

於周。又能爲君得高都。周君大悅。曰。子苟能寡人請以國聽。蘇代遂往見韓相。國公中曰。公不聞楚計乎。昭應謂楚王曰。韓氏罷於兵。倉廩空。無以守城。吾攻之以饑。不過一月。必拔之。今國難氏五月。不能拔。是楚病也。楚王始不信。昭應之計矣。今公乃徵甲與粟

聞かずや。昭應、楚王に謂つて曰く、「韓氏、兵に罷れ、倉廩空しく、以て城を守る無し。吾れ之を攻むるに饑を以てせば、一月を過ぎずして必ず之を抜かん」と。今雍氏を圍む五月、抜く能はず。之れ楚の病なり。楚王始め昭應の計を信ぜず。今公乃ち甲と粟とを周に徴せば、此れ楚に病れたるを告ぐるなり。昭應此れを聞かば、必ず楚王に勸めて、兵を益し雍氏を守り、雍氏必ず抜けん。」公中曰く、「善し、然れども吾が使者已に行けり。」代曰く、「公何ぞ高都を以て周に與へざる。」公中怒つて曰く、「吾れ甲と粟とを周に徴する無からんも、亦已に多なり。何爲れぞ高都を與へん。」代曰く、「之に高都を與へば、則ち周必ず折して韓に入らん。秦之を聞かば、必ず大に怒つて、周の節を焚いて其使を通ぜざらん。是れ公、弊れたる高都を以て完き周を得る也。何ぞ與へざる。」公中曰く、「善し」と。甲と粟とを周に徴せずして、高都を與ふ。楚卒に雍氏を抜かずして去る。

● 地名。楚が韓の邑雍氏を圍みたる也 ● 甲兵即ち軍人と糧食とを周より徴せんとせり ● 周は中立の國

於周。此告楚病也。昭應聞此。必勸楚王。益兵守雍氏。雍氏必拔。公中曰。善。然吾使者已行矣。代曰。公何不以下高都與周。公中怒曰。吾無徵甲與粟於周。亦已多矣。何爲與高都。代曰。與之高都。則周必折而入於韓。秦聞之。必大怒。而焚之。節不通。其使是公。以弊高都。得完周也。何不與也。公中曰。善。不徵甲與粟於周。而與高都。楚卒不拔。雍氏而去。

小國也、其微發に應ずれば楚に怒られ、應ぜざれば韓に怒るる ● 蘇秦の弟にて策士也 ● 其上更に又韓の邑高都を取りて差上げん ● 國政は君に一任せん ● 楚の大將 ● 連年の戰爭に疲弊し、倉に米なく、城を守るに途なし ● そこへ付込みて兵糧攻にせば忽ち城を抜かん也 ● 然るに今楚が雍氏を圍み居る事五ヶ月にて抜く能はず、楚の攻めあぐみて困苦とする所也 ● 楚に向つて愈々韓の疲れ切つたとを知らせる譯也 ● 圍みて去らず ● 周に向つて徴發の命を傳ふる使者は既に行けり ● 然らば周の機嫌をそこなはぬ機に高都を周に與へたらばよろしからん ● それだけにて已に深山也 ● 節を折つて韓に入り従はん ● 周の使者の符節を焚きて使者を追ひ歸し絶交するに至らん。一國の使者は符節を持ちて來り豫め之を折半して一方を我が國邊に給し、出入の驗となす、國交絶ゆれば其の預りある符節を燒きて出入を禁ずる也 ● 蘇代の策が奇功を奏したる也

薛公以齊爲韓魏攻楚。又與韓魏攻秦。而藉兵乞食於西周。韓慶

薛公齊を以て韓・魏の爲めに楚を攻め、又韓・魏と秦を攻め、而して西周に兵を藉り食を乞ふ。韓慶、西周の爲めに薛公に謂つて曰く、「君、齊を以て韓・魏の爲めに楚を攻むること九年、而して宛・葉以北を取つて、韓・魏を強うし、今又秦を攻め

爲西周謂薛公曰。君以齊爲韓魏攻楚。九年而取宛葉以北。以強韓魏。今又攻秦以益之。韓魏南無楚憂。四無秦患。則地廣而益重。齊必輕矣。夫本末更盛。虛實有時。竊爲君危之。君不如此。令三弊邑陰合於秦。而君無攻。又無藉兵乞食。君臨函谷而無攻。令弊邑以君

て、以て之に益さんとす。韓・魏、南に楚の憂無く、西に秦の患無くば、則ら地廣うして益々重く、齊は必ず輕からん。夫れ本末更々盛んに、虚實時有り、竊に君の爲めに之を危ぶむ。君如かず、弊邑をして陰かに秦に合せしめ、而して君攻むる無く、又兵を藉り食を乞ふ無く、君、函谷に臨んで、而も攻むる無く、弊邑をして君の情を以て秦王に謂つて、「薛公必ず秦を破つて以て韓・魏を張らんとはせず、兵を進むる所以の者は、王の、楚をして東國を割いて以て齊に與へしめんとを欲するなり」と曰はしめんには。秦王、楚王を出して、以て和を爲さん。君、弊邑をして此を以て秦に恵ましめば、秦破るゝ無きを得て、楚の東國を以て自ら免るるなり、必らず之を欲せん。楚王出でば必ず齊を徳とせん。齊は東國を得て益々強く、薛は世世患無けん。秦は大に弱めずして、之を三晉の西に處かば、三晉必ず齊を重んぜん。」薛公曰く、「善し」と。因て韓慶をして秦に入らしめて、三國をして秦を攻むる無からしめ、而して西周に兵を藉り食を乞はざらしむ。

之情謂秦王曰。薛公必不三破秦以張韓魏。所以進兵者。欲西王令楚割東國以與齊也。秦王出。楚王以爲和。君令弊邑以無破。而以楚之東國自免也。必欲之。楚王出必德齊。齊得東國而益強。而薛世世無患。秦不三大弱。而處之。三晉之西。三晉必重齊。薛公曰。善。因令韓慶入秦。而使三國無攻秦。而使不藉兵乞食於西周。

三國、秦を攻めて反る。西周、魏の、道を藉らんを恐る。西周の爲めに魏王に謂つて曰く、「楚・宋、秦の三國を徳とするを利とせず。彼且に王の聚を攻めて、以て

- 齊の王族孟嘗君也 ● 齊の兵を率ゐて ● 周の臣 ● 二つの縣の名 ● 益、韓魏の強さを増さんとす
- 本盛なれば末衰へ末盛なれば本衰ふ、虚しきものも實(ミ)つる事あり實したるものも虚しくなる事あり。今齊は本にて實ちたれど、楚や秦の衰へて韓魏二國の強大となるに至らば齊は必ず之に壓せられて衰へんと也 ● 周をいふ ● 秦と妥協させて亂き君はそれを黙認して周を攻めず ● 秦の閭所。三國の兵を率ゐて函谷までは行きても其國內には攻め入らず ● 君の眞意なりとして ● 決して秦を破りて韓魏を強大ならしめんとする譯にあらず ● 今楚は秦王の勢力範圍なれば、秦王より楚王に命じて、楚の東國を割いて齊に與へしめられ度しと欲するに過ぎず ● 抑留せる楚の懷王を釋し出して國に歸らしめ、東國分與の手續を了せしむるに相違なし ● 斯く計る事によりて秦が聯合軍より攻めらるゝの危難を救ふ恩恵を彼に與へしめば ● 秦は自國の破るるなく楚の東國を齊に與ふる事によりて自國の危難を免るゝ譯ゆゑ必ず之を希望せん ● 楚王はそのお蔭で幽囚より免れ出づる譯ゆゑ、東國の少し位を取られても大いに齊を徳とせん ● 君の領有たる諸の國は ● あまりひどく弱くして了はずして ● 韓魏齊三國の先祖はもと晉の卿たりしが、晉を分割して獨立したるなれば之が體稱を爾いふ

周謂魏王曰。楚宋不利三秦之德三國也。彼日攻三王之聚以利秦。魏王懼。令軍設舍速東。韓魏易地。西周弗利。樊餘謂楚王曰。周必亡矣。韓魏之易地。韓得二縣。魏亡二縣。所以爲之者。盡包二周。多於二縣。九鼎存焉。且魏有南陽。鄆地三川。而包二周。則楚方城

秦を利せんとす」と。魏王懼れて、軍をして舍を設けて速かに東せしむ。

● 齊魏。即ち前條の續きにて和を請じて歸る也 ● 西周は魏の兵が周國の道を借りて引上げ従つて自國も供給の費有らん事を恐れたり ● 三國が秦を攻めずして引上げし故秦は三國を徳とす ● 邑落、部落などいふに同じ。魏の地をいふ也 ● 早く引上げんが爲め周の憂懼など受けず、軍をして假舎を設けて宿せしめ速かに東の方勢に歸らしむ

韓・魏、地を易ふ。西周利とせず。樊餘、楚王に謂つて曰く、「周必らず亡びん。

韓・魏の地を易ふる、韓は二縣を得て、魏は二縣を亡ふ。之を爲す所以は、盡く二周を包ねば、二縣に多り、九鼎存すべければなり。且つ魏、南陽・鄆地・三川を有ちて、二周を包ねば、則ち楚の方城の外危ふく、韓、兩上黨を兼ねて、以て趙に臨まば、即ち趙の羊腸以上危からん。故に易成るの日は楚趙皆輕からん」と。楚王恐れて、趙に因つて、以て易ふるを止む。

● 領地を交換す ● 西周それを己に都合懸しと思ふ ● 其交易成らば周亡びん ● 交易によりて魏失ふ所多きにも拘らず之を爲す譯は ● 東周西周 ● 失ふ所の二縣よりも得る所多し ● 周の國寶たる九鼎を我手に存有し得べければ也 ● 其上に更に又二周を包むれば ● 山の名。方城よりそとの地は或は魏に併吞せられ

之外危。韓策二兩上黨以臨趙。即趙羊腸以上危。故易成之日。楚趙皆輕。楚王恐。因趙以止易也。

ん 今日まで韓魏の共有なりし兩所の上黨を韓が併有す 趙の險塞の名。山形屈折羊腸の如し 領地の交易 楚も趙も共に勢力失墜して權威輕きに至らん 趙に話し込みて味方とし其力にて

秦攻魏將犀武軍於伊闕。進兵而攻周。爲周最謂李兌曰。君不如此。禁秦之攻周。趙之上計。莫如令秦魏復戰。今秦攻周而得之。則衆必多傷矣。秦欲持周之得。必不攻魏。秦若攻周而不得。前有勝魏

秦、魏將犀武の軍を伊闕に攻め、兵を進めて周を攻む。周最の爲めに李兌に謂つて曰く、「君、秦の周を攻むるを禁むるに如かず。趙の上計は、秦・魏をして復た戦はしむるに如くは莫し。今秦、周を攻めて之を得ば、則ち衆必ず多く傷かん。秦、周の得を持せんと欲せば、必ず魏を攻めじ。秦、若し周を攻めて得ずんば、前には魏に勝つの勞有り、後には周を攻むるの敗有り。又必ず魏を攻めじ。今君之を禁めん、而も秦未だ魏と講ぜざるなり、而して全趙、其をして止めしめば、必ず敢て聽かずんばあらじ。是れ君、秦を却けて周を定むる也。秦、周を去らば、必ず復た魏を攻め、魏支ふる能はずんば、必ず君に因て講ぜん。則ち君重からん。若し魏講せずして疾く之を支へば、是れ君周を存して、秦・魏を戦はしむる也。重

之勞。後有二政。周之敗。又必不攻魏。今君禁之。而秦未與魏講一也。而全趙令其止。必不攻不聽。是君却秦而定周也。秦去周。必復攻魏。魏不能支。必因君而講。則君重矣。若魏不講而疾支之。是君存周而戰秦魏也。重亦盡在趙。

犀武敗於伊闕。周君之魏求救。魏王以二上黨之急辭之。周君反。見梁圍而樂之也。綦母恢謂周君曰。溫圍

きこと亦盡く趙に在らん」と。

- 敗りの誤ならん。秦、犀武を攻め破りて更に兵を進め周を攻む
- 周の公子。前に見ゆ
- 趙の司寇即ち刑法を司る役人
- 趙は魏に隣接す、故に魏に秦との戦あれば趙は無事なれば也
- 秦の軍勢
- 周に勝ちたる利益成功を維持せんと欲せば
- 犀武の軍を敗りたる所勞
- 講和せざれば秦としては魏の逆襲を受くべき恐れあり
- 魏は秦に敗られ、秦は城ひ疲れて趙獨り全し、其全き趙が仲に入りて秦をして周を攻むる事を止めしめんとせば、必ず其言に聽従するに相違なし
- 危殆に瀕したる周を安定する譯也
- 君にすがりて趙國の援助を仰ぎ以て講和せん
- 急速強壯に
- 秦

犀武、伊闕に敗る。周君魏に之いて救を求む。魏王、上黨の急なるを以て之を辭す。周君反らんとし、梁の圍を見て、之を樂しむ。綦母恢、周君に謂つて曰く、「溫の圍は此に下らずして、又近し。臣能く君の爲めに之を取らん」と。反りて魏王に見ゆ。王曰く、「周君、寡人を怨めるか。」對へて曰く、「怨みずんば且つ誰をか怨みん。臣、王の爲めに患ふる有り。周君は謀主也、而して設くるに國を以てし

不下此。而近。臣能爲君取之。反見魏王。王曰。周君怨寡人一乎。對曰。不怨日誰怨乎。臣爲王有患也。周君謀主也。而設以國爲王。扞秦。而王無扞之也。臣見其必以國事秦也。秦悉塞外之兵。與二周之衆。以攻南陽。而兩上黨絕矣。魏王曰。然則奈何。綦母恢曰。周君形

て、王の爲めに秦を扞ぐも、而も王之を扞ぐ無し。臣、其の必ず國を以て秦に事へんを見るなり。秦、塞外の兵を悉して、周の衆と、以に南陽を攻めば、兩上黨は絶えん。」魏王曰く、「然らば則ち奈何せん。」綦母恢曰く、「周君、形小利を好まず。今王戊三萬人を許し、溫の圍を與へば、周君以て父兄百姓に辭を爲すを得、而して溫の圍を私して以て樂みと爲さば、必ずや秦に合せじ。臣嘗て聞く、溫圍の利、計歳に八十金と。周君溫圍を得ば、其の以て王に事ふるもの百二十金ならん。是れ上黨患無くして、四十金を贏すなり」と。魏王因て孟卯をして溫圍を周君に致し、而して之に戊を許さしむ。

- 前節と同時に、秦が軍を周に進めたる故、周君魏に救を求むる也
- 領内なる上黨の地の秦兵に侵されて火急なればとて援軍を斷りたり
- 梁は魏の都。圍はソノ、鳥獸を飼育する園地
- 周の臣
- 魏の邑の名
- 周に近し
- 魏より貨ひ受けて差上げん
- 再び魏の廷に引き歸して
- 援兵を斷りて内心周君の怨ま事を恐る、故に此問ある也
- 綦母恢が
- 周君が王を怨みずして誰をか怨むべき
- 天下の宗とする所の魏。但、一説に謀略あるの主也と解す。従ふべきが如し
- 國兵を布いて
- 王は周の爲めに戊兵を出して秦をよせがんとせず、斯くては
- 國境外に出て居る兵
- 軍勢と協力して
- 兩上黨の連絡

不_レ好_二小_一利。事_レ秦而好_二小_一利。今王許_二成_一三萬人。與_二溫_一圍。周君得_二以_一爲_レ辭_二於_一父兄百姓。而私_二溫_一圍。以爲_レ樂。必不_レ合_二於_一秦。是上黨無_レ患。而

絶えん 人となりの義。而して其次に原文「事秦而好小利」とあるは衍文なるべしといふ。一説には「事秦」の二字のみを衍として「形（アラハ）には小利を好まざれども小利を好む」と訓じ、又一説には全部衍とせしめて「形（アラハ）には小利を好まざるも秦に事へんとするは小利を好めばなり」と訓ず 成卒即ち邊塞を守る兵三萬人の援助を周に與へ、更に又周に 父兄は同姓の臣、百姓は百官にて異姓の臣 言譯が立つ 之を計上するに一年に八十金 周君の 其國の爲めに上納する金 差引四十金の利得 國與し 守兵を遣はして扱くる事を承諾せり

犀武敗。周使_二周_一足之_レ秦。或謂_二周_一足曰。何不_レ謂_二周_一君曰。君之_レ秦。秦周之交必惡。主君之_レ臣。又秦重。而欲_レ相者。且惡_二臣_一於_一秦。

犀武の敗るゝや、周、周足をして秦に之かしま。或ひと周足に謂つて曰く、「何ぞ周君に謂つて曰はざる、臣、秦に之かば、秦・周の交必ず悪しからん。主君の臣、又秦重んずべきも、相たらんと欲する者、且つ臣を秦に悪して、臣をして使用する能はざらしめん。臣願はくは免ぜられて行かん。君因て之を相とせよ。彼相たるを得ば、周を秦に悪せざらんと。」君秦を重んずるが故に相をして往かしむ。行く

而臣爲_レ不能_レ使矣。臣願免而行。君因相之。彼得_レ相。不_レ惡_二周_一於_一秦矣。君重_レ秦。故使_二相_一往。行而免。是輕_レ秦也。公必不_レ免。公言_レ是而行。交善_二於_一秦。是公之成事也。交惡_二於_一秦。不_レ善_二於_一公者。且誅矣。

に免ぜば、是れ秦を輕んずる也。公必ず免ぜられじ。公是を言つて行かんに、交秦に善くば、是れ公の成事なり。交、秦に悪しくば、公に善からざる者、且に誅せられんとす。

● 秦兵の進んで周を攻むるを恐れ和を秦に請ぜんが爲め也。周足は周の宰相 ● 其の譯は、臣は主君の臣なれば秦も臣を重んずべけれど、臣に代りて周の相國ならんと欲する者ありて臣の事を惡しざまに秦に告げて以て臣の使の成功せざる機妨害せん。一説に、又は有に通ずとし、「主君の臣秦の重ありて相たらんと欲する者」と訓じ、主君の臣下の中に秦の重き援助を受くる者あり其者周に相たらんと欲し云々と解す ● 宰相を免ぜられて ● 臣を免ずるを機として其代らんと欲する者を相とせよ ● 斯く周君に言ひたりとも、周君は秦を重んずるが故にわざわざ宰相たる公を往かしむる次第にて、其將に行かんとする矢先に宰相を免じては秦を輕んずる事となる故決して免ぜらざる、事なからん ● 全く君の力にて事が成功したる譯也 ● 公と仲惡しき者が公の事を秦に惡しざまに告げし故兩國の交親善を得ずとして其人誅せられん

蘇厲、周君に謂つて曰く、「韓・魏を敗り、犀武を殺し、趙を攻めて蘭・離石・祁を取りしは、皆白起なり。是れ攻みに兵を用ひて、又天命有り。今梁を攻む、梁必ず破れん。破るれば則ち周危からん。君若かず之れを止めんには、白起に謂つて

用兵。又有二天
命也。今攻梁。
梁必破。破則
周危。君不若
止之。謂白起。
曰。楚有養由
基者。善射。去
柳葉者百步
而射之。百發
百中。左右皆
曰。善。有二人
過曰。善射。可
教射也矣。養
由基曰。人皆
善。子乃曰可
教射。子何不
代我射之也。
客曰。我不能
教子。支左。屈
右。夫射柳葉。

曰へ、「楚に養由基なる者有り、射を善し、柳葉を去ること百歩にして之を射、百發百中す。左右皆善しと曰ふ。一人有り、過りて曰く、善く射る、射を教ふ可しと。養由基曰く、人皆善するに、子は乃ち射を教ふ可しと曰ふ、子何ぞ我に代りて之を射ざると。客曰く、我、子に左を支へ右を屈むるを教ふる能はず。夫れ柳葉を射る者、百發百中するも、而も善きを以て息めず、少焉にして氣力倦み、弓撥り矢鉤り、一發中らずんば前功盡きんと。今公、韓・魏を破り、犀武を殺す。而して北、趙を攻めて蘭・離石・祁を取る者は、公也。公の功や甚だ多し。今公又秦兵を以るて塞を出で、兩周を過ぎ、韓を踐みて、以て梁を攻む。一たび攻めて得ずんば、前功盡く滅びん。公若かず病と稱して出でざらんには」と。

● 蘇秦の弟 ● 秦の將 ● 工也。又巧也 ● その上に又天命の助有り ● 白起の梁を攻る事を ● 之を止むる計略としては人を遣し白起に次の如くいはしめよと也 ● 上手也、うまい ● 養由基の所に立寄りて ● 我を名人なりとしてほむ ● 我に教へる程の名人ならば宜しく我に代つて射て見よ ● 我は射術の専門家にあらず、子に左手を支へ右手を用する射術の姿勢は教へ難し、只射につきての心得を教へん ● その善く

中る頃合を以て射をやめず ● 其の結果若し一發でも射そこなはさ前の百發百中も徒勞とならん ● 國境 ● 東周西周を經、韓の地を通りて

者。百發百中。而不以善息。少焉氣力倦。弓撥矢鉤。一發不中。前功盡矣。今公破韓魏。殺犀武。而北攻趙。取蘭離石祁者。公也。公之功甚多。今公又以秦兵出塞。過兩周。踐韓。而以攻梁。一攻而不得。前功盡滅。公不若稱病不出也。

楚兵在山南。吾得將爲楚。王屬怒於周。或謂周君曰。不如令太子將軍。正迎吾得於境。而君自郊迎。令天下皆知三君之重。吾得一也。因泄之楚。曰。周君所三以事吾得者。器名曰。

楚兵山南に在り。吾得將に楚王の爲に怒を周に屬せんとす。或ひと周君に謂つて曰く、「如かず、太子をして軍正を將るて、吾得を境に迎へしめ、而して君自ら郊迎し、天下をして皆君の吾得を重んずるを知らしめ、因て之を楚に泄らして曰はんには、『周君の吾得に事ふる所以の者は、器、名を謀楚と曰ふ』と。王必ず之を求めん。而して吾得效す無くんば、王必ず之を罪せん。」

● 周の地 ● 楚の將 ● 怒つて將に周を攻めんとす。「怒」一本「怨」に作る ● 軍吏 ● 郊外に出で、之を迎へ ● 其言を漏して楚をして之を聞かして ● 周君が吾得に差上げたる物は謀楚といふ名の器也。謀楚の名は、周が吾得を抱き込んで楚を謀りたりとの意味をあらはしたるにて、固より其器あるにあらず、無實の謀計

謀楚。王必求之。而吾得無效也。王必罪之。

楚請下道於二周之閒。以臨韓魏。周君患之。蘇秦謂周君曰。除道屬之於河。韓魏必惡之。齊秦恐楚之取九鼎也。必救韓魏而攻楚。楚不能守方城之外。安能道二周之閒。若四國弗惡。君雖不欲與也。楚必將自取之矣。

也 ● 楚は其器の名が氣掛りにて必ず之を見せよと吾得に求むるならん ● 周より無貨の事にてその如き器ありざれば吾得は之を楚君に出す能はず。(七)以下殊に異説紛々たれど凡て省略す

楚、二周の閒に道して、以て韓・魏に臨まんと請ふ。周君之を患ふ。蘇秦、周君に謂つて曰く、「道を除つて之を河に屬せば、韓・魏必ず之を惡まん。齊・秦は楚の九鼎を取らんを恐れ、必ずや韓・魏を救うて楚を攻めん。楚は方城の外を守る能はず、安んぞ能く二周の閒に道せん。若し四國惡ますんば、君與ふるを欲せずと雖も、楚は必ず將に自ら之を取らんとす。」

● 征伐に向ふ ● 周に請ふ ● 周君は楚が因つて周を侵さん事を患ひたる也 ● 道を掃除し道幅を廣めて黃河に接するまで及び、以て公然楚師を迎ふる如き狀を示さば ● 周の國費 ● 山の名。前にも出づ。其以北は敵手に委ねざるを得ざるに至らん ● 上記の四國即ち韓魏齊秦が楚を惡まずば、楚は自由に行動しれて君が九鼎を與へざらんと欲するも楚は自ら之を取らん

秦、周君を召す。周君往くを難る。或ひと周君の爲に魏王に謂つて曰く、「秦、周君を召すは、將に以て魏の南陽を攻めしめんとするなり。王何ぞ兵を河南に出さざる。周君之を聞かば、將に以て秦に辭を爲して往かざらんとす。周君、秦に入らずんば、秦必ず敢て河を越えて南陽を攻めざらん。」

● 行くを欲せず ● 周に近接したる地なれば、秦が周をして之を攻めしめんとする也 ● 洛陽にて周の地也 ● 魏が河南に出兵したる事をいひわけにして

秦召二周君。周君難往。或爲二周君謂二魏王一曰。秦召二周君。將以二使二攻二魏之南陽。王何不出二兵於河南。周君聞之。將以爲辭於秦。而不至往。周君不入秦。秦必不敢越河而攻二南陽。

周君之秦。謂二周最。曰。不如也。因以原爲二太后養地。秦王太后必喜。是公有秦也。交善。周君必

周君、秦に之く。周最に謂つて曰く、「如かず、秦王の孝を譽め、因て原を以て太后の養地と爲さんには、秦王・太后必ず喜ばん。是れ公、秦を有する也。交善くば、周君必ず以て公の功とせんも、交惡しくば、周君を勸めて秦に入らしめし者、必ず罪あらん。」

● 或人周最に也。周最是周の公子。前に出づ ● 周の邑 ● 秦王の母 ● ますれば秦王は孝行の名を得、

以爲三公功。交惡。勸周君入秦者。必有罪矣。

秦欲攻周。周最謂秦王曰。爲王之國計者。不攻周。攻周。實不足以利國。而聲長天下。天下以聲長秦。必東合於齊。兵弊於周。而合天下於齊。則秦孤而不王矣。是天下欲罷

太后は領地を得て共に喜ばん ① 秦の歡心を得て其後援を有する事となる ② 周秦二國の國交圓滿に行きたる時は固より周君は秦に行く事をす、めたる君を徳とせん、若し其惡しき時は勸めたる君非せられん、故に斯く萬全の策を講じて且君自身も秦の歡心を得るがよろしからん。一説に、周君の秦に行くをす、めたるは周最にあらず他人也とし、この計によりて兩國國交よからば、周君は之を君の功とせん、惡しき時は其すすめたる人罪を得べく、どの道君は利益也と解す

秦、周を攻めんと欲す。周最、秦王に謂つて曰く、「王の國計を爲すに、周を攻めざれ。周を攻むるは、實は以て國を利するに足らずして、聲は天下を畏れしめん。天下聲を以て秦を畏れば、必ず東、齊に合せん。兵、周に弊れ、而して天下を齊に合さば、則ち秦は孤にして王たらじ。是れ天下、秦を罷らさんと欲するが故に、王に周を攻むるを勸むるなり。秦、天下と俱に罷れば、則ち令、周に横行せざらん。」

● 眞に王の國の爲めに計るに ● 其實質即ち土地人民等の利得 ● 其名義は天子を攻むる事となり天下をして畏れ忌ましめん ● 周を攻むる爲めに疲弊して ● 孤立して天下に王たる能はず ● 秦も亦天下の國々とともに毀れなば ● 秦の號令は周に自由に行はれず、弱小周の侮をも受くるに至らん

秦故勸王攻周。秦與天下俱罷。則令不横行於周矣。

宮他謂周君曰。宛恃秦而輕晉。秦飢而宛亡。鄭恃魏而輕韓。魏攻蔡而鄭亡。邾莒亡於齊。陳蔡亡於楚。此皆恃援國而輕近敵也。今君恃韓魏而輕秦。國恐傷矣。君不如使周最陰合於趙。以備秦。則不毀。

宮他、周君に謂つて曰く、「宛は秦を恃んで晉を輕んじ、秦飢ゑ宛亡ぶ。鄭は魏を恃んで韓を輕んじ、魏、蔡を攻めて鄭亡ぶ。邾・莒は齊に亡ほされ、陳・蔡は楚に亡ほさる。此れ皆援國を恃んで、近敵を輕んじたれば也。今君、韓魏を恃んで、秦を輕んず。國恐らくは傷れん。君如かず、周最をして陰かに趙に合せしめ、以て秦に備へんには。則ち毀れざらん。」

● 周の臣 ● 秦が飢饉にて宛を救ふ能はざるに乘じ晉は宛を亡ぼしたり ● 魏が蔡を攻むる爲め鄭の世話をし兼ねたるに乘じ韓は鄭を亡ぼしたり ● 邾・莒・陳・蔡等の亡びたるも亦斯くの如き譯なりし也 ● 公子周最に命じ、彼をして趙と和合せしめ、以て秦萬一の來攻に備ふべし、さすれば周國毀傷せざらん

卷第二

東周

惠王

秦興師。臨周而求九鼎。周君患之。以告顏率。顏率曰。大王勿憂。臣將東借救於齊。顏率至齊。謂齊王曰。夫秦之爲無道也。欲興兵臨周。而求九鼎。

秦、師を興し、周に臨んで九鼎を求む。周君之を患へ、以て顏率に告ぐ。顏率曰く、「大王憂ふる勿れ。臣請ふ東して救を齊に借らん」と。顏率、齊に至り、齊王に謂つて曰く、「夫れ秦の無道を爲すや、兵を興し周に臨んで九鼎を求めんと欲す。周の君臣、内に自ら畫計するに、秦に與へんは、之を大國に歸するに若かず。夫れ危國を存するは美名也、九鼎を得るは厚實也。願はくは大王之を圖れ」と。齊王大に説び、師五萬人を發し、陳臣思をして將として以て周を救はしむ。而して秦の兵罷む。齊將に九鼎を求めんとす。周君又之を患ふ。顏率曰く、「大王憂ふる

周之君臣内自畫計。與秦不若歸之。大國。夫存危國。美名也。得九鼎。厚實也。願大王圖之。齊王大說。發師五萬人。使陳臣思將以救周。而秦兵罷。齊將求九鼎。周君又患之。顏率曰。大王勿憂。臣請東解之。顏率至齊。謂齊王曰。周頼大國之義。得君臣父子相保也。願

勿れ。臣請ふ東して之を解かん」と。顏率齊に至つて、齊王に謂つて曰く、「周、大國の義に頼つて、君臣父子相保つを得たり。願はくは九鼎を獻せん。識らず、大國何れの塗にか之れ従りて、之を齊に致さん。」齊王曰く、「寡人將に徑を梁に寄せんとす。」顏率曰く、「不可なり。夫れ梁の君臣、九鼎を得んと欲して、之を暉臺の下、少海の上に謀ること、其日久し。鼎、梁に入らば、必ず出でじ。」齊王曰く、「寡人將に徑を楚に寄せんとす。」對へて曰く、「不可なり。楚の君臣九鼎を得んと欲して、之を葉庭の中に謀ること、其日久し。若し楚に入らば、鼎必ず出でじ。」王曰く、「寡人終に何れの塗にか之れ従りて、之を齊に致さん。」顏率曰く、「弊邑固より竊かに王の爲めに之を患ふ。夫れ鼎は醜壺鬻販の效く、耳もて懐挾提挈して、以て齊に至る可き者に非ず。烏集、烏飛、兔興、馬逝の效く、灑然として齊に至るべき者にも非ず。昔、周の殷を伐ちて九鼎を得るや、凡そ一鼎にして九萬人之を輓く。九九八十一萬人なり。士卒師徒、械器被具、備ふる所以のもの、之に

獻九鼎。不識大國何塗之從。而致之齊。齊王曰。寡人將寄徑於梁。顏率曰。不可。夫梁之君臣。欲得九鼎。謀之。少海之上。其日久矣。鼎入。梁。必不出。齊王曰。寡人將寄徑於楚。對曰。不可。楚之君臣。欲得九鼎。謀之。於葉庭之中。其日久矣。若入楚。鼎必不出。王

稱ふ。今大王縱ひ其の人有りとも、何れの塗にか之れ従りて出さん。臣竊に大王の爲に私に之を憂ふ。」齊王曰く、「子の數々來るは猶ほ與ふる無からん耳。」顏率曰く、「敢て大國を欺かず。疾かに従つて出す所を定めよ。弊邑鼎を遷して、以て命を待たん」と。齊王乃ち止む。

● 軍 ● 周の臣 ● 退いてよく考へ計つて見るに、どうせ九鼎を人手に渡す以上暴虐なる秦に與ふるよりも有違なる齊に呈する方可なり ● 將に亡びんとする國を保存するはよき名聲也、天子の神器たる九鼎を得るは厚き實利也 ● 高と御考へ下され ● 田臣思也。田氏もと陳氏といふ ● 之を聞きて引揚げたり ● 解決せん ● 高義の御蔭にて ● 公にしては君臣、私にしては父子、皆保んずるを得たり ● どの道路よりして御國に取寄せ給ふか。齊周は境疆の國ならぬ故に特に之を以て齊王を困らす也 ● 梁(魏の別名)の道を借りて通して貰はん ● 中途にて九鼎を奪ひ取らんとの策を ● 臺の名 ● 澤の名 ● 必らず奪ひ取られてまた出てざるべし ● 其奪取の策を葉縣の宮廷の中に謀る。庭は廷に同じ、朝廷也 ● 周を指していふ自稱 ● 酢德利や醬油瓶 ● 「耳」の字を衍とす。姑く一説に従ひて「耳もて」と譯す ● ふところにかへ、脇に挟み、手にさげたづまふ ● 鳥が集まり、鳥が飛び、鬼がびよん／＼と興き上り、馬の馳せ行く如く、自ら無造作にすらし／＼と至り得る者にもあらざ ● 士卒は鼎を警衛する甲士歩卒、師徒は鼎を轍く人夫 ● 被服道具 ● 其人數相當に深山の用意を爲したり ● 一本「切」に作る ● やはり鼎を惜みて難題を保持り、其結果讓與せざるに置かうと思ふならん ● 動座して送り出すべき用意を十分にし

曰。寡人終何塗之從。而致之齊。顏率曰。弊邑固竊爲大王患之。夫鼎者。非下效三醜。壺罍。豈耳。可懷挾提挈。以至齊者。非下效三鳥。集鳥。飛。鬼。與。馬。逝。灘。然。可至於齊者。昔周之伐殷。得九鼎。凡一鼎而九萬人輓之。九九八十一萬人。士卒師徒。器械被具。所以備者。稱此。今大王縱有其人。何塗之從而出。臣竊爲大王私憂之。齊王曰。子之數來者。猶無與耳。顏率曰。不三敢欺大國。疾定所從出。弊邑遷鼎以待命。齊王乃止。

秦攻宜陽。周君謂趙累曰。子以爲如何。對曰。宜陽必拔也。君曰。宜陽城方八里。材士十萬。粟支數年。公仲之軍二十萬。景翠以楚之衆。臨山而救之。秦必無功。對曰。甘茂竊

秦、宜陽を攻む。周君、趙累に謂つて曰く、「子以て如何と爲す。」對へて曰く、「宜陽必ず拔けん。」君曰く、「宜陽城は方八里、材士十萬、粟數年を支ふ。公仲の軍二十萬、景翠、楚の衆を以て、山に臨んで之を救ふ、秦必ず功無けん。」對へて曰く、「甘茂は罽旅なり。宜陽を攻めて功あらば、則ち周公且也、功無くんば、則ち迹を秦に削られん。秦王、羣臣父兄の議を聽かずして、宜陽を攻む。宜陽拔けずんば、秦王之を恥ぢん。臣故に曰く拔けん」と。君曰く、「子、寡人の爲めに謀らば、且に奈何せんとする。」對へて曰く、「君、景翠に謂つて曰へ、「公、爵は執珪たり、官は柱國たり。戰つて勝つとも則ち加ふる無く、勝たずんば則ち死せん。如かず、

旅也。攻宜陽。面有功。則周公且也。無功。則削迹於秦。秦王不聽。羣臣父兄之議。而攻宜陽。宜陽不拔。秦王恥之。臣故曰。拔。君曰。子爲寡人一謀。且奈何。對曰。君謂景翠曰。公爵爲執珪。官爲柱國。戰而勝。則無加焉矣。不勝則死。不如此。背秦援宜陽。公進兵。秦恐。公之乘其

秦に背いて宜陽を援けんには。公、兵を進めば、秦、公の其弊に乗ぜんを恐るゝや、必ず寶を以て公に事へん。公仲、公の己が爲めに秦に乗するを慕ふや、亦必ず其寶を盡さん」と。秦、宜陽を抜く。景翠果して兵を進む。秦懼れて遽かに煮蕞を効し、韓氏果して亦重寶を致す。景翠、城を秦に得、寶を韓に受けて、東周を徳とす。

● 韓の邑 ● 周の臣 ● 宜陽の戦はどうなると思ふか ● 落城せん ● 材能武勇ある士 ● 數年を維持すべき糧食あり ● 韓の相國 ● 楚の將 ● 楚と韓との國境なる要塞の山に陣を張りて ● 秦軍の大將甘茂は他國より來り仕へたる臣にて世臣にあらず ● 昔周の大宰相たりし周公且の如く秦の尊重信任を受けん ● 秦國より追放せられん。即ち此役は甘茂に取りては浮沈のわかる、大問題なれば大いに盡策盡戰せん ● 果して宜陽が抜けては我周と近き所ゆゑ、我にとりても大問題也、汝如何なる謀ありや ● 楚の最高の爵。功臣を爵し賜ふに圭を以てす、附屬國の君と同等也 ● 楚の卿にて最高の役 ● これ以上尊貴を加ふる無し ● 誅せられん ● 此句下文に應ぜず難解也。一説に「不如特秦拔宜陽」の誤とし、又一「不知晉(マツ)秦拔宜陽」の誤とす。或は原文のまゝにて「秦に背く」は秦軍に背きて陣し之とわかへ戦はざるの意「援く」は秦が既に宜陽を抜きたる後、軍を進めて其弊に乗するの義と解す。強ひて愚見を加へんに、「背」は或は「晉(マツ)」の誤ならん、「援」は原文のまゝにて可、秦を背ちて宜陽を援ぐるに如かず」と訓じ「秦の宜陽を抜くを待

弊也。必以寶事公。公仲慕秦也。亦必盡其寶。秦拔宜陽。景翠果進兵。秦懼。遽效煮蕞。韓氏果亦效重寶。景翠得城於秦。受寶於韓。而德東周。

ちて而して後之を援けて以て秦の弊に乗するに如かず」と解せば如何 ● 宜陽城後の變態 ● 願ふ、希望すありたけの寶を出だして公に事へん ● 以上の説景翠に用ひられ、景翠は豫定の通り落城の後に進軍せる也 ● 秦の邑 ● 煮蕞をいふ ● これも東周の忠告を聞きたる故を思ひ浮べ、東周を恩徳ある者とせり、從て東周は危難を免れ西に楚國の援を得る事となりたる譯也

東周、西周と戦ひ、韓、西周を救ふ。東周の爲めに韓王に謂つて曰く、「西周は故天子の國也、名器重寶多し。兵を按じて出すこと勿れ。以て東周に徳す可く、西周の寶盡す可し。」

● 或策士が也 ● 有名なる器物、貴重なる寶物 ● 今にも援兵を歸出す如く見せ掛けて其寶は之を控へ留めて出さず ● 恩をきせる ● 西周は早く韓の援兵を得んとて其重寶を悉く韓に呈せんとも

出。可以徳東周。西周之寶可盡矣。

東周與西周。爭。西周欲和。於楚韓。齊明。

東周、西周と争ふや、西周、楚・韓に和せんと欲す。齊明、東周の君に謂つて曰く、「臣、西周の、楚・韓に寶を與へて、之れをして己が爲めに地を東周に求めしめんこ

謂東周君曰。臣恐西周之與楚韓寶。令西之爲已求地於東周也。不如此謂楚韓曰。西周之欲入寶。持二端。今東周之兵。不爲西。西周之寶。不爲楚。韓欲得寶。即且趣我攻西周。西周寶出。是我爲楚韓取寶以德之也。西周弱矣。

東周欲爲稻。西周不下水。東周患之。蘇子謂東周君曰。臣請使西

とを恐る。如かず、楚・韓に謂つて、「西周の寶を入れんと欲するや、二端を持す。今東周の兵、西周に急にせずんば、西周の寶は楚・韓に入らじ」と曰はんには。楚・韓寶を得んと欲せば、即ち且に我を趣して西周を攻めしめんとす。西周の寶出でば、是れ我れ楚韓の爲めに、寶を取つて以て之に徳する也。西周は弱まらん。

● 和して以て己の援となす ● 策士の名 ● 二國に呈せんとするにつきて ● 二途を掛けたり決して誠實の心にあらず。即ち形勢を察して國危急ならんには入るべく、危急ならざらんには入れじと思ふ也 ● 火急に進撃せざれば ● 西周を援助するはるか、あべこべに我を促して早く西周を攻めしめんとすべし ● 出て二國の手に入らば ● 二國に恩をさせる譯也。二國我が恩を思ひて西周を援けずば西周は弱ららん

東周、稻を爲らんと欲するに、西周、水を下ささず。東周之を患ふ。蘇子、東周の君に謂つて曰く、「臣請ふ西周をして水を下さしめん、可ならんか」と。乃ち往いて西周の君に見えて曰く、「君の謀過てり。今水を下さざるは、東周を富す所以也。今其民皆麥を種う。他の種無し。君若し之を害せんと欲せば、若かず、一

たび爲めに水を下して、以て其の種うる所を病まさんには。水を下さば、東周必ず復た稻を種るん。稻を種るば復た之を奪へ。是の如くせば、則ち東周の民、一に西周を仰いで、命を君に受けしむ可し。」西周の君曰く、「善し」と。遂に水を下さす。蘇子亦兩國の金を得たり。

● 到底西周より水をふさいで下さらぬものとあきらめ、乾燥地に適する麥を種え、他の穀種なし ● 其種またる麥を奪す ● 水をふさぎて下さす ● 死活は一に西周の手にある事ゆゑ、西周を仰ぎ慕ひて其命令を受くるに至らん ● 坊本「遂下水」の三字なし ● 兩方から禮の金をもちたり

周下水。可乎。乃往見西周之君。曰。君之謀過矣。今不下水。所以富東周也。今其民皆種麥。無他種矣。君若欲害之。不若一爲下水。以病其所種。下水東周必復種稻。種稻而復奪之。若是則東周之民。可令一仰西周。而受命於君上矣。西周君曰。善。遂下水。蘇子亦得兩國之金也。

昭獻在陽翟。周君將令相國往。相國將不欲。蘇厲爲之謂周君曰。楚王與魏王

昭獻、陽翟に在り。周君將に相國をして往かしめんとす。相國將に欲せざらんとす。蘇厲之が爲に周君に謂つて曰く、「楚王の魏王と遇ふや、主君、陳封をして楚に之かしめ、向公をして魏に之かしむ。楚・韓の遇ふや、主君、葉公をして楚に之かしめ、向公をして韓に之かしむ。今昭獻は人主に非ず。而るに主君、相國を

遇也。主君令陳封之。楚令向公之。魏。楚韓之遇也。主君令葉公之。楚令昭獻。非人主也。而主君令相國往。若其王在陽翟。主君將令誰往。周君曰。善。乃止其行。

して往かしめんとす。若し其王陽翟に在らば、主君將に誰をして往かしめんとする。周君曰く、「善し」と。乃ち其行を止む。

- 楚の相臣 ● 地名。何か用件にて ● 楚は大國ゆゑ特に敬意を表せん爲め、主位の大臣たる相國を往かしめんとせる也
- 「將」の字正解には衍なりとし、安井息軒は「心ニ往クヲ欲セス、而シテ口敢テ言ハズ、今將ニ其意ヲ王ニ白サントス、故ニ將ニ欲トイフ」といへり
- 兩國の君に敬意を表せんが爲めに也 ● 楚王と韓王 ● これら陳封、向公、葉公は皆周に仕へて位相國の下にあり。人主の命合に敬意を表するすなは斯く相國以下をして往かしめし先例あり然るに ● 此語の裏面には、主君自ら往き給ふ外なからん、斯くては御威光にも關せずの意を含めるならん ● 相國の陽翟に往くを止めたり

秦假道於周以伐韓。周恐於假之而惡於韓。不假而惡於秦。史黶謂周君曰。君何不令人謂韓

秦、道を周に假りて、以て韓を伐たんとす。周、之を假さば韓に惡まれ、假さずば秦に惡まれんを恐る。史黶周君に謂つて曰く、「君何ぞ人をして韓の公叔に謂つて曰はしめざる、秦敢て塞を絶つて韓を伐つものは、周を信すれば也。公何ぞ周に地を與へ、重使を發して楚に之かしめざる。秦必ず疑うて周を信ぜざらん。是

公叔曰。秦敢絶塞而伐韓者。信於周也。公何不與周地。發重使使楚。秦必疑不信周。是韓不伐也。又謂秦王曰。韓強與周地。將以疑周於秦。寡人不致弗受。秦必無辭而令周弗受。是得地於韓。而聽於秦也。

れ韓伐たれざる也」と。又秦王に謂つて曰へ、「韓強ひて周に地を與へ、將に以て周を秦に疑はしめんとす。寡人敢て受けずんばあらず」と。秦必ず辭の而く周をして受けざらしむるもの無からん。是れ地を韓に得て、秦に聽かるゝ也。

- 韓の相國 ● 秦が大體にも國の邊塞を損ざり渡りて、遠く韓を伐つ所以は、周が我に味方すと信ずれば也
- 重き使者を秦の強敵たる楚に往かしめよ ● 斯様なる譯なれば、如何にも其計略に乗りたる如く見せ掛けてこれを受けざるを得ざるハメ也 ● 其地を受けてはならぬと整しとひき辭はなからん ● 秦よりも其事を取認許容せらるゝ譯也

楚攻雍氏。周賴秦韓。楚王怒周。周君患之。爲周謂楚王曰。以王之強而怒周。周恐必以國合

楚、雍氏を攻む。周、秦・韓に頼す。楚王、周を怒り、周君之を患ふ。周の爲めに楚王に謂つて曰く、「王の強を以てして周を怒らば、周恐れて、必ず國を以て粟を與ふる所の國に合せん。則ち是れ王の敵を勁くする也。故に王速かに周の恐を解かんには如かず。彼れ前に罪を得て後に解くを得ば、必ず厚く王に事へん。」

楚、雍氏を攻む。周、秦・韓に頼す。楚王、周を怒り、周君之を患ふ。周の爲めに楚王に謂つて曰く、「王の強を以てして周を怒らば、周恐れて、必ず國を以て粟を與ふる所の國に合せん。則ち是れ王の敵を勁くする也。故に王速かに周の恐を解かんには如かず。彼れ前に罪を得て後に解くを得ば、必ず厚く王に事へん。」

- 韓の邑 ● 此時秦が韓を救ひたる故周は韓を此兩國にわくりたる也、頼は頼也、「カテオクル」と訓ずるも可

於所與粟之國。則是勤王之敵也。故王不如速解周恐。彼前得罪。而後得解。必厚事王矣。

ならん 或人が 重に自ら糧食を與へたる所の國即ち秦魏の二國に國を以て合するならん 糧を送りたる事を許し、速かに周の恐れを解くが可也 恐を解く、即ち許容さるゝを云ふ

蘇厲爲周最。謂蘇秦曰。君不如令王聽三。最以地合於魏。趙。故必怒。合於齊。是君以合齊。與強楚。吏產子。君若欲因最之事。則合齊者。君也。割地者。最也。

蘇厲、周最の爲めに蘇秦に謂つて曰く、「君如かず、王をして最に地を以て魏・趙に合するを聽さしめ、故らに必ず怒らして齊に合せしめんには。是れ君、齊に合せしめしなるを以て、強楚と吏子を産けん。君若し最の事に因らんと欲せば、則ち齊に合せしむる者は君也、地を割く者は最なり。」

蘇秦の弟 此章異説紛々、從つて訓譯亦大いに異なるものあり、姑く正解に從ふ。正解に曰く「君ハ秦(蘇秦)ヲ指ス也、王ハ周王也、應ハ許也、地ヲ以テハ地ヲ割クヲ謂フ也、吏產子、驍フラクハ當ニ更賢也(こもく)君を賢けん)ニ作ルベシ、實は助也……上下ヲ按ズルニ、最ハ齊ト善キ者蓋シ最(周最)モト地ヲ以テ齊ニ合セント欲スルモ王ノ聽サシランヲ恐ル、故ニ先ヅ許リテ地ヲ以テ二國ニ合スルヲ以テ之ヲ試ミル也、周乃チ秦ニ謂ツテ曰ク、王ヲシテ最ニ地ヲ割イテ二國ニ合スルヲ許サシメ、特ニ必ラズ最ヲ怒ラシ、而シテ地ヲ以テ齊ニ合スルニ如カズ、齊ハ楚ト善シ、是レ君齊ニ合スルノ故ヲ以テ齊ト楚トコモル君ヲ賢ケン」 最が地を割かんとするに從ひ轉じて地を以て齊に合する時は、齊に合せし者は蘇秦也。地を割きし者は最也。齊王は必らず二人を善せん

謂周最曰。仇赫之相宋。將以觀秦之應。趙宋不敗。將與三國。宋合於東方。以孤秦。亦將觀韓魏之於齊也。不固。則將與宋。趙宋於三國。公何不令人謂韓魏之王。曰。欲秦趙之相。實乎。何不下視中之不可離。則秦趙必相。實以合於王。

周最に謂つて曰く、「仇赫の宋に相たるや、將に以て秦の趙・宋に應じて、三國を敗るを觀んとするなり。三國敗れずんば、將に趙・宋と東方に合して、以て秦を孤にせんとするなり。亦將に韓・魏の齊に於けるを觀んとするなり。固からずんば、則ち將に宋と三國を敗らんとす。則ち趙・宋を三國に賣らんとする也。公何ぞ人をして韓・魏の王に謂つて曰はしめざる、『秦・趙の相賣るを欲せんか、何ぞ周最をして兼ね相たらしめ、之に離る可らざるを視さざる、則ち秦・趙必ず相賣りて以て王に合せん』と。」

或人が 趙が仇赫をして宋に相たらしめし事趙武靈策に見ゆ 韓魏齊 仇赫は手の裏をかへず如く今度は趙宋と共に東方の三國に合體し、以て秦を孤立にせんとする也 齊に對する關係の程度を 其交際關係堅固ならざれば趙宋聯合して三國を破らんとす 「趙宋と」の誤説ならん 「則」の上に「固」の一文字を補ふべしとの一説最も從ふべきに似たり。即ち、若し交際固からば趙宋二國を欺きて三國の利益を圖らんと考へ居る也の意 互に相欺きて聯合せざらん事を欲せば 韓魏兩國の宰相に兼任せしめ。原文「合周最」の「合」は「合」の誤 秦趙二國に對して韓魏二國の離るべからざるを示すべし さらば秦趙互に欺きあひて何れも韓魏の王に親密ならんと圖るならん。正解に曰く「此章ヲ按ズルニ、仇赫ガ趙宋ヲ賣ルノ事ヲ舉ゲ

也。
 爲周最謂魏
 王曰。秦知趙
 之難與齊戰
 也。將恐齊趙
 之合也。必陰
 助之。趙不取
 戰。恐秦不己
 收也。先合於
 齊。秦趙爭齊。
 而王無人焉。
 不可。王不夫
 周最。合與收
 齊。而以兵之
 急。則伐齊。無
 因事也。

テ、周最ニ秦趙ヲ賣リテ以テ魏魏ニ秦不相タランコトヲ勸ムル也、秦趙ノ相賣ルハ乃チ最ノ秦趙ヲ賣ル所以也」
 周最の爲めに魏王に謂つて曰く、「秦、趙の齊と戦ふを難かるを知るや、將に齊の合せんことを恐れて、必ず陰かに之を勁くせんとす。趙敢て戦はざるは、秦の己を收めずして、先づ齊に合せんを恐るれば也。秦、趙、齊を争へるに、王、人なくんば不可なり。王、周最を去てず、與を合せ齊を收めよ。而して兵を以て之れ急にせば、則ち齊を伐つは事に因る無き也。」

● 或人が 趙が齊に合する時は、益々齊の強くなる事を恐れ、かげにまはりて密かに趙に加勢し之を強くして齊に抗せしめんとす ● 秦が自分の方を置き去りにして齊と聯合せん事を恐る、故に趙は戦はざる也 ● 互に相疑うて齊に取らんとしつゝあるに ● 魏の爲に齊と聯絡を謀る人物 ● 周最は齊と和親ある人物なるが、以上の譯ゆる之を捨てずしてうまく利用し。與は與國即ち同盟國をいふ ● 斯く計りて齊を取入れて置きて後、急に兵を以て之を伐たば、齊を伐つ事は極めて容易にて何かうまく乘ずべき事を求めるまでも無き也。「王周最」以下異説紛々最も難解也、姑く私見を以て諸家の説を折衷す。思ふに、周最は齊と和親なり、而して當時魏にあり、魏王國を屠して齊と戦はんとの意あるを知り、甚だ之を欲せず、人あり周最の爲めに説いて二國の間を融和せしめんとする策にて、「兵を以て之れ急にせば」といふは、王の心を動かさんと亡辭のみ、策士の眞意は固よりこゝにあらず

謂周最曰。魏
 王以國與先
 生。貴下合於秦
 以伐齊。薛公
 故主。輕忘其
 薛。不顧其先
 君之丘墓。而
 公獨修虛信
 爲茂行。明羣
 臣據故主。不
 與伐齊者。產
 以忿強秦。不
 可。公不如謂
 魏王薛公曰。
 請爲王入齊。
 天下不能傷
 齊。而有變。臣
 請爲救之。無
 變。王遂伐之。
 且臣爲齊奴

周最に謂つて曰く、「魏王、國を以て先生に與すは、秦に合して以て齊を伐つを貴べばなり。薛公は故主、其薛を輕んじ忘れ、其先君の丘墓を顧みず。而るに公獨り虚信を修め、茂行を爲し、羣臣に故主に據るを明かにし、與に齊を伐たざる者は、産するに強秦を忿らすを以てす、不可なり。公如かず、魏王薛公に謂つて曰へ、「請ふ王の爲めに齊に入らん。天下、齊を傷ふ能はざらん。而して變有らば、臣請ふ爲めに之を救はん。變無くば王遂に之を伐て。且つ臣は齊の奴たりき。王の天下に交るに累するが如きは不可なり。王、臣に賜を爲すや厚し。臣齊に入らば、則ち王亦齊の累無けん」と。」

● 國政をゆだねるは ● 周最が秦と聯合して以て齊を伐つ計に出でん事を尊重して也 ● 田文即ち孟嘗君也。もと齊の薛邑を領す、田文は故主の國なるにも拘らず、其舊領薛をも輕んじ忘れ、先代の墳墓の齊に在るをも顧みずして、魏の爲めに謀りて齊を伐たんとす ● つまらぬ信義立てをし、盛美の行を爲して魏の多くの臣下に故主齊の義に據る事を明示し、齊を伐つ計謀にあづかり力を入れずして、其結果秦の怒りを産する如き事を爲すは甚だ不可也 ● 萬一天下の諸侯が魏を討つ如き事あらば ● 齊王にすゝめて魏を救はん ● 斯くの如き變なくば王棄志を遂行して齊を討て ● 嘗て齊に臣として仕へたる事あり ● 齊は天下のにくまれ者也。今嘗て

也。如累王之交於天下。不可。王爲臣賜一厚矣。臣入齊。則王亦無齊之累也。

齊に仕へし臣が魏に在るの故を以て、魏が天下の難を受け、併せて天下よりにくまる、如き事ありてはよるしからず。臣の身安かるべきは勿論、王も亦齊に關する凡ての厄介無からん。此策思ふに周最をして秦の忿に起因する禍を避けしめんとならん。

趙取周之祭地。周君患之。告於鄭朝。鄭朝曰。君勿患也。臣請以三十金復取之。周君予之。鄭朝獻之。趙太卜。因告以祭地事。及王病使卜之。太卜譖之曰。周之祭地爲祟。趙乃還之。

趙、周の祭地を取る。周君之を患へ、鄭朝に告ぐ。鄭朝曰く、「君患ふる勿れ。臣請ふ三十金を以て復之を取らん」と。周君之を予ふ。鄭朝之を趙の太卜に獻じ、因て告ぐるに祭地の事を以てす。王病みて之を卜せしむるに及びて、太卜之を譖めて曰く、「周の祭地崇を爲す」と。趙乃ち之を還す。
① 神祭の用に供ふる地 ② 卜官の長 ③ 周の祭地を強奪したる罪を責む

杜赫欲重景翠於周。謂周君曰。君之國

杜赫、景翠を周に重くせんと欲して、周君に謂つて曰く、「君の國は小なり、君の重寶珠玉を盡して、以て諸侯に事ふ、察せざる可らざる也。之を譬ふるに羅を

小。盡君之重寶珠玉。以事諸侯。不可不察也。譬之。如羅。羅者。張於無鳥之所。則終日無所得矣。張於多鳥處。則又駭鳥矣。必張於有鳥無鳥之際。然後能多得鳥矣。今君將施於大人。大人輕君。施於小人。小人無財焉。君必施於今之窮士。不必且爲大人者。故能得欲矣。

張る者の如し。鳥なきの所に張れば、則ち終日得る所無く、鳥多き處に張れば、則ち又鳥を駭かさん。必ず鳥あり鳥なきの際に張りて、然して後能く多く鳥を得ん。今君將に大人に施さんとすとも、大人は君を輕んぜん。小人に施さば、小人は以て求む可き無くして、又財を費さん。君必ず今の窮士の、必ず且に大人たらんとする者に施せ。故に能く欲するを得ん。
① 楚の將景翠が周より重んぜられ、周に對して賞日のつく機にせんとて ② よく考へて利益のある機になさざるべからず ③ 鳥を捕ふるのみ ④ 鳥が駭いて飛び去り、得る所なからん ⑤ 鳥が居るでもなく居らぬでもなくどちらつかずの境目 ⑥ 大人は事を用ふる重臣也。厚遇を重臣に施すとも重臣は別段有りがたしとも思はず君を輕んぜん、これ鳥多き所に羅を張りて鳥を駭すの類也 ⑦ 小人は無力の賤臣、又小臣を厚遇したりとて、さる小臣に求むべき所もなく、又無益に財を費す類也、これ鳥なき所に網を張ると一般 ⑧ 現今は困窮なれども他日大人とならんとする者を厚遇せよ、これ即ち鳥あり鳥なきの際に當る也。原文「不」は「之」の誤 ⑨ 君が欲する所のものを得、御希望通りにならん

三國隘秦。周

三國、秦を隘す。周其相をして秦に之がしめんとせしが、秦の輕ぜんを以ひ、

令其相之輕也。以秦之輕也。留其行。有人謂相國曰。秦之輕重。未可知也。秦欲知三國之情。公不如遂見秦王。王曰。請爲王聽中東方之處。秦必重公。重公。是公重周。以取秦也。齊重。故有周。而巳取齊。是周常不失重國之交也。

昌他亡西周之東周。盡輸西周之情於

其行を留む。人あり相國に謂つて曰く、「秦の輕重は未だ知る可らざる也。秦、三國の情を知らんと欲す。公如かず、遂に秦王に見えて、「請ふ王の爲に東方の處を聽かん」と曰はんには。秦必ず公を重んぜん。公を重んぜば、是れ公、周を重んじて以て秦を取るなり。齊は重し、故より周を有つ、而して已に齊を取る。是れ周、常に重國の交を失はざる也。」

● 距(フ)とく、韓魏齊三國聯合して秦の軍に當る ● 秦の輕視せんことを思ひ申途より行くを留めんとす ● 秦に使する周の相 ● 輕んずるか重んずるか ● 實際の事情 ● 三國の處置振を聽き探らん。一説には、東方を如何に處分する御考か承りたし、其上にて愚考を申上げんの意と解す ● 秦の心を取りて之に交を入る ● 正解に「齊ハ重國也、固ヨリ周ヲ攻メテ好ミヲ爲ス、周亦既ニ交ヲ齊ニ取リ、今又秦ニ取ル、是常ニ重國ノ交ヲ失ハザル也」と。一説「已に齊」の「齊」字は「秦」の誤となす

昌他西周亡けて東周に之き、盡く西周の情を東周に輸す。東周大に喜び、西周大に怒る。馮雎曰く、「臣能く之を殺さん。君金三十斤を予へよ」と。馮雎人をし

東周。東周大喜。西周大怒。馮雎曰。臣能殺之。君予金三十斤。馮雎使人操金與書。閉遣中昌他。曰。告昌他。事可成。勉成之。不可成。亟亡來。事久且泄。自令身死。因使三人告東周之候。曰。今夕有姦人當入者。一矣。候得而獻東周。東周立殺昌他。

て金と書とを操つて、閉かに昌他に遣らしめて曰く、「昌他に告ぐ、事成す可くんば勉めて之を成せ。成す可らずんば、亟かに亡け來れ。事久しければ且に泄れて、自ら身をして死なしめんとす」と。因つて人をして東周の候に告げしめて曰く、「今夕姦人の當に入るべき者あらんと。候得て東周に獻す。東周立ろに昌他を殺せり。」

● 告げ語りたり ● 西周の策士の名 ● 其間隙を伺ひて之を獻る ● 手紙の文言也。この手紙によりて昌他は西周の間諜なりとの疑を東周に起さしめんと也 ● 愚圖々々と手間取り居りては ● 我と我身を殺す者也 ● 即ち東周の爲めに殺されんと也 ● 偵察吏 ● 上記への手紙を持参せる使者を捕へしめ、因て以て昌他を疑はしめんとす ● 偵察吏は其手紙所持の使者を捕へて ● 果して間諜と信じたる也

有姦人當入者一矣。候得而獻東周。東周立殺昌他。

昭翦、東周と惡し。或ひと昭翦に謂つて曰く、「公の爲めに陰計を畫せん。」昭翦曰く、「何ぞや。」曰く、「西周甚だ東周を憎み、嘗に東周と楚と惡しからんを欲す。西周必ず賊をして公を賊せしめ、因つて東周なりと宣言して、以て之を王に惡せ

也。曰。四周甚。憎東周。齊欲東周與楚惡。四周必令賊賊公。因宜言東周也。以惡之於王也。昭翦曰。善。吾又恐東周之賊已。而以輕四周。惡之於楚。遠和東周。

昭翦曰く、「善し。吾又東周の己を賊して、以て西周を軽くし、之を楚に惡せんとを恐る」と。遽かに東周に和す。

● 楚の和 ● 仲想し ● 常也 ● 昭翦、昭毅 ● 昭翦を殺したるは東周也といひふらし ● 東周を楚王に惡しく思はせん ● 昭毅して ● 西周を楚に取りなすべき自分を無きものにし、以て西周の威權を輕からしめ、之を楚王にむく思はせて二者の間を離間せん ● 和す、和親す

周最謂呂禮曰。子何不以齊攻齊。臣請令齊相子。子以齊事秦。必無處矣。子因令最居魏。以共之。是天下制於子也。子東重於齊。西

周最、呂禮に謂つて曰く、「子何ぞ秦を以て齊を攻めざる。臣請ふ齊をして子を相とせしめん。子、齊を以て秦に事へば、必ず處無からん。子因て最をして魏に居て以て之を共にせしめば、是れ天下子に制せらるゝ也。子、東齊に重んぜられ、西秦に貴ばる。秦・齊合はゞ、則ち子常に重からん。」

● 秦の將。一説周最の上に「魯」の字を加ふべし、即ち或人が「周最の爲めに呂禮に謂つて曰ふ」也と。● 秦が齊を攻むるは魯がさせる謂ゆえ、齊は攻めらるゝを免れん爲めに魯を相とせん也。一説「攻」は「救」の誤と

重於秦。秦齊合。則子常重矣。

す ● 處は他に制せらるゝを、即ち處無からんは身安からんの謂也。坊本「魯」を「齊」に作る ● 相親じて事を爲さしめば

謂薛公曰。周最於齊王厚也。而逐之。聽祝弗相。呂禮者。欲取秦也。秦齊合。弗與。禮重矣。有齊。秦必輕君。君弗如急北兵。趙趙以秦魏。收周最。以爲後行。且反齊王之信。以禁中天下之率。齊無秦。天下果弗必走。齊王誰與爲其國。

薛公に謂つて曰く、「周最の齊王に於けるや厚し。而るに之を逐ひ、祝弗に聽いて呂禮を相とする者は、秦を取らんと欲すれば也。秦・齊合はゞ、弗と禮と重からん。齊秦有らば必らず君を輕んぜん。君如かず、北兵を急にして、趙と秦・魏とを趨がし、周最を收めて以て後行と爲さんには。且に齊王の信に反き以て天下の率ふを禁せんとす。齊、秦なくんば、天下集りて弗必ず走らん。齊王誰と與にか其國を爲めん。」

● 或人が薛公田文に ● 齊王が周最を追ひて ● 秦の心を取り交を結ばんと欲す ● 祝弗と呂禮 ● 弗と禮とに二國の重き後援あらば必らず田文を輕んぜん ● 北方趙の兵を急に起さしめ、以て趙と秦魏との齊に對する聯合攻撃を促がす。「以」の字は「與」のごとく訓ず ● 用ひて後殿軍となす ● さすれば秦は齊との約信に背きて齊を伐たん。二國合せざれば天下は齊に従はざるべし ● 原文「果」は「集」の誤。天下の兵皆齊に集り、祝弗は逃げ出さん ● 薛公と共にせずして誰と其國を爲めん、斯の如くなれば必らず薛公を重んぜん也

齊聽祝弗外二
周最謂齊王一
曰。逐周最。聽
祝弗相呂禮
者。欲深取秦
也。秦得天下。
則伐齊深矣。
夫秦齊合。則
趙恐伐。故急
兵以示威。秦
以趙攻。與之
齊伐趙。其實
同理。必不處
矣。故用祝弗。
即天下之理
也。

齊、祝弗に聽いて周最を外にす。齊王に謂つて曰く、「周最を逐うて、祝弗に聽き
て呂禮を相とするものは、深く秦を取らんと欲すれば也。秦、天下を得ば、則ち
齊を伐つこと深からん。夫れ秦・齊合はば、則ち趙伐たるを恐れ、故に兵を急
にして以て秦に示さん。秦、趙を以て攻むると、齊と趙を伐つと、其の實同理なり、
必らず處せじ。故に祝弗を用ふるは、即ち天下の理也。」

● 他國へ放逐したり ● 或人が周最の爲に也 ● 秦の心を取らんと ● されど事實は必ず豫想に反して、
秦が天下の諸侯を味方に得ば却て齊を伐つこと甚深ならん ● 魯に兵を出して齊を伐つ勢を秦に示さん ●
趙と聯合して齊を攻むるも齊と聯合して趙を伐つも其實秦としては同利益なれば、必ず趙を拒きて齊を救ふ事はな
からん。「之誓」の「之」は或は「以」の誤とし、或は「合」とし、或は「與」と通用すといふ。「理」は「利」の字
と做して讀むべきが如し ● 齊は必ず安處しがたからん ● 齊の利にあらずして結局は天下を利するもの也

周の相呂倉、客を周君に見えしむ。前の相工師籍、客の己を傷らんことを恐る。
因て人をして周君に謂はしめて曰く、「客は辯士也。然れども不可なる所以の者
は、好んで人を毀る」と。

因令三人謂周
君曰。客者辯
士也。然而所以
不可者。好毀人。

● 工師は工匠を掌る官なるが言を以て氏とせる也。籍は其名 ● 辯辯家 ● 其缺點とすべき所は

周文君免工
師籍相呂倉。
國人不說也。
君有閔闕之
心。謂周文君
曰。國必有誹
譽。忠臣令誹
在己譽在上。
宋君奪民時。
以爲臺而民
非之。無忠臣
以掩蓋之也。
子罕釋相爲
司空。民非子
罕而善君。齊
桓公宮中七

周の文君、工師籍を免じて呂倉を相とす。國人の説ばざるや、君、閔闕の心あり。
周の文君に謂つて曰く、「國必ず誹譽あり。忠臣は誹をして己に在り譽をして上
に在らしむ。宋君、民の時を奪ひて以て臺を爲り、民之を非る。忠臣の以て之を掩
蓋する無ければ也。子罕、相を釋て、司空と爲る。民子罕を非つて君を善せり。
齊の桓公、宮中に七市女闕七百あり、國人之を非る。管仲故らに三歸の家を爲り
て、以て桓公の非を掩ひ、自ら民に傷らる。春秋、臣の君を弑する者を記する、
百を以て數ふ。皆大臣の譽められし者也。故に大臣の譽を得るは、國家の美に非
ず。故に衆庶強を成し、増積山の如し」と。周君遂に免ぜず。

● 呂倉が人民間に不人望なりし也 ● 臺臺の貌。新相の不人望を苦にして免職せんかと臺臺せる也 ● 或人
が呂倉の爲めに ● 國には必ず毀譽あり、一方に譽むるあれば一方にそしめるあるは免れ難し ● 忠臣はそしり

市。女閭七百。國人非之。管仲故爲三桓之家。以掩桓公。非自傷於民也。春秋記臣弑君者。以百數。皆大臣見譽者也。故大臣得譽。非國家之美也。故衆庶成強。增積如山。周君遂不免。

を身に引受く ① 昔宋の君が、民の農業上大切な季節に、賦役を課して遊樂の臺を作りし故、民は之を非難せり ② 斯く民の非難ありしは、忠臣の、民の非難を身に引く機にして、君の惡事をまはひかくす者なかりし故也。正解には此一句原文八字を衍とす ③ 其時に子罕は宰相の役を辭して、土木を司る所の司空となり、自ら其工事を指圖せる故、今度は人民は子罕をせりて君を善しとせり ④ 閭は里門也。宮中に七處の市場を作り、各市場に閭を設け、皆女子を居らしめ、毎閭百人都合七百人の女を置きたり ⑤ 其臣管仲はわざと諸侯の禮に倣つて三姓の婦をめとる。家は嫁の古字也といひ、又三歸は女を置く所の臺の名ともいふ ⑥ 孔子の作 ⑦ 其逆臣は皆人譽ありし大臣也 ⑧ 古語也。多人衆は強き勢をなし、財物積れば其形山の如し。大臣の衆望を得るものは強國制しがたきに至るをいふ ⑨ 同音を也

温人之周。周不納。問曰。客邪。對曰。主人也。問其巷而不知也。吏囚之。君使人問之曰。子非周人。而自謂

温人、周に之く。周納れず、問うて曰く、「客か。」對へて曰く、「主人也。」其巷を問へば、知らざる也。吏囚て之を囚ふ。君、人をして之に問はしめて曰く、「子は周人に非ずして、自ら客に非ずと謂ふは何ぞや。」對へて曰く、「臣少うして詩を誦す。詩に曰く、『普天の下、王土に非ざるは莫く、率土の濱、王臣に非ざるは莫し』と。今周天下に君たれば、則ち我は天下の臣也、而るを又客たらんや。故に主人と

曰ふ」と。君乃ち吏をして之を出さしむ。

● 當時西周（或はいよ魏）に屬したる邑の名 ● 他國人 ● 自國人即ち東周人也 ● 住居する町の名 ● 略語ナ ● 詩は小雅北山之篇に出づ ● 普はあまねくの意。天下に到る處 ● 率はしたがふの意。土地の涯にしたがひてぐるりと土地のつゞく限り。要するにどんな地のはて迄も也

非客。何也。對曰。臣少而誦詩。詩曰。普天之下。莫非王土。率土之濱。莫非王臣。今周君天下。則我天子之臣。而又爲客哉。故曰主人。君乃使吏出之。

或爲二周最二謂二金投二曰。秦以二周最之。齊疑二天下。而又知下趙之難。中子二齊人。戰恐二齊韓之合。必先合二於秦。秦齊合。則公之國虛矣。公不三救三齊。因佐三秦。而伐二韓魏。上黨

或ひと周最の爲に金投に謂つて曰く、「秦は周最の齊に之けるを以て、天下を疑ふ。而して又趙の齊人と戦ふを難かるを知るや、齊・趙の合せんを恐れて、必らず先づ齊に合せん。秦・齊合せば、則ち公の國虚しからん。公如かず、齊を救ひ、因つて秦を佐けて韓・魏を伐たんには。上黨・長子は趙の有のみ。公、東、實を秦より收め、南、地を韓に取らば、魏困て以て困まん。徐ろに之が東に爲さば、則ち合するあらん。」

● 趙人。當時周最齊にあり、趙の將軍金投が趙王の命にて秦魏と共に、齊を伐たんとするをへ憂ひし也 ● 魏を去りて齊に之けるを以て ● 天下の諸侯齊と私約あるを疑ふ ● 原文「子二齊人」の「子」は「與」の誤 ● 原

長子。趙之有已。公東收寶於秦。南取地於楚。魏因以困徐爲之東。則有合矣。周最謂金投曰。公負令秦。與強齊戰。戰而封之。使無多割。而聽天下之戰。不勝。國大傷。不得聽秦。秦盡韓魏之上黨。太原。西土。秦之有已。秦地天下之半也。制齊楚三晉

文に「齊楚」とあるは「齊楚」の誤。原文に「秦」とあるは「齊」の誤。趙の國破亡して都は空しき墟址とならん。皆韓の地。さすれば此等の地は趙の所有とならんと也。秦は西にあり、故に「東」は「西」の誤といふ。一説には「秦」は「齊」の誤とす。何れにしても救援の功にて寶物を貰ふ也。斯くして徐々に東の方齊との交を圖らば齊楚二國合するあらん。一説に斯くして徐々に東の方齊を伐たば秦楚は合するを得ん。

周最、金投に謂つて曰く、「公、秦に合へるを負みて、強齊と戦ふ。戦勝たば、秦且に齊を收めて、之を封じ、多く割く無からしめ、天下の戦を聽さんとす。勝たずんば國大いに傷はれ、秦に聽かざるを得ざらん。秦、韓、魏の上黨・太原を盡くさば、西土は秦の有のみ。秦の地天下の半ばなり、齊・楚・三晉の命を制せん。國を覆へし且つ身危し。是れ何の計の道ぞや。」

● 原文「合」は「合」の誤。封は厚也。齊の力を厚くし、以て多く地を趙に割譲する事なからしめ。天下の諸侯をして腹存分戰ふだけ敢はしめて其疲弊に乗せんとす。● 上黨は韓の地。太原は魏の地。この兩地を盡く占領せば韓魏の西地は秦の所有のみと也。一本によれば「土」を「止」に作り、秦韓魏の上黨を盡くさば太原の西は止(タタ)秦の有のみ」と訓じ、上黨を韓魏の所領とし、太原を趙の地とす。● 斯くせば秦の領地は天下の半

之命。覆國且身危。是何計之遺也。石行秦謂太梁造曰。欲決霸王之名。不如備兩周辨智之士。謂周君曰。君不如令辨智之士。爲君爭於秦。

ばとなり、齊・楚・三晉(韓・魏・趙)の死命を制せん。● 趙の國。● 金投自身の身。● 秦を恃みにして齊と威よはとんでもなき愚策ぞと也。

石行秦、大梁造に謂つて曰く、「霸王の名を決せんと欲せば、兩周辨智の士を備ふるに如かず」と。周君に謂つて曰く、「君如かず、辨智の士をして、君の爲めに秦に争はしめんには」と。

● 周人。● 又「大良造」に作る。秦の爵の名。其爵を有する大臣也。● 覇者たり王者たるの名譽を必ず得んとせば。● 雄辯才智の士を用に備へ置くべし。● 秦に赴きて利害得失を争はしめよ、然らば周の國光を揚ぐるに足らん。秦にては兩周の辯士を拒絶して國中に置かざりし故、かゝる策を測らして辯士をして秦に入らしめたるにや。

卷第三上

秦上

孝公

衛鞅亡魏入秦。孝公以爲相。封之於商。號曰商君。商君治秦。法令至行。公平無私。罰不諱強。大賞不私親。近法及太子。顯刑其傅。并年之後。道不

衛鞅魏を亡けて秦に入る。孝公以て相となし、之を商に封じ、號して商君と曰ふ。商君、秦を治めて、法令至つて行はれ、公平にして私なし。罰強大を諱まず、賞親近に私せず。法太子に及び、其傅を黜削す。朞年の後、道遠を拾はず、民妄りに取らず、兵革大に強うして、諸侯畏懼す。然れども刻深にして恩寡し、特法を以て之れを服する耳。孝公之を行ふこと八年、疾みて且に起たざらんとし、商君に傳へんと欲す。辭して受けず。孝公己に死し、惠王代り、後政に蒞む。頃くありて、商君告歸す。人、惠王に説いて曰く、「大臣太だ重ければ國危く、左右太だ

拾遺。民不安。取。兵革大強。諸侯畏懼。然刻深寡恩。特以法服之耳。孝公行之八年。疾且不起。欲傳商君。辭不受。孝公已死。惠王代。後蒞政。有頃。商君告歸。人説惠王曰。大臣太重者國危。左右太親者身危。今秦婦人嬰兒。皆言商君之法。莫言大王之法。是商君反爲主。大王更爲臣也。且夫商君。因大王之仇讎也。願大王圖之。商君歸還。惠王車裂之。而秦人不憐。

親しければ身危し。今秦の婦人嬰兒も皆商君の法を言つて、大王の法を言ふもの莫し。是れ商君反つて主と爲つて、大王更つて臣と爲る也。且つ夫れ商君は固より大王の仇讎也。願はくは大王之を圖れ」と。商君歸還す。惠王之を車裂して、而も秦人憐まず。

- 衛の庶流、因て衛を好とす、鞅は名也
- 大いに善く行き渡り
- 勢力の強大なる者にて諱はざる事なし
- 太子が法を犯したるにも假借せず、さりとして太子は君の嗣子にて刑し難き故其傅を罰したる也
- 守役
- 黜は入れ置の刑、削は鼻を斬る刑
- 一年
- 道に落し物がありても拾ふ者なし
- 相當の理由なきものは取らざ
- 軍隊
- 只苛刻なるのみにて仁恩といふものなし。只法を以て人民を威服したるに過ぎず
- 惠王の位をゆづらんせしも商君辭して受けず
- 太子也
- 代りて王位につき後國政に臨む
- 休憩を請ひて自己の領邑に歸る
- 何時軍警の變ありて國亡びんも圖りがたし
- 寵愛に押れて王の身に危害を及ぼすに至らん
- 前に記せる如く、太子たりし時に法に當てられて其傅の刑せられしをいふ
- 厲と御恩案あれ
- 兩足を別々に牛車に縛り、牛が走れば體が左右に裂くる刑也

蘇秦始將連橫。說秦惠王曰。大王之國。西有巴蜀漢中之利。北有胡貉代馬之用。南有巫山黔中之限。東有澶函之固。田肥美。民殷富。戰車萬乘。奮擊百萬。沃野千里。蓄積饒多。地勢形便。此所謂天下之雄

惠文君

蘇秦始將連橫。秦の惠王に説いて曰く、「大王の國、西に巴蜀・漢中の利あり、北に胡貉代馬の用あり、南に巫山・黔中の限あり、東に澶・函の固あり、田肥美にして、民殷富に、戰車萬乘、奮擊百萬、沃野千里、蓄積饒多にして、地勢便なり。此れ所謂天府、天下の雄國也。大王の賢、士民の衆、車騎の用、兵法の教を以てせば、以て諸侯を并せ、天下を呑み、帝と稱して治む可し。願はくは大王少しく意を留めよ。臣請ふ其效を奏せん。」秦王曰く、「寡人之を聞く、毛羽豐滿せざる者は、以て高く飛ぶ可らず、文章成らざる者は、以て誅罰す可らず、道徳厚からざる者は、以て民を使ふ可らず、政教順ならざる者は、以て大臣を煩はす可らずと。今先生儼然として、千里を遠しとせずして、之を庭教す。願はくは異日を以てせん。」蘇秦曰く、「臣固より大王の用ふる能はざるを疑へり。昔は神

國也。以大王之賢。士民之衆。車騎之用。兵法之教。可下以并諸侯。吞天下。稱帝而治。願大王少留意。臣請奏其效。秦王曰。寡人聞之。毛羽不豐滿者。不可不以高飛。文章不成者。不可不以誅罰。道徳不厚者。不可不以使民。政教不順者。不可不以煩大臣。今先生儼然。不遠千里。

農、補・遂を伐ち、黃帝、涿鹿を伐ちて蚩尤を禽にし、堯、驩兜を伐ち、舜、三苗を伐ち、禹、共工を伐ち、湯、有夏を伐ち、文王、崇を伐ち、武王、紂を伐ち、齊桓戰に任じて天下に霸たり。此に由て之を觀れば、悪くんぞ戰はざる者あらんや。古は使車轂擊して馳せ、言語相結んで、天下一となり、從を約し横を連ねて兵革藏せず。文士竝に飾り、諸侯亂惑し、萬端俱に起りて、勝けて理む可らず。條既に備はつて、民僞態多く、書策稠濁して、百姓足らず。上下相愁ひて、民聊する所なし。明言章理にして、兵甲愈々起り、辨言偉服にして、戰攻息まず。文辭を繁稱して、天下治まらず。舌敵れ耳聾して、成功を見ず。義を行ひ信を約して、天下親します。是に於て乃ち文を廢して武に任じ、厚く死士を養ひ、甲を綴り兵を厲ぎ、勝を戰場に效す。夫れ徒處して利を致し、安坐して地を廣むるは、古の五帝・三王・五霸の明主賢君、常に坐して之を致さんと欲すと雖も、其勢ひ能はず。故に戰を以て之を續ぐ。寬なれば則ち兩軍相攻め、迫れば則ち杖戟相撞

而庭教之。願以異日。蘇秦曰。臣固疑大王之不仁。用也。昔者神農伐補遂。黃帝伐涿鹿。而禽蚩尤。堯伐驩兜。舜伐三苗。禹伐共工。湯伐有夏。文王伐崇。武王伐紂。齊桓任戰而霸天下。由此觀之。惡有不戰者乎。古者使車轂擊馳。言語相結。天下爲一。約從連橫。兵革

く。然して後大功を建つ可し。是の故に、兵外に勝ちて、義内に強く、威上に立つて、民下に服す。今天下を并せ、萬乗を凌ぎ、敵國を誦し、海内を制し、元元を子とし、諸侯を臣とせんと欲せば、兵に非ずんば不可なり。今の嗣主は、至道を忽にして、皆教に愾く、治に亂れ、言に迷ひ、語に惑ひ、辯に沉み、辭に溺る。此を以て之を論すれば、王固より行ふ能はざる也」と。

●東西を顧といふ。秦地形横に長し、故に六國を合はせて秦に連ねんとする策を連横といふ。●荆楚多き地。●胡や鄂や代より産する名馬の用を爲すものあり。●險阻なる所。●二穀山と函谷關。●軍擊の勇士。●國內に蓄へ積める糧食財貨。●地形が戰爭して攻守するに便利也。●天然自然の府庫。●兵車騎馬の備ありて役に立つこと。●戰術の訓練あること。●四方を政治し得べし。●これを實行したる場合の效驗を進言せん。●法令也。法律規則成らざれば標準なき事ゆゑ法則を行ふべからず。●若たり上たる者の道徳厚からざれば民心服せず。故に國民を使用すべからず。●政事教令の民心に逆ふ者は上の權威行はれざる事ゆゑ大臣に苦勞せしむべからず。以上凡て設備を完うせずして急速に功を望む可からざるをいふ。●もごそかに莊重なる態度にて。●遠路の賦ひもなくわざ／＼御出で下され。●朝廷に於て教を賜はらんとす。●後日準備と、のひし上にてゆる／＼拜進せん。●臣を用ふる。●二つの國の名。●蚩尤の都せらる處。●臣の名。一説には國の名。●國の名。●氏の名。官の名。又いふ國の名。●殷の湯王。●有は發語。夏

不藏。文士並飾諸侯亂惑。萬端俱起。不可勝理。科條既備。民多僞態。書策稠濁。百姓不足。上下相愁。民無所聊。明言章理。兵甲愈起。辨言偉服。戰攻不息。繁稱文辭。天下不治。舌敝耳聾。不見成功。行義約信。天下不親。於是乃廢文任武。厚養死士。綴甲厲兵。效勝於戰場。夫徒處而致利。安坐而廣地。雖古五帝三王五霸。明主賢君。常欲坐而致之。其勢不能。故以戰續之。寬則兩軍相攻。迫則杖戟相撞。然後可建大功。是故兵勝於外。義立於內。威立於上。民服於下。今欲并天下。凌萬乘。誦敵國。制海內。子元元。臣諸侯。非兵不可。今之嗣主。忽於至道。皆僭於

の樂王也と。●崇侯の國。●殷の紂王。●齊の桓公は戰によりて諸侯を征服し。●各國の使者の乘れる車が其こしきの觸れあふ程澤山にこみ合つて馳せ連ひ。●口舌の談判にて相結んで天下一間となり。●或は合従を約し或は連横を誓ふ。●南北を從とし、東西を横とす。●斯く表面上平和の時にては戰爭攻伐は止む事なかりき。●騎士は言語を飾りて諸侯を欺き、諸侯は之に惑ひ亂る。原文「飾」は「飾」の誤、又は古の通用なり。●各種の事件が同時に起りて處理すべからず。●國の法令。●文書記録は繁多になりて混亂して整理が附かず、爲めに人民は衣食足らざりて窮乏す。●安じて身を依頼すべき所なし。●章も亦明也。明かな言辭やかな道理が世に盛に囁道せられて。一説次の「辨言偉服」と共に國際談判に於ける事といふ。●雄辯を振ひ宣々たる服裝を爲す士士横行して。●如何程お互に辯舌をふるひても。●文治の途に爲すに足らざるをいふ。●決死の勇士。●甲(ヨロヒ)の札(サネ)を纏ぎ、武器を磨ぎ。●爲すこともなく無事に居りて。●黃帝・顓頊・帝嚳・堯・舜、其他諸説あり。●禹・湯・文王・武王。●齊の桓公、晉の文公、秦の穆公、宋の襄公、楚の莊王。●ゆるやかなる時には陣列を立て、攻め合ふ。●杖やほこにて衝きあふ。●國內の人々の義氣が強くなる。●大國を凌駕し。●屈服せしめ。●天下の人民をなつて子の子の如くし。●國を嗣ぐ君主。●至極の大道。●激して吾が説を用ひしめんとして曰ふ也。

欲并天下。凌萬乘。誦敵國。制海內。子元元。臣諸侯。非兵不可。今之嗣主。忽於至道。皆僭於

敬。亂於治。迷於言。惑於語。沉於辯。溺於辭。以此論之。王固不能行也。

說秦王。書十
上面說不行。
黑貂之裘敝。
黃金百斤盡。
資用乏絕。去
秦而歸。負書擔
囊。形容枯槁。
面目黧黑。狀
有愧色。歸至
家。妻不下紼。
嫂不為炊。父
母不與言。蘇
秦喟然嘆曰。
妻不以我為
夫。嫂不以我
為叔。父母不

秦王に説き、書十たび上りて、説行はれず。黒貂の裘敝れ、黄金百斤盡き、資用乏絶し、秦を去つて歸る。膝を贏ひ、膂を履き、書を負ひ囊を擔ひ、形容枯槁し、面目黧黒、狀愧色あり。歸つて家に至る。妻紼を下らず、嫂爲めに炊がず、父母與に言はず。蘇秦喟然として嘆じて曰く、「妻我を以て夫と爲さず、嫂我を以て叔と爲さず、父母我を以て子と爲さず。是れ皆秦の罪也」と。乃ち夜、書を發し、篋を陳ぬる數十、太公が陰符の謀を得、伏して之を誦し、簡練して以て揣摩を爲す。書を讀んで睡まんとすれば、錐を引いて自ら其股に刺し、血流れて足に至る。曰く、「安くんぞ人主に説きて、其金玉錦繡を出し、卿相の尊を取る能はざる者あらんや」と。昔年にして揣摩成る。曰く、「此れ眞に以て當世の君に説く可し」と。是に於て乃ち燕烏集闕を摩し、趙王に華屋の下に見え説き、掌を抵つて談す。趙王、

以我爲子。是
皆秦之罪也。
乃夜發書。陳
數十。得太
公陰符之謀。
伏而誦之。簡
練以爲揣摩。
引錐自刺其股。
血流至足。曰。
安有說人主。
不能出其金
玉錦繡。取卿
相之尊者哉。
昔年揣摩成。
曰。此眞可三
說當世之君
矣。於是乃摩
燕烏集闕。見
說趙王於華

大いに説び、封じて武安君となし、相印を受く。革車百乘、錦繡千純、白璧百雙、黄金萬鎰、以て其後に隨へ、從を約し横を散じ、以て強秦を抑ふ。故に、蘇秦趙に相となりて、關通せず。此時に當つて、天下の大、萬民の衆、王侯の威、謀臣の權、皆蘇秦の策に決せんと欲す。斗糧を費さず、未だ一兵を煩はさず、未だ一士を戦はしめず、未だ一弦をも絶たず、未だ一矢をも折らずして、諸侯相親しむこと兄弟に賢る。夫れ賢人在つて天下服し、一人用ひられて天下従ふ。故に曰く、「政に式ひて勇に式ひず、廊廟の内に式ひて四境の外に式ひず」と。秦の隆んなるに當つて、黄金萬鎰用を爲し、轂を轉じ騎を連ねて、道に炫耀す。山東の國、風に從つて服し、趙をして太だ重からしむ。且つ夫れ蘇秦は特に窮巷掘門、桑戸棖樞の土耳。軾に伏し銜を擡へて、天下を横歴し、諸侯の士に廷説して、左右の口を杜ぎ、天下之に仇する莫し。將に楚王に説かんとして、路洛陽を過ぐ。父母之れを聞き、宮を清め道を除ひ、樂を張り飲を設けて、郊迎する三十里。妻目を

屋之下。抵_レ掌而談。趙王大說。封爲_二武安君_一。受_二相印_一。車百乘。錦繡千純。白璧百雙。黃金萬鎰。以隨_二其後_一。約從散橫。以抑_二強秦_一。故蘇秦相_二於趙_一。而關不通。當_二此之時_一。天下之大。萬民之衆。王侯之威。謀臣之權。皆欲_レ決_二於蘇秦_一之策。不_レ費_二斗糧_一。未_レ煩_二一兵_一。未_レ戰_二一士_一。未_レ絕_二一

側て、視、耳を傾けて聽き、嫂蛇行匍伏し、四たび拜し自ら跪いて謝す。蘇秦曰く、「嫂何ぞ前には倨つて後には卑きや。」嫂曰く、「季子の位尊くして金多きを以て也」と。蘇秦曰く、「嗟乎貧窮なれば則ち父母子とせず、富貴なれば則ち親戚畏懼す。人の世上に生るゝ、勢位富厚、蓋し以て忽にす可けんや。」

● 黒色の貂(テン)の皮衣はやぶれ ● 用に充つべき資財 ● 膳は行儀也、脚絆の如きもの。膳は費に通ず、まとひ結ぶ意 ● 草履 ● 襪子はしをくとして生氣なく打ち棄へ ● 顔は黒ずみて ● 舊本「黜色」に作る。惟彼の色也 ● 襪(ハタ)より下りて迎へず ● 兄嫂も飯を焚きて呉れず ● 太息して嘆ずる貌 ● 義弟 ● 自らいふ名也。誰をか咎むべき皆我が學至らざるの罪のみ ● 書物を取出し ● 數十の書物箱を陳列して其中より選擇し ● 太公望の陰符經と稱する兵法書 ● 其精神を簡(エラ)びて十分に練熟し ● 天下の實情をかしはかり考へて之を現時に應用實現するには如何にすべきかを研究す ● 取出して我首を致し ● 取りて我が身の責を致す ● 一年 ● 未詳。此句或は衍文といひ、缺文なりといひ、又蕭烏集は陰符經の篇名にて其篇によりて指稱する義といふ ● 華麗なる宮殿 ● 尊を以て形勢を指畫して ● 授也 ● 國御と兵車 ● 千東 ● 白玉百對 ● 武安君の後に従へ以て諸侯の間を巡説せしむ ● 諸侯をして合従を爲し秦との連横の組合を散じ離す ● 函谷關の出入遮りて秦また東六國を窺はず ● 廣大なる天下も、衆多なる萬民も、威力ある王侯も、權勢ある謀臣も、皆一個蘇秦の策によりて方針を決せんとす

弦。未_レ折_二一矢_一。諸侯相親。賢_二人在_一而天下服。一人用而天下從。故曰式_二於政_一。不_レ式_二於勇_一。式_二於廊廟_一之內。不_レ式_二於四境_一之外。當_二秦之隆_一。黃金萬鎰爲_レ用。轉_レ轂連_レ騎。炫_二熒於道_一。山東之國。從_レ風而服。使_二趙太_一重。且_レ夫蘇秦。特窮巷掘門。桑戶樞樞之士耳。伏_レ軾擗_レ衡。橫_二歷天下_一。廷_二說諸侯_一之士。杜_二左右之口_一。天下莫_二之能_一抗。將_レ說_二楚王_一。路過_二洛陽_一。父母聞_レ之。清_レ宮除_レ道。張_レ樂設_レ飲。郊迎_二三十里_一。妻側_レ目而視。傾_レ耳而聽。嫂蛇行匍伏。四拜自跪而謝。蘇秦曰。嫂何前倨而後卑也。嫂曰。以_二季子之位尊而多_一金。蘇秦曰。嗟乎貧窮則父母不_レ子。富貴則親戚畏懼。人生_二世上_一。勢位富厚。蓋_二可以忽_一乎哉。

● 僅か一斗の糧食 ● 一本の弓づる ● 古語也。天下を以て従さずるは政事上の働きによる事にて武勇の働きによるにあらず、朝廷の内在りて計策を測らすべく四方の國境外に兵を用ひて爲すにあらず。式は用也。廟は朝廷政府の意 ● 蘇秦也。又國の秦とす。後説によれば秦の隆盛なる時それを憚らざり此大業を成したるの意に解す ● 其用度に供せらる ● 車を測らし從騎を過ね ● 道中まばゆきばかりに堂々と遣つて行く ● 殺山以東の六國何れも威風凛凛して従ひ服し ● むさがるしき町に住み、垣を築ちて門とし、桑の木の戸をたて、木をたはめてとぼそとしたる、所謂九尺二間の貧乏人のみ ● 車の横木 ● 馬のくつわ ● 朝廷の上にて説き諭し ● 諸侯の左右近臣をして一言の反對をも言はざらしむ ● 抗也。反抗 ● 蘇秦の故郷 ● 屋室 ● 音聲を離し立て ● わざ／＼郊外に出迎へ早く語らんとする也 ● 恐入りて正禮正禮し得ず ● 斜にうねりて行き手を地につきて伏す ● 小別殿。嫂より夫の弟を呼ぶ通稱。一説には蘇秦の字(アサナ)とす ● 權勢ある地位富厚なる財力

秦の恵王、寒泉子に謂つて曰く、「蘇秦寡人を欺き、一人の智を以て、山東の君を

欺寡人之智。反覆東山之君。趙從以欺秦。趙固負其衆。故先使蘇秦以幣帛約乎諸侯。諸侯不可一。猶連雞之不能俱止於樓。亦明矣。寡人忿然含怒。日久。吾欲使武安子起往喻意焉。寒泉子曰。不可。夫攻城墮邑。請使武安子善我國家。使諸侯請使客卿張儀。秦惠王曰。敬受命。

反覆し、從して以て秦を欺かんと欲す。趙固より其衆を負む。故に先づ蘇秦をして、其幣帛を以て諸侯に約せしむ。諸侯の一にす可らざるは、猶ほ連雞の俱に棲に止まる能はざるがごとく、亦明けし。寡人忿然として怒を含むこと日久し。吾武安子起をして、往いて意を喻さしめんと欲す。寒泉子曰く、「不可なり。夫れ城を攻め邑を墮るは、請ふ武安子を使へ。我が國家を善し、諸侯に使せんは、請ふ客卿張儀を使へ。」秦の惠王曰く、「敬んで命を受く。」

● 策士也。秦の處士といふ。● 輕蔑し。● 山東諸國の君の秦に親しめるを打かへし。● 合縱して我秦を侮蔑せんと企つ。● 兵多く勢強し。● 進物。● 合從の約を結ばしむ。● 多くの連なり並んだ雞が一つの棲(ネグラ)に止り居る事能はざるが如し。● 綱はよく綱ふもの故必喧嘩す。● 怒る貌。● 勇將白起也。又別人ともいふ。● 我精神を諸侯に喻さしむ。● うまく取なれつくるうて他國によく思はしむ。● 官の名。諸侯より來る者を卿を以て待遇する也。● 仰に従はん

楚魏戰於陘山。魏許秦以上洛。以絕秦於楚。魏戰勝楚。敗於南陽。秦實賂於魏。魏不與。管淺謂秦王曰。王何不謂楚王。曰。魏許寡人以地。今戰勝。魏王背寡人也。王何不與寡人。秦楚之合。必與秦地矣。是魏勝楚。而亡地於秦也。是王以魏地。德寡人。秦之楚

楚・魏陘山に戰ふ。魏、秦に許すに上洛を以てし、以て秦を楚に絶たしむ。魏戰うて楚に勝ち、南陽に敗る。秦、賂を魏に責む。魏與へず。管淺、秦王に謂つて曰く、「王何ぞ楚王に謂つて日はしめざる。」魏寡人に許すに地を以てす。今戰ひ勝ちて、魏王寡人に背く。王何ぞ寡人と遇はざる。魏は秦・楚の合せんを畏れ、必らず秦に地を與へん。是れ魏は楚に勝つて地を秦に亡ふ也。是れ王、魏の地を以て寡人に徳す。秦の楚に之ける者資多し。魏は弱し、若し地を出さずんば、則ち王其南を攻めよ。寡人其西を絶たん。魏必ず危ふからん」と。秦王曰く、「善し」と。是を以て楚に告ぐ。楚王、秦と遇はんと揚言す。魏王之を聞き、恐れて上洛を秦に効す。

● 魏の地名。南陽にあり。● 魏は秦に上洛の地を與へん事を條件として秦をして交を楚に絶ちて分離し以て楚を援くるをなからしめたり。● おくりもの即ち上洛の地をくれと催促せり。● 地を分與せん事を約したり。● 其約束を實行せず。● 出還へ。會見せよ。● 取られてなくする。● 魏の地を以て拙者に恩恵を與へたる也。● 「之」は於とは、同義に用ひたる也。秦の楚より助けを受くる多し誠に有りがたく思ふと也。正解には「之」を

者多資矣。魏弱。若不_レ出_レ地。則王攻_二其南_一。寡人絕_二其西_一。魏必危。秦王曰。善。以是告楚。楚王揚言與秦遇。魏王聞之。恐效_二上洛於秦_一。

「往く」と解し、秦が楚の恩に報いる贈物多からん意とせり。此の句疑はし。魏は實際は弱しとの意か、古來説なきも或は「弱」の字衍にはあらずか。絶ち切りに援助する事なし。あちはに言ふ。いひふらず。離りたり。

楚使者景鯉在_レ秦。從_二秦王_一與_二魏王_一遇_二於境_一。楚怒。秦令_二周最_一謂_二楚王_一曰。魏請_二無_レ與_レ楚遇。而合_レ於秦。是以鯉與_レ之遇也。敝邑之於_二與遇_一善也。故齊不_レ合也。楚王因不_レ罪_二景鯉_一。而德_二周秦_一。

楚の使者景鯉、秦に在り、秦王に従つて、魏王と境に遇ふ。楚怒る。秦、周最をして楚王に謂はしめて曰く、「魏は楚と遇ふなくして、秦に合せんと請ふ。是を以て鯉之と遇ふ也。弊邑の與に遇ふに於ける、之を善くす。故に齊合せざる也」と。楚王因つて景鯉を罪せずして、周秦を徳とす。

楚王使_二景鯉_一加_レ秦。客謂_二秦王_一曰。景鯉。楚王所_二甚愛_一。王不_レ如_二留_レ之以_レ市_レ地。楚王聽。則不_レ用_レ兵。而得_レ地。楚王不_レ聽。則殺_二景鯉_一。更_レ與_二不_レ如_二景鯉_一者_一。是便計也。秦王乃留_二景鯉_一。使_二人_一說_二秦王_一曰。臣見_二天下_一。而地不_レ可_レ得也。臣之來使也。聞_二齊魏_一皆且_レ割_レ地以事_二秦_一。所_二

● 國境にて出會す ● 楚王は景鯉が勝手に他國の王の會見に列なり、爲に同盟國の齊より、楚と秦魏との間に密約あるを疑はれん事を恐れ、景鯉の處置を怒りて之を罪せんとせし也 ● 魏の國より楚王と遇ひて親しむ事なくして私かに ● 「齊」の誤。又は「秦齊」の誤ならん ● 斯く魏が齊をして楚を疎外せしめ魏齊秦間の密契を結ばんとする意圖なる事を知りし故わざらん ● 景鯉が裏をかきてこの會合に出席せり ● 我國にては其列席を尤もとし其場合景鯉を善く行過せり ● 楚使が秦魏の會見に列し、又秦が楚使を善遇したるを見て、秦楚間に密約あるを疑ひ、故に楚は魏のすゝめを用ひて秦と聯合する事をせざりし也 ● 「周最」の誤か又は「周」の字衍ならん

楚王使_二景鯉_一加_レ秦。客謂_二秦王_一曰。景鯉。楚王所_二甚愛_一。王不_レ如_二留_レ之以_レ市_レ地。楚王聽。則不_レ用_レ兵。而得_レ地。楚王不_レ聽。則殺_二景鯉_一。更_レ與_二不_レ如_二景鯉_一者_一。是便計也。秦王乃留_二景鯉_一。使_二人_一說_二秦王_一曰。臣見_二天下_一。而地不_レ可_レ得也。臣之來使也。聞_二齊魏_一皆且_レ割_レ地以事_二秦_一。所_二

楚王、景鯉をして秦に如かしむ。客秦王に謂つて曰く、「景鯉は楚王の甚だ愛する所たり。王之を留めて以つて地に市ふるに如かず。楚王聽かば、則ち兵を用ひずして地を得るなり。楚王聽かすんば、則ち景鯉を殺し、更に景鯉に如かざる者や與へん。是れ便計也」と。秦王乃ち景鯉を留む。景鯉、人をして秦王に説かしめて曰く、「臣、王の權天下に軽く、而して地得可らざるを見る也。臣の來り使用するや、齊・魏皆且に地を割いて、以て秦に事へんとすと聞けり。然る所以のものは、秦の楚と昆弟の國たるを以てなり。今大王臣を留む。是れ天下に楚なきを示すなり。齊・魏有何ぞ孤國を重んぜん。楚、秦の孤なるを知らば、地を與へずして、外、交を諸侯に結びて以て圖らん。則ち社稷必ず危ふからん。如かず、臣を出さんには」と。秦王乃ち之を出す。

● 抑留して交換的地を楚に求む ● 景鯉以下の人物を其代りとして與ふ ● 其如き計を圖らざる時は却て大王の權輕くなりて天下に重んぜられず、御希望の地は入手し難からんを見る ● 兄弟分となりて相親しむ間

以然一者。以三秦與楚爲昆弟國。今大王留臣。是示天下無楚也。齊魏有何重於孤國也。楚知秦之孤。不與地。而外結交諸侯。以圖則社稷必危。不如出臣。秦王乃出之。

楚攻魏。張儀謂秦王曰。不與魏以勁之。魏戰勝。復聽於秦。必入西河之外。不勝。魏不能守。王必取之。王用儀言。取皮氏卒萬人。車百乘。以與魏犀首。戰勝。威王。魏兵罷。敵。恐畏秦。果獻西河之外。

楚、魏を攻む。張儀秦王に謂つて曰く、「魏に與して、以て之を勁くせんに如かず。秦戦ひ勝たば、復た魏に聽き、必らず西河の外を入れん。勝たずんば魏守る能はず。王必ず之を取らん」と。王、儀の言を用ひて、皮氏の卒萬人、車百乘を取り、以て魏の犀首に與ふ。戰つて威王に勝ちしかど、魏兵罷弊し、秦を恐畏して、果して西河の外を獻す。

- 從前の如く再び秦の指圖を歴き
- 外の地を秦國に入れ馳らん
- 力微にして西河外の地を守る能はず
- 地名。もと魏の有なりしを當時秦取りて有せし也
- 兵車
- 魏の將軍の名
- 魏は戰つて楚の威王に勝ちたれど
- 秦に獻す

田辛之爲陳軫說秦。惠王曰。臣恐王之如郭君。夫晉獻公欲伐郭。而憚舟之僑。存。荀息曰。周書有言。美女破舌。乃遣之。女樂以亂其政。舟之僑諫而不聽。遂去。因而伐郭。遂破之。又欲伐虞。而憚宮之奇。存。荀息曰。周書有言。美男破老。乃遣之。美男。數之。惡宮之奇。宮

田辛之、陳軫の爲に秦の惠王に説いて曰く、「臣、王の郭君の如くならんを恐る。夫れ晉の獻公、郭を伐たんと欲して、舟之僑の存するを憚かる。荀息曰く、「周書に言へるあり、美女舌を破ると。」乃ち之に女樂を遣つて、以て其政を亂る。舟之僑諫むれども聽かれず、遂に去る。因つて郭を伐つて、遂に之を破る。又虞を伐たんと欲して、宮之奇の存するを憚かる。荀息曰く、「周書に言へるあり、美男老を破ると。」乃ち之に美男を遣り、之をして宮之奇を惡せしむ。宮之奇以て諫むれども聽かれず、遂に亡ぐ。因つて虞を伐つて、遂に之れを取れり。今秦自ら以て王と爲す。能く王の國を害する者は楚也。楚、横門君の善く兵を用ふると、陳軫の智なるとを知る。故に張儀を驕らすに、五國を以てす。來らば、必ず是の二人を惡せん。願はくは王聽く勿れ」と。張儀果して來り辭し、因つて軫を言ふ。王怒つて聽かず。

- 策士也
- 秦の臣
- 郭國の君。正解には「君」は「威」の誤かといふ
- 郭の賢臣
- 晉の大夫

之奇以諫而不聽。遂亡。因而伐之。遂取之。今秦自以爲王。能害王。之國者。楚也。楚知橫門君之善。用兵。與陳軫之智。故驕張儀。以五國來。必惡是二人。願王勿聽也。張儀果來辭。因言軫也。王怒而不聽。

美人は美言を以て忠臣の諫言をかき破り君をして用ひざらしむ。女美人。獻公が也。獻公他日又也。美男は老成の宿臣をも破滅せしむ。惡しざまに威君に告げしむ。「教」は「令」の意也。正解「之を教へて宮之奇を惡せしむ」と訓ず。亦可也。獻公が也。秦自ら眞の王者を以て任ずるをいふ。秦の將張儀の權威を附け之を重くせん爲に、楚が魏趙燕齊五國の諸侯をして大切なる用件を張儀に依憑せしめたり。張儀秦に來らば。色々の事を申上げその序手に陳軫の事を惡しざまに王に言ふ。

張儀又惡陳軫於秦王曰。軫馳秦楚之間。今楚善秦而善軫。然則是軫自爲而不爲國也。且軫欲去秦而之楚。王何不聽乎。王謂陳軫曰。吾

張儀又陳軫を秦王に惡して曰く、「軫秦・楚の間に馳せて、今楚、秦に善きを加へずして、而して軫に善くす。然らば則ち是れ軫自ら爲にして、國の爲にせざる也。且つ軫、秦を去つて楚に之かんと欲す。王何ぞ聽さざるや」と。王、陳軫に謂つて曰く、「吾聞く、子、秦を去つて楚に之かんと欲すと、信なるか。」陳軫曰く、「然り。」王曰く、「儀の言果して信也。」曰く、「獨り儀のみ之を知れるに非ず、行道の人皆之を知れり。孝己其親を愛して、天下以て子となさんと欲し、子胥其君に忠に

聞子欲去秦而之楚。信乎。陳軫曰。然。王曰。儀之言果信也。曰。非。獨儀知之也。行道之人皆知之也。孝己愛其親。天下欲以爲子。子胥忠乎其君。天下欲以爲臣。實僕妾。傳乎。閉巷者。良僕妾也。出婦嫁。鄉曲者。良婦也。吾不忠於君。楚亦何以軫爲忠乎。忠且見棄。吾不之楚。何適乎。秦王曰。善。乃止之。

して、天下以て臣となさんと欲す。僕妾を賣るに、閭巷に售るゝ者は良僕妾也。出婦の鄉曲に嫁する者は良婦也。吾れ君に忠ならずんば、楚亦何ぞ軫を以て忠とせんや。忠にして且つ棄てらる。吾れ楚に之かずして何くにか適かん。」秦王曰く、「善し」と。乃ち之を止む。

- 惡し様に言ふ
- 奔走して其親善を圖る
- 而も其結果楚は何等秦と親善を加へずして、却て陳軫を厚遇す
- 自己一身の利益を圖りて國の爲めを思はず
- 其希望を應許して楚に往かしめよ
- 張儀
- 道を行く人。赤の他人
- 殷の高宗の賢子
- 吳王夫差の臣吳子胥
- 其同じ町村内に奉公口ありて賣れる者は良僕妾也。即ち日頃より評判よくて、あれならば使ひたし思ふ故其居住地にて賣るゝ也
- 出戻り女。夫の家を離別して出されたる女
- 再び其同じ部落の内に嫁ぐ者は良婦也。平素より惡婦との評判あらば誰も買ひ手無き筈也
- 楚が臣を忠なりとして厚遇するは臣が秦に忠なるを知れば也
- 忠を盡しながら尚且秦より捨てらるゝ以上、楚に往くより外に往き所なし
- 信任厚遇して秦に止まらしむ

陳軫、楚を去りて秦に之く。張儀秦王に謂つて曰く、「陳軫、王の臣と爲りて、常

王曰。陳軫爲二
王臣。常以二國
情輸楚。儀不
能與從事。願
王逐之。即復
之楚。願王殺
之。王曰。軫安
敢之楚也。王
召陳軫告之
曰。吾能聽子
言。子欲何之。
請爲子約車。
對曰。臣願之
楚。王曰。儀以
子爲之楚。吾
又自知子之
楚。子非楚且
安之也。軫曰。
臣出必故之
楚。以順王與

に國情を以て楚に輸せり。儀與に事に従ふ能はず。願はくは王之を逐へ。即し復た楚に之かんとせば、願はくは王之を殺せ。」王曰く、「軫安くんぞ敢て楚に之かん」と。王、陳軫を召して、之に告げて曰く、「吾れ能く子の言を聽かん。子何くに之かんと欲する。請ふ子の爲に車を約せん。」對へて曰く、「臣願はくは楚に之かん。」王曰く、「儀、子を以て楚に之くと爲せり。吾れ又自ら子の楚に之くを知る。子、楚に非ずんば、且に安くにか之かんとする。」軫曰く、「臣出では、必ず故らに楚に之いて、以て王と儀との策に順ひ、而して臣の楚に之くと否とを明かにせん。楚人に兩妻なる者有り。人其長けたる者を誂む。長けたる者之を誂る。其少き者を誂む。少き者之に許す。居る幾何も無く、兩妻を有する者死す。客、誂める者に謂つて曰く、「汝、長けたる者を取らんか、少き者か。」長けたる者を取らん。」客曰く、「長けたる者は汝を誂り、少き者は汝に和せり。汝何爲れぞ長けたる者を取る。」曰く、「彼の人の所に居らば、則ち其我に許さん欲す、今我が妻と爲らば、則ち其我が

儀之策。而明二
臣之楚與否
也。楚人有二
妻者。人誂其
長者。長者誂
之。誂其少者。
少者許之。居
無幾何。有二
妻者死。客謂
誂者曰。汝取
長者乎。少者
乎。曰。取長者
客曰。長者誂
汝。少者誂汝。
汝何爲取長
者。曰。居彼人
之所。則欲其
許我也。今爲
我妻。則欲其
爲我誂人也。

爲めに人を誂らんを欲す」と。今楚王は明主にして、昭陽は賢相也。軫人の臣と爲つて、常に國情を以て楚王に輸さば、楚王必ず臣を留めず、昭陽將に臣と事に従はざらんとす。此を以て臣の楚に之くや否やを明かにせん」と。軫出づ。張儀入つて王に問うて曰く、「陳軫果して安くにか之く。」王曰く、「夫れ軫は天下の辨士也。寡人を熱視して曰く、「軫必ず楚に之かん」と。寡人遂に奈何ともする無し。寡人因て問うて曰く、「子必ず楚に之かんか、則ち儀の言果して信也」と。軫曰く、「獨り儀の言のみに非ず、行道の人皆之を知れり。昔は子胥其君に忠にして、天下皆以て臣となさんと欲し、孝己其親を愛して、天下皆以て子となさんを欲す。故に僕妾を賣るに、里巷を出でずして取らるゝ者は良僕妾也、出婦の郷里に嫁する者は善婦也。臣、王に忠ならずんば、楚何ぞ軫を以て忠となさん。忠にして且つ棄てらる。軫、楚に之かずして何くにか之かん」と。」王以て然りと爲し遂に善く之れを待てり。

今楚王明主也。而昭陽賢相也。軫爲二人臣。而常以二國情。輸二楚王。王必不_レ留_レ臣。昭陽將_レ不_レ與_レ臣從事矣。以此明_レ臣之_レ楚與_レ不_レ軫出。張儀入問_レ王曰。陳軫果安之。王曰。夫軫天下辨士也。熱視寡人。曰。軫必之楚。寡人遂無奈何也。寡人因問曰。子必之楚也。則儀之言果信矣。軫曰。非_レ獨儀之言也。行道之人皆知之。昔者子胥忠_レ其君。天下皆欲_レ以爲_レ臣。孝己愛_レ其親。天下皆欲_レ以爲_レ子。故賣_レ僕妾。不出_レ里巷。而取者。良僕妾也。出嫁_レ於鄉里者。善婦也。臣不忠_レ於王。楚何以欲_レ爲_レ臣乎。軫爲_レ忠。尙見_レ棄。軫不_レ之楚。而何之乎。王以爲_レ然。遂善待_レ之。

● 王の臣となりて居りながら、秦の國の機密を楚に漏す ● 若しに同じ ● よもや復楚に往くなどいふそん
 な不都合なる事はすまい ● 何事にても汝の言ふ所を聴き容れん ● 具へん。用意して遣はさん ● 張儀
 ① 楚に往かないとすればどこに往くか ● 秦を出ては ● 計策なされた通りに順つて ● 臣が實際楚に
 往きて用ひらるゝ者なるか否かを明かにせん ● 二人の妻 ● 挑みて情を通せんとす ● 従はずして
 罵る ● 言ふ事をきゝて情を通ず ● 其内何程もたゞずして ● 挑みたる石の答也 ● 汝の言ふ
 事をきゝたり ● 女が ● 楚が用ひる機なれば、それは陳軫が秦に忠にして決して秦の内情を楚に告げな
 どせぬ證據也。秦に不忠なる者は楚にても用ひる筈なしと也 ● 陳軫王の前を退出す。以下「何くにかかかん」
 迄前節の鋪簡とし、或は前節の事を秦王が代つて張儀に辨解する也とす。解は凡て前節によりて知るべし ●
 辨解通用せり ● 先を越されて二の句が告げず閉口したり ● 買ひ取らるゝ ● 其同じ郷里 ●
 張儀を誑簡ならずして王の張儀に告ぐる所となす時は「以て」はこの一節を距て、「明かにせん」に接すと解すべ
 きか ● 待過せり

義渠君之魏公孫衍謂義渠

義渠の君、魏に之く。公孫衍、義渠の君に謂つて曰く、道遠くして、臣復た過るを

渠君曰。道遠。臣不得復過。矣。請謁事情。義渠君曰。願聞之。對曰。中國無事於秦。則秦且燒燬。國爲有事於秦。則秦且輕。使重幣而事君之國也。義渠君曰。謹聞。令居無幾。何。五國伐秦。陳軫謂秦王曰。義渠君變夷之賢君。王不如其心。秦王曰。

得じ。請ふ事情を謁けん。」義渠の君曰く、「願はくは之を聞かん。」對へて曰く、「中國秦に事なくば、則ち秦且に燒燬して君の國を獲んとし、中國もし秦に事あらば、則ち秦且に輕使重幣して、君の國に事へんとす。」義渠の君曰く、「謹んで令を聞く」と。居る幾何も無く、五國秦を伐つ。陳軫、秦王に謂つて曰く、「義渠の君は、蠻夷の賢君なり。王之に賂つて、以て其心を撫せんにかかず。」秦王曰く、「善し」と。因て文繡千匹、好女百人を以て、義渠の君に遺る。義渠の君、群臣を致して、謀つて曰く、「此れ乃ち公孫衍の謂ふ所」と。因て兵を起して秦を襲ひ、大いに秦人を李帛の下に敗る。

- 西方の蠻國 ● 魏の策士 ● 復び御尋ね申して御目に懸り難し ● 成事の實情 ● 中國諸侯が秦に向つて戰爭せざる時は ● 機打ちにして ● 「爲」は若也 ● 中國秦に事あるを爲さば一と訓ずるも可ならん ● 貴國の親を假らんが爲めに輕捷なる使を遣し重き幣物を捧げて ● 委細承知致したり ● 諸國趙燕齊の聯合軍 ● なで安んじて我味方とす ● 美しいぬひとりの布二千反 ● 美女 ● 召し集め ● 中國の軍秦を伐つるべしと也 ● 秦の邑。

善。因以文繡千匹。好女百人。遺義渠君。義渠君致羣臣而謀曰。此乃公孫衍之所謂也。因起兵襲秦。大敗秦人於李帛之下。

司馬錯與張儀爭論於秦。惠王前。司馬錯欲伐蜀。張儀曰。不如伐韓。王曰。請聞其說。對曰。魏善楚。下兵三川。塞轅轅氏之口。當屯留之道。魏絕南陽。楚臨南鄭。秦攻新城宜陽。以臨二周之郊。誅周王之罪。侵楚魏之地。周

司馬錯、張儀と秦の惠王の前に爭論す。司馬錯、蜀を伐たんと欲す。張儀曰く、「韓を伐つに如かず。」王曰く、「請ふ其説を聞かん。」對へて曰く、「魏を親しみ楚に善くし、兵を三川に下して、轅轅・轅氏の口を塞ぎ、屯留の道に當つて、魏は南陽を絶ち、楚は南鄭に臨み、秦は新城・宜陽を攻め、以て二周の郊に臨んで、周主の罪を誅め、楚・魏の地を侵さば、周自ら救はれざるを知り、九鼎寶器必ず出でん。九鼎に據つて、圖籍を按じ、天子を挾さんで、以て天下に令せば、天下敢て聽かざる莫けん。此れ王業也。今夫れ蜀は西僻の國にして、戎狄の長也。兵を敵らし衆を勞するも、以て名を成すに足らず。其地を得るも、以て利とするに足らず。臣聞く、「名を争ふ者は朝に於てし、利を争ふ者は市に於てす」と。今三川・周室は、天下の市朝也。而るを王争はず、願つて戎狄を争ふ。王業を去る遠し」と。司馬錯曰

自知不救。九鼎寶器必出。魏挾天子以令天下。天下莫敢不聽。此王業也。今夫蜀、西僻之國。而戎狄之長也。敵兵勞衆。不足以成名。得其地不足以為利。臣聞爭利者於市。今三川周室也。而王不爭焉。願争於戎狄。去王業遠

く、「然らず。臣之を聞く、「國を富さんと欲する者は務めて其地を廣め、兵を強うせんと欲する者は務めて其民を富し、王たらんと欲する者は務めて其徳を博む。三資の者備はつて、王之に隨ふ」と。今王の地小にして民貧し。故に臣願はくは事に易きに從はん。夫れ蜀は西僻の國、戎狄の長にして、桀紂の亂あり。秦を以て之を攻めんは、辟へば豺狼をして群羊を逐はしむるが如し。其地を取らば以て國を廣むるに足り、其財を得ば以て民を富すに足らん。兵を繕め衆を傷はずして、彼已に服せん。故に一國を抜くも、而も天下以て暴とせず、利四海を盡すも、諸侯以て貪と爲さじ。是れ我れ一舉して名實兩つながら附き、而して又暴を禁じ亂を正すの名あり。今韓を攻め天子を劫かす。天子を劫かすは惡名也。而して未だ必ずしも利あらず、又不義の名あり。而して天下の欲せざる所を攻むるは危し。臣請ふ其の故を講さん。周は天下の宗室也。齊・韓は周の與國也。周自ら九鼎を失ふを知り、韓自ら三川を亡ふを知らば、則ち必ず將に二國力を并せ、謀を合せて、

矣。司馬錯曰。不然而臣聞之。欲富國者務廣其地。欲強兵者務富其民。欲王者務博其德。三資者備而王隨之矣。今王之地小民貧。故臣願從事於易。夫蜀西僻之國也。而戎狄之長也。而有桀紂之亂。以秦攻之。辟如使豺狼逐羣羊也。取其地足以廣國也。得其財足以

以齊趙に因て解を楚魏に求めんとす。鼎を以て楚に與へ、地を以て魏に與ふるも、王禁する能はじ。此れ臣が所謂危きなり。蜀を伐つての完きに如かず。惠王曰く、「善し。寡人子に聽かん」と。卒に兵を起して蜀を伐ち、十月にして之を取り、遂に蜀を定め、蜀主は號を更めて侯と爲し、而して陳莊をして蜀に相たらしむ。蜀既に屬して、秦益々強く、富厚にして諸侯を輕んず。

● 秦の諸臣。苴と蜀と相攻め各々援兵を秦に乞ひ、又韓來りて秦を侵せし時の事也 ● 韓の地。河洛伊の三川あるが故に地名とす ● 韓の山の名。要害の所也 ● 韓の山の名。因つて又地名とす ● 韓の地名 ● 韓の地名 ● 共に韓の地名 ● 東周西周 ● 正解本「周王」に作る、坊本に據つて改む ● 諸侯の「侵楚魏之地」の五字を衍といふ。從ふべし ● 周の王室を出て、秦に入らん ● 九鼎を楯に取りて ● 地國戸籍を取調べ ● 天下に王たるの業 ● えびす。野蠻國 ● 名譽を掲ぐるに足らず ● 名譽を争ふには朝廷に於てすべく、益を争ふには市場に於てすべし ● 三川は利益多き地、周室は名譽の存する所也 ● 反に同じ ● 此二つの資本 ● 王位王業は自然とそれについて來る ● まづ爲し易き方に取掛る ● 古の聖王桀紂の如き暴虐の亂政ありて國治まらず ● 韓也 ● 兵を完うして傷る事なく ● 蜀の全國を抜き取りても ● 四方邊國の利を秦一國に取り盡すも ● 暴政ならざといふ名譽と一國を抜き四海の利を盡すの實益と ● 桀紂の如き暴虐を禁じ亂政を救ひ正すの美名 ● 申上げん ● 本家本元と尊

以富民。繕兵不傷衆。而彼已服矣。故拔一國而天下不以爲暴。利盡四海。諸侯不以爲貪。是我一舉而名實兩附。而又有二禁。暴正亂之名。今攻韓劫天子。劫天子惡名也。而未必利也。又有二不義之名。而攻天下之所不欲。危矣。臣請謁其故。周天下之宗室也。齊韓周之與國也。周自知失九鼎。韓自知亡三川。則必將下二國并力合謀。以因于齊趙。而求解乎楚魏。以鼎與楚。以地與魏。王不能禁。此臣所謂危。不如伐蜀之完也。惠王曰。善。寡人聽子。卒起兵伐蜀。十月取之。遂定蜀。蜀主更號爲侯。而使陳莊相蜀。蜀既屬。秦益強。富厚輕諸侯。

樂する國 ● 同盟國 ● 齊趙に仲介の勞を擔がて、秦國より攻伐せらるる、韓魏の解決を楚魏に求めん ● 其解決の報酬として也 ● 平定し。奠定し ● 王國を下して侯爵とし ●

齊楚を助けて秦を攻め、曲沃を取る。其後、秦、齊を伐たんと欲す。齊楚の交善し。惠王之患へ、張儀に謂つて曰く、「吾れ齊を伐たんと欲すれども、齊楚方に懼す。子寡人の爲めに之を慮れ、奈何せんとかする。張儀曰く、「王其れ臣の爲めに車と幣とを約せよ。臣請ふ之を試みん」と。張儀、南楚王に見えて曰く、「敵邑の王の説ふ所甚だしき者は、大王より大なるは無く、唯儀の甚だ臣たるを願ふ所の者も、亦大王より大なるは無し。敵邑の王の甚だ憎む所の者は、齊王より

約車并幣。臣請試之。張儀南見楚王曰。敵邑之王所說甚者。無大王。唯儀之所甚願爲臣者。亦無大王。王敵邑之王。所甚憎者。無先齊王。唯儀之所甚憎者。亦無先齊王。今齊王之罪。其於敵邑之王甚厚。敵邑欲伐之。而大國與之。權是以敵邑之王不得事令。而

先なるは無く、唯儀の甚だ憎む所の者も、亦齊王より先なるは無し。今齊王の罪、其の敵邑の王に於けるや甚だ厚し。敵邑之を伐たんと欲すれども、而も大國之と權す。是を以て敵邑の王は大王に事ふるを得ず、儀は臣たるを得ざる也。大王苟に能く關を閉ぢ齊に絶たば、臣請ふ秦王をして商於の地、方六百里を獻せしめん此の若くんば、齊必ず弱からん。齊弱くば、則ち必ず王の役とならん。則ち是れ北、齊を弱くし、西、秦に德し、而して商於の地を私して、以て利を爲す也。則ち此れ一計にして三利俱に至るなり」と。楚王大に説び、之を朝廷に宣言して曰く、「不穀商於の地、方六百里を得たり」と。羣臣聞見する者畢く賀す。陳軫後れて見え、獨り賀せず。楚王曰く、「不穀、一兵を煩はさず、一人を傷はさずして、商於の地六百里を得たり。寡人自ら以て智なりと爲す。諸士大夫皆賀す。子獨り賀せざるは何ぞや。」陳軫對へて曰く、「臣、商於の地は得可らずして、而も患の必ず至らんを見る。故に敢て妄りに賀せざる也。」王曰く、「何ぞや。」對へて曰

儀不得爲臣也。大王苟能閉關絕齊。臣請使秦王獻商於之地方六百里。若此齊必弱。齊弱則必爲王役矣。則是北弱齊。西德於秦。而私商於之地。以爲利也。則此一計。而三利俱至。楚王大說。宣言於之。朝廷曰。不穀得商於之地方六百里。羣臣聞見者畢賀。陳軫

く、「夫れ秦の王を重んずる所以は、王の齊を有するを以てなり。今地未だ得可らずして齊先づ絶たば、是れ楚孤となるなり。秦又何ぞ孤國を重んぜん。且つ先づ地を出して齊に絶つは、秦の計必ず爲さじ。先づ齊に絶つて後、地を責めば、且に欺を張儀に受けんとす。欺を張儀に受けば、王必ず之を惋みん。是れ西、秦の患を生じ、北、齊の交を絶つなり。則ち兩國の兵必らず至らん」と。楚王聽かずして曰く、「吾が事善し。子其れ口を弭めて言ふ無かれ。以て吾が事を待て」と。楚王、人をして齊に絶たしむ。使者未だ來らざるに、又重ねて之に絶つ。張儀反る。秦、人をして齊に使せしめ、齊・秦の交陰かに合ふ。楚因て一將軍をして地を秦に受けしむ。張儀至り、病と稱して朝せず。楚王曰く、「張子、寡人が齊に絶たすと以へるか」と。乃ち勇士をして往いて齊王を嘗らしむ。張儀、楚の齊に絶ちしを知り、乃ち出でて使者を見て曰く、「某より某に至る廣從六里。」使者曰く、「臣六百里を聞く。六里を聞かず。」儀曰く、「儀は固り以て小人也、

後見。獨不賀。楚王曰。不穀不煩一兵。不傷一人。而得商於之地六百里。寡人自以爲智矣。諸士大夫皆賀。子獨不賀。何也。陳軫對曰。臣見商於之地不可得。而患必至也。故不敢妄賀。王曰。何也。對曰。夫秦所以重王者。以王有齊也。今地未可得。而齊先絕。是楚孤也。

安んぞ六百里を得ん」と。使者反つて楚王に報ず。楚王大に怒り、師を興して秦を伐たんと欲す。陳軫曰く、「臣以て言ふ可きか。」王曰く、「可なり。」軫曰く、「秦を伐つは計に非ず。王之に一名都を賂うて、之と齊を伐たんに如かず。是れ我れ秦に亡つて、償を齊に取る也。楚國尙全からずや。王今已に楚に絶つて、欺を秦に責む。是れ吾れ齊・秦の交を合する也。國必ず大に傷はれん」と。楚王聽かず、遂に兵を擧げて秦を伐つ。秦、齊と合し、韓氏之に従ふ。楚兵大に杜陵に敗る。故に楚の土壤士民削弱なるに非ず、僅かに以て亡を救ひしものは、計、陳軫に失して、聽を張儀に過りたればなり。

●地名 ●交驩す。仲よく交はる ●常用。贈物の用也。「并」は「與」と同意、「并びに」と訓ずるも可。「約」は具也。用意せられよ ●秦をいふ自稱 ●「唯」の字古文の例によりて「雖」とも訓ず。「儀」は張儀の自稱 ●齊と對しく交る ●原文「合」は「大王」の誤 ●大王に仕へて臣たるを ●齊と楚との國境なる開門 ●絶交せば ●秦の二つの地名 ●齊は楚の援を失ふ故 ●使役となりて甘んじて楚に服従せん ●秦に恩恵を施し ●三つの利益が一緒に來る ●王の自稱。寡人といふに同じ ●齊といふ後稱がある

秦又何重孤國。且先出地絶齊。秦計必弗爲也。先絶齊後責地。且必受欺於張儀。王必愧之。是西生秦患。北絶齊交。則兩國兵必至矣。楚王不聽。曰。吾事善矣。子其弭口無言。以待吾事。楚王使二人絶齊。使者未來。又重絶之。張儀反。秦使二人使齊。齊秦之交陰合。楚因使一將軍受地於秦。張儀至。稱病不朝。楚王曰。張子以寡人不絶齊乎。乃使勇士往。張儀知楚絶齊也。乃出見使者曰。從某至某。廣從六里。使者曰。臣聞六百里。不聞六里。儀曰。儀固以小人。安得六百里。使者反報楚王。楚王大怒。欲興師伐秦。陳軫曰。臣可以言乎。王曰。可矣。軫曰。伐秦非計也。王不如因而賂之。一名都與之。伐齊。是我亡於秦。而取償於齊也。楚國不尙全乎。王今已絶齊。而責欺於秦。是吾合齊秦之交也。國

るから也 ●孤立無援 ●先きに秦より楚に地を出して置き其後楚が交りて齊に絶つといふ順序にする事は ●約東の地を與へよと責め求めば ●張儀に欺かれて地は取り得ざらん ●其機を事なしたる疑には ●細工は流々仕上を御覽といふ口吻也 ●絶交の旨を通ずる使者の未だ歸り來らざるに待還しく更に又使者をして絶交せしむ ●張儀との誓約によりて ●秦に歸り至りて後 ●張儀が病と稱して朝せず、爲めに土地取引の事はかゝりしからぬは、或は張儀先生は寡人が楚と絶交せざるものと思ひ居るにはあらずや、さらば其意を十分に表明せんとも也。一以は謂の意 ●差上げるべき地はどこそこからどこそこ迄廣縦六里 ●輕き身分。小臣。微臣 ●六百里などいふ廣き地を領し得んや ●軍を興して ●前には黙れとの御察なりしが斯く相成りたる上は一言申上げてよるしきか ●秦に ●右高き節節 ●やはり完全には相違なき譯ならざや ●欺きたる罪を秦に責む ●楚の地 ●以下記者の評也 ●かねて他より削られて弱くなりて居りしに非ず ●やつと亡びないだけにて散々に失敗したる譯は ●計につきては陳軫の計を用ひず、過つて張儀の言を聽きたるが故也

亡於秦。而取償於齊也。楚國不尙全乎。王今已絶齊。而責欺於秦。是吾合齊秦之交也。國

必大傷。楚王不聽。遂舉兵伐秦。秦與齊合。韓氏從之。楚兵大敗於杜陵。故楚之土壤士民非削弱。僅以救亡者。計失於陳軫。過聽於張儀。

楚絶齊。齊舉兵伐楚。陳軫謂楚王曰。不如下以地東解於齊。西講於秦。王使陳軫之秦。秦王謂軫曰。子秦人也。寡人與子故也。寡人不佞不能親國事也。故子棄寡人。事楚王。今齊楚相伐。或謂救之便。或謂救之不便。子獨不可下

楚、齊に絶ち、齊、兵を舉げて楚を伐つ。陳軫楚王に謂つて曰く、「王地を以て東齊に解き、西秦に講せんに如かず」と。王、陳軫をして秦に之かしむ。秦王、軫に謂つて曰く、「子は秦人也。寡人子とは故あり。寡人不佞、國事を親らする能はず。故に子寡人を棄て、楚王に事ふ。今齊・楚相伐つ。或は之を救ふを便なりと謂ひ、或は之を救ふを不便なりと謂ふ。子獨り忠を以て子が主の爲に計り、其餘を以て寡人の爲にす可らざるか。」陳軫曰く、「王獨り吳人の楚に遊べる者を聞かずや。楚王甚だ之を愛す。病めり。故らに人をして之に問はしめて曰く、「誠に病めるか。意亦思ふか」と。左右曰く、「臣其思ふと思はざるを知らず。誠に思はば、則ち將に吳吟せんとす」と。今軫將に王の爲めに吳吟せんとす。王、夫の管與の説を聞かずや。兩虎あり、人を争つて鬪ふ。管莊子將に之を刺さんとす。管與之を止

以忠爲子主計。以其餘爲中寡人上乎。陳軫曰。王獨不聞吳人之遊楚者乎。楚王甚愛之。病。故使人問之。曰。誠病乎。意亦思乎。左右曰。臣不知其思與不。思。誠思。則將吳吟。今軫將爲王吳吟。王不聞。夫管與之說。乎。有兩虎争人而鬪者。管莊子將刺之。管與止之。曰。虎者

めて曰く、「虎は戻蟲なり、人は甘餌なり。今兩虎人を争うて鬪ふ。小なる者は必ず死し、大なる者は必ず傷かん。子傷虎を待つて之を刺さば、則ち是れ一舉して兩虎を兼ねるなり。一虎を刺すの勞だに無くして、兩虎を刺すの名あらんと。齊・楚今戦ふ。戦はば必ず敗れん。敗れば王兵を起して之を救へ。齊を救ふの利ありて、楚を伐つのは害無からん。計・聽に覆逆を知る者は、唯王のみ可なり。計は事の本なり、聽は存亡の機なり。計失し聽過つて、能く國を有つ者は寡し。故に曰く、「計に一二ある者は悖し難く、聽に本末を失する無き者は惑はし難し」と。」

- 和解し ● 講和せん ● 緣故。古より心易き者也 ● 不才 ● 他人任せにして置いた爲めに
- 乘が野を也 ● 乘に取りて都合宜し ● 楚王を指す ● 計つて呉れる譯には行かざるか ● 遊んだ事に
- ついでの話 ● 其吳人を ● 其吳人が病氣に罹れり ● それとも故郷吳國の事を思ひこがれて居るに
- ヤ。「意」の字古く抑に通ず ● 然し誠に吳國を思ふならば ● 吳國流の口吟を爲して思をまぎらすならん
- それにて病の眞否を判断せられよと也 ● 自分もやはり乘の事を忘れず思ひ居る故決して乘の事を惡しか
- れとは計らはぬと也 ● 共に人を食はんとして ● 食糧なる動物 ● 眞名を得ん ● 野を
- 計に反覆即ち下文に所謂一二あるを知り、聽に順逆即ち下文に所謂本末あるを知る者は。以下或は他章の錯簡か。

虞。今兩虎爭人而鬪。小者必死。大者必傷。子待傷虎而刺之。則是一舉而兼兩虎也。無刺一虎之勞。而有刺兩虎之名。齊楚今戰。戰必敗。敗王起兵救之。有救齊之利。而無伐楚之害。計聽知覆逆者。唯王可也。計者。事之本也。聽者。存亡之機。計失而聽過。能有凶者寡也。故曰。計有二。二者難悖。聽無失本。末者難惑。

王の如き賢君にして始めて可也の意か、又は王自らの責任として爲すべき事也の意か、或は明王斷主にして始めて可也の意か。此手で行かざれば此手で行くといふ機に順序次第の立ち居る義か、又は陰陽表裏の意か。亂也。他より其計を亂して行はれざらしむるをいふ。

秦惠王死。公孫衍欲窮張儀。李驪謂公孫衍曰。不如召甘茂於魏。召公孫顯於韓。起樛里子於國。三人者。皆張子之驪也。公用之。則諸侯必見張子之無秦矣。

武王

秦の惠王死す。公孫衍、張儀を窮しめんと欲す。李驪、公孫衍に謂つて曰く、「如かず、甘茂を魏より召き、公孫顯を韓より召き、樛里子を國に起さんには。三人の者は皆張子の驪也。公之を用ひば、則ち諸侯必ず張子の秦無きを見ん。」

排斥して困らす。秦國の在野の中より起用す。秦に離權無きを知らん。

● 排斥して困らす ● 秦國の在野の中より起用す ● 秦に離權無きを知らん

張儀欲假秦兵以救魏。左成謂甘茂曰。不如予之。魏不反秦兵。張子不反秦兵。魏若反秦兵。張子得志於魏。不取反於秦。矣。張子不去秦。張子必高子。

張儀、秦の兵を假りて、以て魏を救はんと欲す。左成、甘茂に謂つて曰く、「之を予ふるに如かず。魏、秦の兵を反さずんば、張子、秦に反らじ。魏若し秦の兵を反さんか、張子志を魏に得て、敢て秦に反らじ。張子、秦を去らざるも、張子必ず子を高しとせん。」

● 秦の兵を假死せしめて秦に反さざるには張儀は自分の責任上誅戮を恐れて秦に歸り來らじ ● 戰勝して秦の兵をかへす位ならば援兵が成功したる譯ゆゑ張儀は魏の信任を受けて敢て秦に歸らざる ● 何かの都合にて張儀行きて魏を救はぬ事となり秦を立退かざるも必ず時公を高義の士として貴ばん。この策は張儀を國外に擯り去らんとするにあり、萬一狡去らざるも又我貴ばれんと也。正解には「張子」は「秦不」の誤にて「張子秦を去らざるは秦必ず子を高しとせし」と訓ずべしといふ

張儀の樛里疾を殘はんとするや、重んじて楚に之かきしめ、因て楚王をして、之が爲めに相とせんことを秦に請はしむ。張子、秦王に謂つて曰く、「樛里疾を重んじて之を使せしむるものは、將に以て國交を爲さんとするなり。今身楚に在り。楚王因て爲めに相とせんことを秦に請ふ。臣其言を聞くに曰く、『王、儀を秦に窮し

樛里疾一而使
之者。將三以爲
國交一也。今身
在楚。楚王因
爲請二相於秦。
臣聞三其言。曰。
王欲窮二儀於
秦一乎。臣請助
王。楚王以爲
然。故請相也。今王誠聽之。彼必以國事楚王。秦王大怒。樛里疾出去。

めんと欲せんか、臣請ふ王を助けんと。楚王以て然りと爲す。故に爲めに相を請ふなり。今王誠に之を聽かば、彼必ず國を以て楚王に事へんと。秦王大に怒る。樛里疾出走す。

● 先づ殊更に重く待遇して ● 因て一方には楚王に手を副して楚王をして樛里疾の爲めに彼を秦の宰相と爲さん事を秦王に請はしむ ● 樛里疾自身 ● 樛里疾が楚王に言ひたる言 ● 楚王 ● 樛里疾の自稱 ● 秦國を以て楚王に事奉す。即ちひたすら楚の懐心を取らんとして秦の不爲めをも敢てすべしと也

張儀欲下以漢
中一與楚。請秦
王。曰。有漢中
蠶。種樹不處
者。人必害之。
家有二不宜之
財。則傷。今漢
中南邊爲楚

張儀、漢中を以て楚に與へんと欲す。秦王に請うて曰く、「漢中を有つは蠶也。樹を種て處ならざれば、人必ず之を害し、家に不宜の財あれば則ち傷ふ。今漢中の南邊は楚の利たり、此れ國の害也」と。甘茂、王に謂つて曰く、「地大なる者は固より當に憂多きか。天下變あらば、王、漢中を割いて、以て楚に和せ。楚必ず天下に畔いて王に與せん。王今漢中を以て楚に與へば、即ち天下に變あらば、王

何を以てか楚と市せん。」

● 地名 ● 木の心の虫。國害の蠶 ● その種え場所が適當ならざる時は ● 不義也 ● 傷害がある ● 秦に遠くして楚に近く却て楚國に取りて利益なる地也 ● 秦が列國と開戦する如き事あるば ● 何を以て楚と利益を交換し彼を我味方に附けんや

利。此國累也。
甘茂謂王曰。
地大者固多
憂乎。天下有
變。王割漢中
以爲和。楚
必畔天下而與王。王今以漢中一與楚。即天下有變。王何以市楚也。

爲魏謂魏冉
曰。公聞東方
之語乎。曰。弗
聞也。曰。辛張
陽母澤說魏
王薛公公叔
也。曰。臣戰。載
主契國。以與
王約。必無患
矣。若有敗之
者。臣請挈領。

魏の爲に魏冉に謂つて曰く、「公、東方の語を聞けりや。」曰く、「聞かず。」曰く、「辛張・陽母澤、魏王・薛公・公叔に説くや、曰く、「臣戦ふときは、主を載せ國に契し、以て王と約す、必ず患無けん、若し之を敗る者あらば、臣請ふ領を挈せん」と。然れども臣患ふるあり。夫れ楚王の其國を以て冉に依るや、臣の主に事あらんとす。此れ臣の甚だ患ふる所なり」と。今公、東して因て楚に言はば、是れ張澤の言をして禹たらしめ、而して務めて公の事を敗る也。公如かず、公の國に反り、楚に徳して、薛公の公の爲めにするを觀、三國の秦に求めて得る能はざる所の者

然而臣有患也。夫楚王之以其臣請舉領然而臣有患也。此十六夫楚王之以其國依丹也。而事臣之主。此臣之所甚患也。今公東而因言於楚。是令張儀之言爲禹而務敗公之事也。公不如反三國。德楚而觀薛公之爲公也。觀三國之所求於秦。而不能得於薛公者。而公請之以自重也。張儀與澤之所不能得於薛公者。而公請之以自重也。

を觀、請うて以て三國に號して、以て自ら信にし、張と澤との薛公に得る能はざる所の者を觀、公之を請うて、以て自ら重くせんには。」

● 或人が也。此章蘇頌あらん ● 秦の宰相 ● 山東諸侯間の話 ● 二人共に秦の人。但異説ありて明確ならず ● 田文即ち孟嘗君也。當時魏の相たり ● 魏の相 ● 先君の代理者の意味を以て先君の木主(位牌)を車に載せて出て、國民に契約命令して衆心の一致を求め、以て次の如く王と約束す ● 必ず御心配御無用也 ● 若し敗軍に及ぶ事あらば ● 自ら頭を刎ねん。又自ら頭を持ちて諍議を受けんの意と ● 魏冉 ● 依願する ● 正解に「事ハ攻伐也、秦楚合シテ魏ヲ伐ツヲ謂フ、薛公公叔ニ對ス故ニ臣主ト曰フ」と。一説には「臣の主ニ事ユ」と訓ず。要するに文義明確ならず ● 楚の依頼により楚の爲に魏を伐つ事を楚に言はすの意 ● 原文「張儀」は「張儀」の誤 ● 禹は習者なり、因て二人の言の中するをいふ ● 秦 ● 魏 ● 魏の誤ならん ● 齊魏韓 ● 三國の爲めに之を兼に請ひて其願の達する機にしてやりこれを三國に宣言し ● 信義が厚き事を示す ● 原文「張儀」の「儀」は衍也 ● 二人の爲めに之を薛公に請うて遣り ● 二人に對し公の威重を示されよ

醫扁鵲、秦の武王に見ゆ。武王之に病を示す。扁鵲除かんと請ふ。左右曰く、

之病。扁鵲請除。左右曰。君之病。在耳之下。除之。未必已也。將使耳不聽。目不明。君以告扁鵲。扁鵲怒而投其石。曰。君與知之者。一謀之。而與不知者。敗之。使此知秦國之政也。則君一舉而亡國矣。

「君の病は、耳の前、目の下に在り。之を除くとも、未だ必らずしも已まじ。將に耳をして聰ならず、目をして明ならずらしめんとす」と。君以て扁鵲に告ぐ。扁鵲怒つて其石を投じて曰く、「君之を知る者と之を謀つて、知らざる者と之を敗る。此をして秦國の政を知らしめば、則ち君一舉にして國を亡ぼさん。」

● 史記に傳ある扁鵲とは二百年も年代に相違あり、別人の其名を襲げたるものなるといふ ● 其病を取り除く ● 近侍の臣王に向つて曰く ● 之を取り除くとも必ず平癒すとは分らず ● まかり間違へば耳もよく聞えず ● 目もよく見えざるに至らん ● 此の近侍の言を ● 稜(イシバリ)也 ● よく病氣の事の分つてゐる専門家が自身を指す ● 治療に關する御相談をなさりながら ● 何も知らぬ素人即ち左右 ● 其様な御心掛にて ● 一たび何事かをすれば直ちに

秦武王謂甘茂曰。寡人欲下車通三川。以闕周室。而寡

秦の武王、甘茂に謂つて曰く、「寡人、車三川に通じて、以て周室を闕はんと欲す。而せば寡人死すとも朽ちざらんか。」甘茂對へて曰く、「請ふ魏に之いて、約して韓を伐たん」と。王、向壽をして輔行せしむ。甘茂、魏に至つて、向壽に謂へらく、

人死不朽乎。甘茂對曰。請之魏約伐韓。王令向壽輔行。甘茂至魏。謂向壽子歸告王曰。魏聽臣矣。然願王勿攻也。事成盡以爲子功。向壽歸以告王。王迎甘茂於息壤。甘茂至。王問其故。對曰。宜陽大縣也。上黨南陽積之。久矣。名爲縣。其實郡也。今王倍數險。行千里。

「子歸つて王に告げて曰へ、「魏、臣に聽けり。然れども願はくは王攻むる勿れ」と。事成らば盡く以て子の功とせん」と。向壽歸つて以て王に告ぐ。王、甘茂を息壤に迎ふ。甘茂至る。王其故を問ふ。對へて曰く、「宜陽は大縣也。上黨・南陽の、之に積むこと久し。名は縣たるも其實は郡也。今ま王、數險を倍き、行くこと數千里にして、之を攻むるは難し。臣聞く、張儀、西、巴蜀の地を并せ、北、西河の外を取り、南、上庸を取りしも、天下以て張儀を多とせずして、先王を賢とせり。魏の文侯、樂羊をして將とし中山を攻めしめ、三年にして之を抜く。樂羊反つて功を語るや、文侯之に謗書一篋を示す。樂羊再拜稽首して曰く、「此れ臣の功に非ず、主君の力也」と。今臣は穢旅の臣也。穢里疾・公孫衍の二人の者、韓を挾さんで議せば、王必ず之に聽かん。是れ王は魏を欺き、而して臣は公仲侈の怨を受くる也。昔、曾子費に處る。費人に曾子と名族を同じうする者あり、人を殺す。人、曾子の母に告げて曰く、「曾參人を殺せり」と。曾子の母曰く、「吾が

而攻之難矣。臣聞張儀西并巴蜀之地。北取西河之外。南取上庸。天下不以爲多。張儀而賢先王。魏文侯令樂羊將攻中山。三年而拔之。樂羊反而語功。文侯示之謗書。一箠。樂羊再拜稽首曰。此非臣之功。主君之力也。今臣竊旅之臣也。穢里疾・公孫衍二人者。挾

子は人を殺さず」と。織ること自若たり。頃くありて、人又曰く、「曾參人を殺せり」と。其母尙ほ織ること自若たり。之を頃くして、一人又之に告げて曰く、「曾參人を殺せり」と。其母懼れて杼を投じ、杼を踏えて走れり。夫れ曾參の賢と慈母の信とを以てして、而も三人之を疑はしむれば、則ち慈母も信する能はざる也。今臣の賢は曾子に及ばず、而して王の臣を信する、又未だ曾子の母に若かず。臣を疑はす者は適に三人のみならず。臣、王の臣が爲めに杼を投ぜんを恐る。王曰く、「寡人聽かじ。請ふ子と盟はん」と。是に於てか之と息壤に盟ふ。果して宜陽を攻むる五月にして抜く能はず。穢里疾・公孫衍の二人在り、之を王に争ふ。王將に之を聽かんとし、甘茂を召して之を告ぐ。甘茂對へて曰く、「息壤彼に在り。」王曰く、「之あり」と。因て悉く兵を起し、復た甘茂をして之を攻めしめ、遂に宜陽を拔けり。

● 我軍が魏國三川に通行して洛陽に至り、周の王室の機嫌を窺ひ、あはよくは周に代りて天子たるとす

韓而請。王必聽之。是王欺魏而臣受二公仲侈之怨也。昔者曾子處費。費人有與曾子同名者。而殺之。人告曾子。曾子曰。吾不殺。人織自若。有頃焉。人又曰。曾參殺。人。其母向織。自若也。頃之。一人又告之曰。曾參殺。人。其母懼。投杼。踰牆而走。夫以曾參之賢。與之母之信也。而三人疑之。則慈母不能信也。今臣之賢。不及曾子。而王之信臣。又未若曾子之母也。疑臣者不適三人。臣恐王為臣之投杼也。王曰。寡人不聽也。請與子盟。於是與之盟。息壤。果攻宜陽。

● 臣の言を聽入れ韓を伐つにつきての商賈は成れり。● 甘茂を召し返し、一刻も早く事の次第を聽かんが爲め、王は息壤といふ地まで其歸るを出迎へたる也。● 韓を攻むるには宜陽を取るが大切なるが、其宜陽は大縣なる上に上黨や兩陽より納むる租税穀物は皆この宜陽に積少貯ふる事年久しく、糧食等も十分也。● 支那の古制にては縣は郡の下にある也。● 歌嶺所の險阻を越えて、「倍」は背也。● 張儀の功勞を多大なりとせずして能く彼を信用せる先王を賢者とせり。● 國の名。● 諸臣が樂羊の不成蹟を攻撃したる文書一はこ謹んで讀を下げる。● 此誹謗の言を聽かして臣を信任し給へる力也。● 他國より來りて御泰公申す者として之が中止を請ふれば王は必ず之に聽かん若し其權な事になる時は。● 韓の相也。一本公仲朋に作る、然らば後章に「韓明」といふと同一人か。韓を伐ちたるは大王の腹意にあらざ甘茂の意に出づとの怨を公仲侈より受けん。● 曾參。● 魯の邑。● 同姓同名の者。● 平氣ではたを離り居たり。● 機の上を糸を持つ者、ひ。● 普通「をさ」と訓ずれども「ひ」の方が正し。● 我子曾參に對する厚き信用。● 王をして臣を疑はしむるやうに持掛ける者は。● 邊に臣を疑ふに至らん事を恐る。● 如何なる言ありとも聽かざして子に一任せん。● 秦國の中に在り。● 斯く長引きて宜陽の取れぬからは寧ろ攻伐を中止すべしと諫争せる也。● 宜陽攻伐の中止。● 彼所の盟を忘れ給へるか詰問せる也。● 如何にも盟ひたる事あり。

陽。五月而不能拔也。樛里疾公孫衍二人在爭之。王將聽之。召甘茂而告之。甘茂對曰。息壤在彼。王曰。有之。因悉起兵。復使甘茂攻之。遂拔宜陽。

宜陽之役。馮章謂秦王曰。不拔宜陽。韓楚乘吾敝。國必危矣。不如許楚漢中。以權之。楚懼而不進。韓必孤。無奈何。秦何矣。王曰。善。果使馮章許楚漢中。而拔宜陽。楚王以其言責漢中於馮章。馮章謂秦王曰。王逐亡臣。因謂楚王曰。寡人固無地。而許楚王。

● 宜陽の役、馮章秦王に謂つて曰く、「宜陽を拔かずんば、韓・楚吾が敵に乗じ、國必らず危からん。如かず、楚に漢中を許して以て之を懼ばさんには。楚懼んで進まずば、韓必らず孤にして、秦を奈何ともする無けん。」王曰く、「善し」と。果して馮章をして楚に漢中を許さしめ、而して宜陽を抜く。楚王其言を以て漢中を馮章に責む。馮章秦王に謂つて曰く、「王遂に臣を亡せしめ、因て楚王に謂つて曰く、「寡人固より地の而て楚王に許したるもの無し」と。」

● 乘人 ● 楚に漢中の地を讓與せんと約束して ● 孤立無援 ● 早く漢中の地を讓與せよと責め求む ● 正解本「遂」に作るも功本によりて「遂」となすべし也 ● 遂にする事を御許ありて ● 差上げると楚王に御約束したる地面などは固よりなし、恐らく馮章が自分一人の心にて取計らひし事なりん

甘茂攻宜陽。三鼓之而卒不上。秦之右將有尉。對曰。公不論兵。必大困。甘茂曰。我羈旅而得相秦者。我以宜陽餌王。今攻宜陽而不拔。公孫衍擗里疾挫我於內。而公中以韓窮我於外。是無伐之日。已。請明日鼓之。而不可下。因以宜陽之郭爲墓。於是出私金以益公賞。明日鼓之。而宜陽拔。

甘茂宜陽を攻め、三たび之を鼓して、卒上らず。秦の右將、尉あり。曰く、「公、兵を論ぜず、必ず大いに困しまん」と。甘茂曰く、「我れ羈旅にして秦に相たるを得るものは、我れ宜陽を以て王に餌すればなり。今宜陽を攻めて抜かずんば、公孫衍・擗里疾、我を内に挫き、公仲、韓を以て我を外に窮しめん。是れ伐つの日なからん已。請ふ明日之を鼓して下す可らずんば、因て宜陽の郭を以て墓とせん」と。是に於て、私金を出して、以て公賞を益す。明日之れを鼓して、而して宜陽拔けぬ。

● 三度も進軍の號令を擧げたれど卒進んで城に登り敵を攻めんとせず ● 右將の部下に軍尉有り、曰く兵の羈を研究せずして此堅城を攻む、必ず失敗して困まん。原文の「對」の字衍。 ● 旅の臣。他國者 ● 宜陽を益すとして秦の王を釣りたれば也 ● 秦の國內に ● 韓の相 ● 韓の勢力を以て我を國外に困めん ● 一説に「伐」は「茂」の誤にて「是れ茂無きの日のみ」即ち余の亡ぶべき日也の義とす ● 外郭に骨を埋めん。即ち尉死の外なしと也 ● 斯くして其翌日

宜陽未得。秦死傷者衆。甘茂欲息兵。左成謂甘茂曰。公內攻於擗里疾。公孫衍而外與韓朋爲怨。今公用兵無功。公必窮矣。公不如進兵攻宜陽。宜陽拔。則公之功多矣。是擗里疾公孫衍無事也。秦衆盡怨之深矣。

宜陽未だ得ず、秦の死傷する者衆し。甘茂兵を息めんと欲す。左成、甘茂に謂つて曰く、「公、内は擗里疾・公孫衍に攻められ、外は韓朋と怨を爲す。今公、兵を用ひて功無くんば、公必らず窮せん。公如かず兵を進めて宜陽を攻めんには。宜陽拔けば、則ち公の功多からん。是れ擗里疾・公孫衍、事無きなり、秦の衆盡く之を怨むや深からん。」

● 前々章の「公仲修」一本「公仲明」に作る、然らば彼所にいふと同一人なるんか ● 正解には甘茂を攻むるの事無きをいふと解す。一説には、最早政權を執る事は出来得じ、何となれば秦の衆は大功ある公を嫉みし故を以て、彼等二人を深く怨むべければ也と解す。或は錯簡かともいふ

宜陽の役、楚、秦に畔いて韓に合す。秦王懼る。甘茂曰く、「楚、韓に合すと雖も韓氏の爲めに先づ戦はじ。韓亦戦つて楚の其後のに變するあらんを恐る。韓・楚必らず相御がん。楚、韓に與すと言ふも、怨を秦に餘さじ。臣是を以て其御ぐを知

先戰。韓亦恐。戰而楚有變。其後韓楚必相御也。楚言與韓而不餘。怨於秦。臣是以知其御也。

るなり。

● 先韓となりて韓より先に楚に如き事ありし。● 秦と戦ひて楚がうしるに在りて其約を變じ韓を救はざらん事を恐る。● 互に疑ひて相制御す。● 後々まで秦に怨まれる如き事は爲さざるべし。

宜陽之役。楊達謂公孫顯曰。請爲公以五萬攻西周。得之。是以九鼎。抑甘茂也。不然。秦攻西周。天下惡之。其救韓必疾。則茂事敗矣。秦王謂甘茂曰。楚客來使。者多健。與寡

宜陽の役、楊達、公孫顯に謂つて曰く、「請ふ公の爲めに五萬を以て西周を攻め

ん。之を得ば、是れ九鼎を以て甘茂を抑ふる也。然らざるも、秦、西周を攻めば、

天下之を惡み、其の韓を救ふや必ず疾からん。則ち茂の事敗れん。」

● 秦人 ● 五萬の兵 ● 攻めて勝利を得ば九鼎を得たるの功に依り敵黨たる甘茂を抑へつけ得べし ● 若し又さううまく行かずとも ● 天下の諸侯の周室維持の必要上 ● 火急ならん ● さすれば甘茂の宜陽攻役の事は失敗せん

秦王、甘茂に謂つて曰く、「楚客の來り使用する者健多し。寡人と辭を争ひ、寡人数に窮す。之を爲すと奈何。」甘茂對へて曰く、「王患ふる勿れ。其健なる者來り

人争辭。寡人数窮焉。爲之奈何。甘茂對曰。王勿患也。其健者來使者。則王勿聽。其事。其需弱者來使。則王必聽之。然則需弱者用矣。王因而制之。

使せば、則ち王其の事を聽く勿れ、其の需弱なる者來り使せば、則ち王必ず之れに聽け。然せば則ち需弱なる者用ひられて、健なる者用ひられじ。王因て之れを制せよ。」

● 楚の賓客 ● 強健の辯士 ● 議論し ● 其使者としての要件 ● 懦弱 ● 其懦弱なるにつけ込みて之を制御し以て勝ちを得られよ

甘茂相秦。秦王愛之。公孫衍與之。開有所立。因自謂之曰。寡人且相子。甘茂之吏道而聞之。以告甘茂。甘茂因入見王曰。王得賢相。敢

甘茂秦に相たり。秦王公孫衍を愛し、之と開に立つ所あり。因て自ら之に謂つて曰く、「寡人且に子を相とせんとす」と。甘茂の吏、道して之を聞き、以て甘茂に告ぐ。甘茂因て入つて王に見えて曰く、「王賢相を得たりと。敢て再拜して賀す。」

王曰く、「寡人、國を子に託す。焉くんぞ更に賢相を得ん。」對へて曰く、「王且に犀首を相とせんとす。」王曰く、「子焉くよりか之を聞ける。」曰く、「犀首臣に告ぐ」と。王、犀首の泄せるを怒り、乃ち之を逐ふ。

再拜賀。王曰。寡人託國於子。焉更得賢相。對曰。王且相犀首。王曰。子焉聞之。對曰。犀首告臣。王怒於犀首之泄也。乃逐之。

● 問應の時に共に立談をなしたり ● そこを通り掛りて。一説には「道にして」と訓じ、道路上の噂にと解す ● 魏の官名也。公孫衍は魏の人にて嘗て此官となる、故に一に犀首と號する也

甘茂約秦魏。而攻楚。楚之相。秦者。風蓋。爲楚和於秦。秦啓關而聽楚使。甘茂謂秦王曰。休於楚。而不使魏。秦魏不和。必曰秦魏不和。不說而合於楚。楚魏爲一。國恐傷矣。王不如使魏制和。魏

甘茂、秦、魏を約して楚を攻む。楚の秦に相たる者屈蓋、楚の爲めに秦に和し、秦、關を啓いて楚の使を聽さんとす。甘茂、秦王に謂つて曰く、「楚に休かれて、魏をして和を制せしめずば、楚必ず曰はん、『秦、魏を嚮る』と。説ばずして楚に合せん。楚、魏一と爲らば國恐らく傷はれん。王、魏をして和を制せしめんに如かず。魏、和を制せば必ず説ばん。王、魏に悪しからずんば、則ち寄地必ず多からん。」

● 和議を周旋し ● 引込れて其申込を離き入れんとす ● 「休」に「誅」に作る、秦が楚に欺き誘はれて平和を請ふるに當り ● 其請和の事を取扱はしめざる時は ● 魏はうまく秦に使はれ居る也の意 ● 魏にて之を聞く時に秦を快く思はずして ● 斯くして魏に花を持たせ、王が魏に受けのよき時は ● 魏より秦に寄附する土地

制和必説。王不惡於魏。則寄地必多矣。

謂秦王曰。臣竊惑王之輕齊。易楚而卑韓也。臣聞王兵勝而不驕。霸王約而不忿。勝而不驕。故能服世。約而不忿。故能從鄰。今王廣得魏趙。而輕失齊。驕也。戰勝宜陽。不恤楚交。忿也。驕忿。非霸王之業也。臣竊爲大王慮之。

秦王に謂つて曰く、「臣竊かに王の齊を輕んじ楚を易つて韓を卑畜するを惑ふ。臣聞く『王兵は勝つて驕らず、霸王は約して忿らず』と。勝つて驕らず、故に能く世を服す。約して忿らず、故に能く隣に従ふ。今王、魏・趙を得たるを廣として、齊を失ふを輕んずるは、驕れるなり。戰ひて宜陽に勝ち、楚の交を血へざるは、忿れるなり。驕忿は霸王の業に非ず。臣竊かに大王の爲に之を慮つて取らざるなり。詩に云く、『初あらざるは靡し、克く終ある鮮し』と。故に先王の重んぜし所の者は、唯始と終とのみ。何を以て其然るを知るや。昔、智伯瑤は范・中行を残ひしも、晉陽に圍み通り、卒に三家の笑と爲れり。吳王夫差は越を會稽に棲ましめ、齊に艾陵に勝つて、黃池の遇を爲し、宋に禮無かりしも、遂に句踐の爲めに禽にせられて干隧に死せり。梁君は楚を伐ち齊に勝ち、韓・趙の兵を制し、十二諸

而不取也。詩云。靡不有初。鮮克有終。故先王之所謂重者。唯始與終。何以知其然也。昔智伯瑤也。昔范中行。圍逼晉陽。卒爲三家笑。吳王夫差。樓越於會稽。勝齊於艾陵。爲黃池之遇。無禮於宋。遂爲句踐禽。死於干陲。梁君伐楚。勝齊。制韓趙之兵。驅十二諸侯。以朝天子。

侯を購つて、以て天子に孟津に朝せしも、後に子死し、身は布冠して秦に拘はる。三者功なきに非ず、始を能くして終を能くせざりし也。今王宜陽を破り三川を殘うて、天下の士をして敢て言はざらしめ、天下の國を雍ぎ、兩周の疆を徙して、世主敢て陽侯の塞を窺はず、黃棘を取りて、而も韓・楚の兵敢て進まず。王若し能く此尾をなさば、則ち三王も四とするに足らず、五霸も六とするに足らじ。王若し此尾を爲す能はずして後患あらば、則ち臣は、諸侯の君、河濟の士の、王を以て吳・智の事と爲さん恐る。詩に云く、「百里を行く者は九十に半す」と。此れ末路の難きを言ふ也。今大王皆驕色あり。臣の心を以て之を觀るに、天下の事、世主の心に依る。楚、兵を受くるに非ずんば、必ず秦ならん。何を以て其の然るを知るや。秦人、魏を援けて以て楚を拒ぎ、楚人、韓を援けて以て秦を拒ぐ。四國の兵敵して、未だ復た戰ふ能はず。齊・宋、縲墨の外に在つて、以て權を爲す。故に曰く、先づ齊・宋を得ん者は伐たん。秦先づ齊・宋を得ば則ち韓氏鏖けん。

於孟津。後子死。身布冠而拘於秦。三者非無功也。能始而不終也。今王破三川。而陽殘三川。而使天下之士不敢言。雍天下之國。徙兩周之疆。而世主不敢窺陽侯之塞。取黃棘。而韓楚之兵不敢進。王若能爲此尾。則三王不足。四。五。羅。不足。六。王若不能爲此尾。而有三

韓氏先づ鏖けば、則ち楚は孤となりて兵を受けん。楚先づ之を得ば、則ち魏氏鏖けん。魏氏鏖けば則ち秦は孤となりて兵を受けん。若し此計に隨つて之を行はば、則ち兩國は必ず天下の笑と爲らんと。」

● 成人が ● 卑く見下げて善ふ ● 疑ふ ● 王者の兵 ● 窮乏して ● 隣國に従ひて安に抵抗せず ● 魏趙を味方に附けたるを重大なる事としてほこり ● 韓の地 ● 憂慮せず、心配せず ● 原本「霸王」とあるは誤 ● 終を償しんで之を完する者少なし ● 晉の世卿 ● 范吉射、中行寅、晉の兩卿也 ● 其後、趙氏の居城を圍み大丈夫勝利を得と傳せしに、一旦味方たりし韓氏魏氏が裏切りして却て趙氏に破られ卒に魏趙三家の笑となれり ● 立てこもらせ ● 晉國と相會して覇權を爭ひたるをいふ ● 無體を仕向ける程の勢力なりしが ● 韓王 ● 地名 ● 思ふ通りにする ● 太子申 ● 布にて作りたる喪中用の冠、喪禮を以て自ら居る也 ● 以上に擧げたる三人の者 ● 宜陽、三川共に韓地 ● 列國の交遊を驚き絶つ ● 諸侯、世間の君主 ● 地名、之を取らんとしてねらはず ● 地名 ● 終也 ● 昔の三王（禹・湯・文武）も王を加へて四王といふ程の價値なし、即ち三王も王の並業には比肩し難しと也 ● 齊の桓公・晉の文公・宋の襄公・秦の穆公・楚の莊王も王に比肩し難し ● 黃河濟水の流域、所謂中國也 ● 魏王智伯 ● 九十里行つた其所が恰も全百里の半分に當る ● 世の君主の心次第にてどうにてもなる ● 秦攻めも考まさん ● 秦楚魏韓なり ● 兵力相匹敵して ● 盟約の外に在り、局外中立也 ● 權衡

後患。則臣恐三諸侯之君。河濟之士。以王爲吳智之事也。詩云。行百里者。半於九十。此言末路之難。今大王皆有驕色。以臣之心觀之。天下之事。依世主之心。非楚受兵。必秦也。何以知其然也。秦人授魏以拒楚。楚人授韓以拒秦。四國之兵敵。而未復戰也。齊宋在魏墨之外。以爲懼。故曰。先得齊宋者。伐秦。秦先得齊宋。則韓氏鏖。韓氏鏖。則楚孤而受兵也。楚先得之。則魏氏鏖。魏氏鏖。則秦孤而受兵矣。若隨此計而行之。則兩國者。必爲天下笑矣。

の權にて輕重を定むるもの、意。即ち其二國が味方するか否かによりて、或は秦魏重く、或は楚韓重からんと意
 齊宋を味方に得た方が他の一方を伐たん。原文「伐秦」とある「秦」の字は衍か又は「楚」の誤ならん
 屬が火にとくる如く自然に屈服せん
 孤立無援
 秦の兵
 楚の兵
 秦楚

秦王與二期爭論。不勝。秦王大怒。中期徐行而去。或爲二期說秦王曰。憚人也。中期適遇明君。故也。向者遇桀紂。必殺之矣。秦王因不罪。

秦王、中期と爭論して勝たず。秦王大いに怒り、中期徐行して去る。或ひと中期の爲に秦王に説いて曰く、「憚人なるかな中期、適ま明君に遇ふが故なり。向に桀紂に遇はば必ず之を殺さん」と。秦王因て罪せず。

● 秦の騎士 ● 恐れず敵がす徐々として去る ● たけくしくもどれる人 ● 幸ひ秦王の如き明君に遭ひし故桀紂を免れたる也 ● 若し昔夏の桀王、殷の紂王の如き暴君に遭はば必ず其害の己をいひまかしたる無禮を怒りて誅戮したるならんと也。中期を難しざまにいひ王を譽め以て王をして誅する能はずしむる也

昭襄王 上

甘茂亡秦且之齊。出關遇蘇子。曰。君聞夫江上之處。女乎。蘇子曰。不聞。曰。夫江上之處。女有貧而無燭者。處女相與語。欲去之。家貧無燭者將去矣。謂處女曰。妾以無燭故。當先至。婦室布席。何愛於餘明之照。四壁者。幸以

甘茂秦を亡け、且に齊に之かんとし、關を出で、蘇子に遇ふ。曰く、「君夫の江上の處女を聞けるか。」蘇子曰く、「聞かず。」曰く、「夫の江上の處女、家貧にして燭なき者あり。相與に語り、之を去らんと欲す。家貧にして燭なき者將に去らんとし、處女に謂ひて曰く、「妾、燭なきの故を以て常に先づ至つて室を掃ひ席を布く。何爲れぞ餘明の四壁を照すものを愛むや。幸に以て妾に賜ふとも、何ぞ處女を妨げん。妾自ら以て處女に益ありと爲す。何爲れぞ我を去るや」と。處女相語つて以て然りと爲し、之を留むと。今臣は不肖にして秦に棄逐せられて關を出づ。願はくは足下の爲に室を掃ひ席を布かん。幸に我を逐ふ無かれ。」蘇子曰く、「善し。請ふ公を齊に重くせん」と。乃ち西して秦王に説いて曰く、「甘茂は賢士なり、桓士に非ず。其の秦に居ること累世なり。穀塞谿谷より地形の險易、盡く

賜妾。何妨於處女。妾自以爲有益於處女。何爲去我。處女相語以爲然。而留之。今臣不肖棄逐於秦。而出關。願爲足下掃室布席。幸無逐也。蘇子曰。善。請重公於齊。乃西說秦王曰。甘茂賢人。非恆士也。其居秦累世矣。自散塞谿谷。地形險易。盡知之。彼若以齊約

之を知る。彼れ若し齊を以て韓・魏に約し、反つて以て秦を謀らば、是れ秦の利に非じ。」秦王曰く、「然らば則ち奈何せん。」蘇代曰く、「其贄を重くし、其祿を厚くして、以て之を迎へんに如かず。彼れ來らば、則ち之を槐谷に置き、終身出す勿れ。天下何に従つてか秦を圖らん。」秦王曰く、「善し」と。之に上卿を與へ、相を以て之を齊に迎ふ。甘茂辭して往かず。蘇代僞つて齊王に謂つて曰く、「甘茂は賢人也。今秦之れに上卿を與へ、相を以て之を迎ふるに、茂、王の賜を徳とす、故に往かずして王の臣たらんを願ふ。今王何を以てか之を禮する。王若し留めずんば、必ず王を徳とせじ。彼れ甘茂の賢を以てして、擅に強秦の衆を用ふるを得ば、則ち圖り難からん。」齊王曰く、「善し」と。之に上卿を賜ひ、命じて之を處く。

- 蘇代 ● 江のはとりにある乙女の話聞きたるか。處女は未だ嫁せざる女。相寄り夜分になれば詔々にあかりを附けて糸織ぎの如き手仕事を爲したるならん ● 他の處女が共々に相談して ● 貧にして獨をつけ難き者を排斥し去らんとす ● 他の處女に ● 皆さんより先きに來て室内を掃除し敷物を布きて用意す ● 貴女方に ● 相談して ● 足下より前に齊に行き御待ち受け申して微力に出来るだけの事は致さんとの意 ● 齊

韓魏。反以謀秦。是非秦之利也。秦王曰。然則奈何。蘇代曰。不如重其贄。厚其祿。以迎之。彼來則置之槐谷。終身勿出。天下何從圖秦。秦王曰。善。與之上卿。以相迎之。齊甘茂辭不往。蘇代僞謂齊王曰。甘茂賢人也。今秦與之上卿。以相迎之。茂徳王。賜之。故不往。願爲王臣。今王何以禮之。王若不留。必不徳王。彼以甘茂之賢。得擅用強秦之衆。則雖圖也。齊王曰。善。賜之上卿。命而處之。

をして慶公を重んぜしめん ● 常士。平凡の士 ● 殺山の要塞や谿谷の有様 ● 齊を自由にしその勢力を以て ● 進物。贈物 ● 其僻地より外に出でざる様にすべし ● さすれば天下の諸侯秦を圖るべき手裏なからん ● 甘茂に ● 秦の相臣を使者として ● 「僞」は「偽り」の誤ならん。又は自己の策より出でたる所なるに、わざと知らぬ風を装ひての意か ● 御恩に感じて ● 若し禮遇して之を齊に留めずば ● 甘茂を除く事難かるべし ● 齊國に留め置きたり

獻則謂公孫消曰。公大臣之尊者也。數伐有功。所以不爲相者。太后不善公也。辛戎者。太后之所親也。今

獻則、公孫消に謂つて曰く、「公は大臣の尊者也。數々伐つて功あり。相たらざる所以のものは、太后、公を善せざれば也。辛戎は太后の親しむ所なり。今楚を亡けて東周に在り。公何ぞ秦・楚の重資を以てして、之れを周に相とせざる。楚は必ず之れを便とせん。是れ辛戎、秦・楚の重きあり、太后必ず公を説ばん。公、相たらんこと必せり。」

亡於楚。不在東。周。公。何。不。下。以。秦。楚。之。重。資。而。相。中。之。於。周。上。乎。楚。必。便。之。矣。是。辛。戎。有。秦。楚。之。重。太。后。必。說。公。公。相。必。矣。

● 楚人の策士 ● 秦の大臣 ● 氣に入らず ● 辛戎は富に羊(ヒ)戎に作るべし、楚の王族の姓にて戎は其名 ● 重い後種。重い後援 ● 周との氣脈が相通する故を以て之を便とせん ● 秦と楚との兩強國の重き後援あるに至るを以て

三國攻秦入函谷。秦王謂樓緩曰。三國之兵深矣。寡人欲下割河東。而講對曰。割河東大費也。免於國患大利也。此父兄之任也。王何不召公子池而問焉。王召公子池而問焉。對曰。講亦

三國、秦を攻めて函谷に入る。秦王、樓緩に謂つて曰く、「三國の兵深し。寡人河東を割いて講せんと欲す。」對へて曰く、「河東を割くは大費也、國患を免かるゝは大利なり。此れ父兄の任也。王何ぞ公子池を召して問はざる」と。王、公子池を召して之を問ふ。對へて曰く、「講するも亦悔い、講せざるも亦悔いん。」王曰く、「何ぞや。」對へて曰く、「王、河東を割いて講せば、三國去ると雖も、王必ず曰はん、「惜しいかな。三國且に去らんとす。吾れ特に三城を以て之に従へり」と。此れ講の悔也。王講せずんば、三國函谷に入つて咸陽必ず危ふからん。王又曰はん、「惜しいかな。吾れ三城を愛んで講せざりし」と。此れ又講せざるの悔なり。」王曰

く、「鈞しく吾れ悔いば、寧ろ三城を亡ひて悔ゆとも、咸陽を危くして悔ゆる無けん。寡人講に決す」と。卒に公子池をして、三城を以て三國に講せしむ。三國の兵乃ち退く。

● 樓緩 ● 函谷關 ● 趙の人。秦に仕へて相たり ● 深く入込みたり ● 河東の地を割きて講和せん とす ● 大いなるつひま ● かゝる大事件を決するは公族元老の責任なり ● 與へずに捨て置きても將に去らんとせる所へわざ／＼河東の三箇城を與へたり ● 講和したるにつきての後悔也

悔。不講亦悔。王曰。何也。對曰。王割河東而講。三國雖去。王必曰。惜矣。三國且去。吾特以三城從之。此講之悔也。王不講。三國入函谷。咸陽必危。王又曰。惜矣。吾愛三城而不講。此又不講之悔也。王曰。鈞吾悔也。寧亡三城而悔。無下危咸陽而悔也。寡人決講矣。卒使公子池以三城講於三國。三國之兵乃退。

薛公爲魏謂魏冉曰。文聞秦王欲下以呂禮收齊。以濟天下。君必輕矣。齊秦相聚以臨三晉。禮

薛公魏の爲めに魏冉に謂つて曰く、「文聞く、秦王呂禮を以て齊を收めて、以て天下を濟さんと欲すと。君必ず輕からん。齊・秦相聚まつて以て三晉に臨まば、禮必ず之に并せ相たらん。是れ君齊を收めて、以て呂禮を重くする也。齊天下の兵を免かれば、其の君を歸とするや必ず深からん。君如かず、秦王に勸めて、敝邑

必并相之。是君收齊以重呂禮也。齊免於天下之兵。其難君必深。君不如勸秦王令敵邑卒攻齊之事。齊破。請以所得封君。齊破。晉強。秦王畏。晉之強也。必重君以取晉。齊予晉敵邑。而不能支秦。晉必重君以事秦。是君破齊以爲功。操晉以爲重也。破齊。定封而

をして齊を攻むるの事を卒へしめんには。齊破れば、文請ふ得たる所を以て君を封ぜん。齊破れば晉強し、秦王、晉の強きを畏るゝや、必ず君を重んじて、以て晉を取らん。齊、晉に敵邑を予へて、秦を支ふる能はずんば、晉必ず君を重んじて以て秦に事へん。是れ君、齊を破つて以て功を爲し、晉を操つて以て重きを爲す也。齊を破らば、封を定めて、而も秦・晉皆君を重んぜん。若し齊破れず、呂禮復た用ひられれば、子必ず大いに窮せん。」

● 齊の公子田文。此時魏に相たり ● 蘇公田文の自稱 ● もと齊の相にして當時秦の臣也 ● 齊を援けて味方に引入れ ● 天下統一の業を成す ● 其の如き事が實現せば君の權威は軽くならん ● 相國結して ● 魏魏趙 ● 呂禮 ● 齊秦二國に ● 秦と聯合したる爲め今迄受け居たる天下の兵を免るるに至らば ● 齊にては今まで斯く天下の兵に苦しめられしは君が秦の相として三晉を援けし故なりと思ひ深く君を頼まん ● 秦より齊を援くる事なく、以て魏をして目下進行しつゝ、ある齊攻伐の事を進行せしめよ ● 君に知行所として差上げん ● 魏をいふ ● 魏の心を取りて之と親しまんとすべし ● 正解には「齊晉に城邑を與へて」の誤とし、一説には「影晉と敵(ツカ)れて」の誤にて「邑」の字は衍なりとす ● 亦マツる、操縦する ● 君自身の封邑をしかと定め(前文の得ん所ヲ以て君ヲ封ゼンに照應す)而も其上に ● 魏を助けずして齊を救ひ爲めに齊破れずば

秦晉皆重君。若齊不破。呂禮復用。子必大窮矣。

冷向謂秦王曰。向欲以齊事王。故攻宋也。宋破。晉國危。安邑王之有也。燕趙惡齊秦之合。必割地以交於王。則向之攻宋也。且以恐齊而重王。王何惡向之攻宋乎。向以三王之明。爲先知之。故不言。

冷向、秦王に謂つて曰く、「向、齊を以て王に事へしめんと欲す、故に宋を攻むる也。宋破れば晉國危く、安邑は王の有ならん。燕・趙、齊・秦の合ふを惡まば必ず地を割いて以て王に交はらん。齊必ず王を重んぜん。則ち向の宋を攻むるや、且に以て齊を恐して王を重くせんとす。王何ぞ向の宋を攻むるを惡むや。向、王の明なるを以て、先づ之を知れりと爲す。故に言はざりき。」

● 秦の臣 ● 齊を援けて宋を攻む ● 魏也、宋に隣接する故に危よし ● 魏の領地 ● きび惡く思はざる ● ますれば齊にても秦の懸望を畏れて王を尊重せん ● 英明 ● 申上ぐる迄もなく夙に

謂穰侯曰。爲君慮封。若於除宋罪重。齊怒須。殘伐亂

穰侯に謂つて曰く、君の爲めに封を慮るに、陰に若くは莫し、宋の罪重く、齊の怒深し。亂宋を殘伐し、強齊に徳して、身の封を定む、此れ亦百世の一時な

宋。德強齊。定身封。此亦百世之一時也。已。

謂魏冉曰。楚破秦。不能與齊。齊縣衡矣。秦三世積節於韓魏。而齊之德新加焉。齊秦交爭。韓魏韓魏東聽。則秦伐矣。齊有東國之地方千里。楚包九夷。又方千里。南有符離之

るのみ。」

● 或人が也。正解に曰く「按ズルニ此語再ビ趙策ニ見ユ、彼ハ李兌ト爲シ此ハ權侯ト爲ス、蓋シ一時ノ事也」
● 封邑は何れがよきかと考慮して見るに ● 宋の地。此一句正解によりて改む、即ち原文の「若」は「真若」、「除」は「陰」、「須」は「深」の誤といふ。又坊本「若」を「苦」に作る、之を用ひて原文のまゝに「宋の罪を除き齊の勢を重んずるを苦(ウレ)ふ、須らく」と訓ずるも通ずべきか

魏冉に謂つて曰く、楚破れば、秦、齊と縣衡する能はじ。秦三世、節を韓・魏に積むも、而も齊の徳新たに加はる。齊・秦交、韓・魏を争ふ。韓・魏、東に聽かば則ち秦伐たれん。齊は東國の地、方千里を有つ。楚は九夷を包ねて、又方千里。南に符離の塞あり、北に甘魚の口あり。宋・衛を權縣するに、宋・衛は乃ち阿・甄に當らん耳。利千里を有する者二、富、越隸を擅にす。秦焉くんぞ能く齊と縣衡せん。方城膏腴の地を支分して、以て鄭に薄り、兵休んで復た起らば、以て秦を傷るに足らん。必ずしも齊を待たじ。」

● 或人が秦相魏冉に ● 正解其他概ね「楚、秦を破らば」と解す、梅津定曰く「此時蓋シ齊、楚ヲ伐タント欲

塞。北有甘魚之口。權縣宋衛。宋衛乃當阿甄耳。利有千里者二。富擅越隸。秦烏能與齊縣衡。韓魏支分方城膏腴之地。以薄鄭。兵休復起。足以傷秦。不必待齊。

五國罷成臯。秦王欲爲成陽君求相。韓魏韓魏弗聽。秦太后爲魏冉諫。秦王曰。成陽君以王之故。窮而居於齊。今王見

シ或ヒト楚ノ爲メニ秦ノ援ヲ求メシナラン ● 對比す、勢力の均衡を保つ ● 使節を稱む、即ちよく交際を續く ● 魏魏に也 ● 自分に手懐けて味方にせんと争ふ ● 齊 ● 九種の夷國を包有して。この句の後諸國あるに似たり、一説には「楚は……口あり」の間をそっくり「富多ん耳」の次に移すべしといふ ● 河口の名 ● 貴國が用ひて以て齊を縣がんとする宋衛の二國を稱に掛けて見れば ● 齊の二邑の名 ● 齊と楚とをいふ。一説には、前陳の如く句の位置を改め、而して此語を以て單に楚のみについて云ふと爲す ● 越といふ蠻國 ● 楚が方城地方のよく肥えたる地を割きて以て韓を釣り、因て韓の都なる鄭に兵を進めんと意原本「韓魏」の二字は衍るるべし ● 休めたかと思へばまた起る

城膏腴之地。以薄鄭。兵休復起。足以傷秦。不必待齊。

五國成臯に罷る。秦王、成陽君の爲めに韓・魏に相たるを求めんと欲す。韓・魏聽かず。秦の太后、魏冉の爲めに秦王に謂つて曰く、「成陽君、王の故を以て、窮して齊に居る。今王其達せるを見て之れを收むとも、亦能く其心に翕はんや。」王曰く、「未だし。」太后曰く、「窮して收めずば、達して之に報いん。恐らく王の用を爲さざるべし。且つ成陽君を收むるは韓・魏を失ふの道なり。」

其遠而收之。亦能翕其心乎。王曰。未也。太后曰。窮而不收。遠而報之。恐不爲王用。且收成陽君。失韓魏之道也。

秦取楚漢中。再戰於藍田。大敗楚軍。韓魏閉楚之困。乃南襲至鄧。楚王引歸。後三國謀攻楚。恐秦之救也。或說薛公。可發使告楚。曰。

●齊楚趙韓魏。●特久收於成皇に於て彼弊し引揚げんとする際。●魏丹は太后の弟にて當時秦に相として五國と講和の事を主宰す、太后は成陽君が韓魏に相たらば必ず其事を密せんを恐れ、因て妨害運動を試むる也。●王の爲に。王の御蔭で。●榮達せる。●彼を取つて用ひんとするも。●彼の氣に入る筈なし、彼の心の内には依然王を怨まん。●それほどの事もあり、今にして彼を用ふるもなほおそれしとせじ。●爾時用ひられざりし怨を報いん。●成陽君は。●韓魏は秦まぬ人を秦より押附けに相とせらる、譯ゆゑ必ず感情を害せん、斯くては秦が韓魏の味方を失ふ事になる也。

秦、楚の漢中を取り、再び藍田に戦つて、大いに楚軍を敗る。韓、魏、楚の困しむを聞き、乃ち南襲して鄧に至る。楚王引いて歸る。後三國楚を攻むるを謀り、秦の救はんを恐る。或ひと薛公に説く、「使を發し楚に告げて、「今三國の兵且に楚を去らんとす。楚能く應じて共に秦を攻めば、藍田と雖も豈に得難からん。況や楚の故地に於てをや」と曰ふべし。楚は秦の未だ必らずしも己を救はざらんを疑ふ。而るに今三國の辭に云はゞ、則ち楚の之に應ずる、必らず勸まん。是れ楚、

今三國之兵且去楚。楚能應而共攻秦。雖藍田豈難得哉。況於楚之故地。楚疑於秦之未必救己也。而今三國之辭云。則楚之應之也。必勸。是楚與三國謀。出秦兵矣。秦爲知之。必不救也。三國疾攻楚。楚必走。秦以告急。秦愈不取。出則是我離秦而攻楚也。兵必有功。薛公曰。善。遂發重使之楚。楚之應之果勸。於是三國併力攻楚。楚果告急於秦。秦遂不取。出兵。大勝有功。

薛公入魏而。出齊女。韓春。薛公魏に入つて、齊の女を出す。韓春、秦王に謂つて曰く、「王何ぞ取つて妻とせ

三國と秦の兵を出すを謀るなり。秦爲し之を知らば必らず救はじ。三國疾く楚を攻めば、楚必ず秦に走つて、以て急を告げん。秦愈々敢て出でざるべし。則ち是れ我れ秦を離して楚を攻むる也。兵必ず功あらん。」薛公曰く、「善し」と。遂に重使を發して楚に之をかしむ。楚の之に應ずる果して勸む。是に於て三國力を併せて楚を攻む。楚果して急を秦に告ぐ。秦遂に敢て兵を出さず。大いに勝ちて功あり。

●秦の地。●楚を離す也。●自國の急を救ふ爲めに兵を引いて藍田より歸る。●齊韓魏。●楚を也。●三國と和して之を應援し。●もとの領地。漢中をいふ。●上述の如き申込みをなさんには。●はげみ進みて行はん。●援兵に事寄せて秦兵をまひきよする計策を爲す譯となる。●若也。●離間して。●嚴重なる使者。●三國が也。

謂秦王曰。王何不取爲妻。以齊秦切魏。則上黨秦之有也。齊秦合而立。其母在。秦則魏秦之縣也。已珉欲以齊秦切魏而困薛公。佐欲定其弟。臣請爲王因珉與佐也。魏懼而復之。負芻必以魏殺世事秦。齊女入魏而怨薛公。終以齊奉事王一矣。

謂魏冉曰。和不成。兵必出。白起者。且復將戰。勝必窮。

ざる。齊、秦を以て魏を劫かさば、則ち上黨は秦の有也。齊・秦合して負芻を立てん。負芻立つて、其母秦に在らば、則ち魏は秦の縣たらん。已にして珉は、齊・秦を以て薛公を困しめんと欲し、佐は其弟を定めんと欲す。臣請ふ王の爲めに珉と佐とに因らん。魏懼れて之を復し、負芻必ず魏を以て世を殲るまで秦に事へん。齊の女魏に入らば薛公を怨み、終に齊を以て王に奉事せん。」

● 田文は齊を逐はれて魏に入り相となる、故に齊を惡むの餘り齊より嫁したる魏王の夫人(負芻の母)を逐ひ出せり ● 其出されたる齊の女を ● 魏の王とせん ● 魏はよく秦に奉事し宛然秦の郡縣の如きものとならん ● 負芻既に立つての意。一説には「也已」までを和として「のみ」と訓ず。珉は魏の臣にして薛公と仲絶しき者也 ● 負芻の兄佐は其弟負芻の爲めに王位を安定ならしめんとす ● 逐出したる齊の女 ● 終身

魏冉に謂つて曰く、和成らずんば兵必ず出でん。白起は且復た將に戦はんとす。勝たば必ず公を窮しめん。勝たずんば必ず趙に事へて公に従はん。公又輕し。公

多母きに若かず。則ち疾く到らん。

● 或人。蓋し趙の説客の趙の爲めに楚かに和を爲さんとの考より圖れるならん、魏冉は秦の相也 ● 秦と趙との和 ● 戰勝の威を恃みて也 ● 趙と平和をなして豫てよりの貴公の欲する通りにせん而其平和は之を欲する貴公に因つてならざして却て白起將軍に因りて成る事ゆゑ貴公はやはり輕ぜられん。或は「公を従へん」と訓じ、白起平和の主事となり公を従とせんと解するも可ならんか ● 多くの要領を致さずして趙と和すべし ● さすれば趙は疾く秦に到り和せん即ち公重かまんと也。正解には「多く圖く得くして疾く和するに若かず」の誤とす

公。不勝。必事趙。公。不若。母多。則疾到。陰山之事。趙且與秦伐齊。齊懼。令田章以陽武合於趙。而順子爲質。趙王喜。乃案兵。告於秦。曰。齊以陽武賜弊邑。而納順子。欲以解伐。敢告。下

陰山の事、趙且に秦と齊を伐たんとす。齊懼れ、田章をして陽武を以て趙に合せしめ、而して順子を以て質となす。趙王喜ぶ。乃ち兵を案じて秦に告げて曰く、「齊、陽武を以て弊邑に賜ひ、而して順子を納れて以て伐を解かんと欲す。敢て下吏に告ぐ」と。秦王、公子他をして趙に之き、趙王に謂はしめて曰く、「齊、大國と魏を救うて約に倍けり。信恃す可らず。大國不義として、以て弊邑に告げ、而して之に二社の地を賜うて、以て祭祀に奉ぜしむ。今又兵を案じ且つ齊に合して其地を受けんと欲す。使臣の知る所に非ざる也。請ふ甲四萬を益さん。大國之を裁

東。秦王使三公
子他之趙謂
趙王曰。齊與
大國救魏而
倍約。不可信
恃。大國不義
以告弊邑。而
賜之。二社之
地。以奉祭祀。
今又案兵。且
欲合齊而受
其地。非使臣
之所知也。請
益甲四萬。大
國裁之。蘇代
爲齊獻書穰
侯曰。臣聞往
來者之言曰。
秦且益趙。甲
四萬人。以伐

せよ」と。蘇代、齊の爲めに書を穰侯に獻じて曰く、「臣、往來の者の言を聞くに
曰く、『秦且に趙に甲四萬人を益して以て齊を伐たんとす』と。臣竊かに之を弊邑
の王に必せり。曰く、『秦王明にして計に熟し、穰侯智にして事に習ふ。必ず趙に
甲四萬人を益して、以て齊を伐たじ』と。是れ何ぞや。夫れ三晉の相結ぶは、秦
の深驪なり。三晉百たび秦に背き、百たび秦を欺くも、不信となさず、無行とせ
ず、今齊を破つて以て趙を肥す。趙は秦の深驪なり、秦に利ならず。一也。秦の謀
者は必ず曰はん、『齊を破り晉を弊らし、而して後、晉・楚の勝を制せん』と。夫れ
齊は罷國なり。天下を以て之を撃つは、譬へば猶ほ千鈞の弩を以て潰麤を射るが
ごとし。秦王安くんぞ能く晉・楚を制せんや。二也。秦少しく兵を出さば、則ち
晉・楚信ぜず、多く兵を出さば、則ち晉・楚、秦に制せられん。齊恐れは、則ち秦
に走らすして、且に晉・楚に走らんとす。三也。齊、地を割いて以て晉・楚を實
さば、則ち晉・楚安く、齊、兵を擧げて之が爲めに劍を頓らさば、則ち秦反つて

齊。臣竊必之
弊邑之王曰。
秦王明而熟
於計。穰侯智
而習於事。必
不益趙。甲四
萬人。以伐齊。
是何也。夫三
晉相結。秦之
深驪也。三晉
百背秦。百欺
秦。不爲不信。
不爲無行。今
破齊以肥趙。
趙秦之深驪。
不利於秦。一
也。秦之謀者
必曰。破齊弊
晉。而後制晉
楚之勝。夫齊

兵を受けん。四也。是れ晉・楚、秦を以て齊を破り、齊を以て秦を破る。何ぞ晉・
楚の智にして、而して齊・秦の愚なるや。五也。秦安邑を得、齊と善くして之れを
安んぜば、亦必ず患無けん。秦、安邑を有たば、則ち韓・魏は必ず上黨無からん。
夫れ三晉の腸胃を取ると、兵を出して其の反らざらんを懼るゝとは、孰れか利な
る。故に臣竊かに之を弊邑の王に必して曰へり、『秦王明にして計に熟し、穰侯智
にして事に習ふ。必ず趙に甲四萬を益して、以て齊を伐たじ』と。」

● 穰侯 ● 陽武の地を趙に與へて ● 齊の公族 ● 趙に送りて人質となす ● 秦と聯合すべき兵を止め
て ● 攻伐 ● 此段下役まで御通知申す ● 趙をさす ● 齊の行を不義として ● 祖先の祭祀料とし
て我國へ二社程の地を賜へり。史記索隱によれば二十五家を里とし、里に各々社を立つといふ。要するに二社は僅
少の地二個所也 ● 公子他の自稱。私共の善惡を知る所にあらず、誠に意外千萬の御仕打也 ● 擧兵四萬
を擧さん。齊を討つべしと也 ● 宜しく御裁決あれ ● 秦の相國 ● 我が齊國の王に ● 大丈夫其
權なる事なしと訓合へり ● 物事によく練熟せり ● 韓魏趙 ● 秦の中國に出てんとするを蓋ぐ國々
なればいふ ● 大王は之を不義非道とせず ● 趙は三晉の一なれば也 ● これ余が秦の甲四萬を益し
て齊を伐つ事なしといふ理由の其一 ● 趙をいふ ● 罷弊せる國 ● 一鈞は三十斤。非常に強い石可
● つぶれさうになつて居るべきもの ● 其の權に弱き國と感ひても晉楚は決して弊れず、即ち秦はこの二國

罷國也。以二天
下二擊之。譬猶
以二千鈞之弩一
射中潰癰也。秦
王安能制二晉
楚哉。二也。秦
少出兵。則晉楚
地以實。晉楚二
秦。何晉楚之智
必無二上黨哉。夫取三晉之腸胃。與三出兵而懼二其不反也。孰利。故臣竊必二之弊邑之王曰。秦王明而熟於計。穰侯智而習於事。必不益二趙甲四萬人以伐二齊矣。

秦客卿造謂二
穰侯曰。秦封
君以陶。藉二君
天下數年矣。
攻齊之事成。
陶爲二萬乘。長
小國。率以朝二

に對して勝を制する能はず。晉楚は強兵たる秦の軍の勢に制せられて意中不平ならん。聯合軍の強きを恐れば。赴きて降を請はずして。其爲めに朝のによりやぶるまで持久戦をなさば。頓は鈍に通ず。其兵を受くる事は肝心の管轄よりも却て秦ならん。魏の地也、魏を打ちて之を取る。仲善くして其取りたる安邑を安んぜば。上黨の地を保持し得られずして秦に取られん。安邑上黨は三晉に取りて甚だ大事なる地なればいふ。其軍全滅して隣國せざらん。請合ひて。

秦の客卿造、穰侯に謂つて曰く、「秦、君を封するに陶を以てし、君に天下を藉すこと數年なり。齊を攻むるの事成らば、陶は萬乗と爲り、小國に長たらん。率ること數年なり。齊を攻むるの事成らば、陶は萬乗と爲り、小國に長たらん。率るて以て天子に朝せば天下必ず聽かん、五霸の事也。齊を攻めて成らずんば、陶は鄰恤を爲して、之に據る無けん。故に曰く、齊を攻むるの陶に於けるや、存亡の

天子。天下必
聽。五霸之事
也。攻齊不成。
陶爲二鄰恤。而
莫二之據也。故
攻齊之於陶
也。存亡之機
也。君欲成之。
何不使人謂二
燕相國。曰。聖
人不能爲時。
時至而弗失。
舜雖賢。不遇
堯也。不遇爲
天子。湯武雖
賢。不當桀紂。
不王。故以二舜
湯武之賢。不
遭時。不得二帝
王。今攻齊。此

機也。君之を成さんと欲せば、何ぞ人をして燕の相國に謂つて曰はしめざる、
「聖人も時を爲す能はず、時至れば失はざるのみ。舜、賢と雖も、堯に遇はずんば天子たるを得ず、湯・武賢と雖も、桀・紂に當らずんば王たらじ。故に舜・湯・武の賢を以てするも、時に遭はずんば帝王たるを得ず。今齊を攻むるは、此れ君の大時なるのみ。天下の力に因て讐國の齊を伐ち、惠王の恥を報い、昭王の功を成し、萬世の害を除く、此れ燕の長利にして、君の大名也。書に云く、徳を樹つるは滋きに如くは莫く、害を除くは盡すに如くは莫しと。吳、越を亡ぼさず、越故に吳を亡ぼす。齊、燕を亡ぼさず、燕故に齊を亡ぼす。齊の燕に亡ぼされ、吳の越に亡ぼさるゝ、此れ疾を除きて盡さざれば也。此時を以て、君の功を成し、君の害を除くに非ずんば、秦卒かに他の事ありて齊に従はん。齊・秦合はば、其の君を讐とするや必ず深からん。君を讐とするを挾さみて、以て燕を誅めば、後に之を悔ゆと雖も得可らざらんのみ。君、燕の兵を悉くして疾く之を攻めば、天下の君

君之大時也。已。因天下之力。伐二國之恥。成昭王之功。除萬世之害。此燕之長利。而君之大名也。書云。樹德莫如滋。除害莫如盡。吳不亡。越。越故亡。吳。齊不亡。燕。燕故亡。齊。齊亡。於燕。吳亡。於越。此除疾不盡也。非下

に從はんこと、父子の仇を報するが若くならん。誠に能く齊を亡ぼさば、君を河南に封じて萬乗となし、途を中國に達せしめん。南、陶と鄰りて世々患無からん。願はくは君の志を齊を攻むるに専らにして、他の慮無からんことを」と。

● 官名。他國より來りて卿たる者 ● 地名 ● 天下を制する權を借し與ふる事數年 ● 大國 ● 其小國を率ゐて ● 君の命令を聽かん ● これ古への五霸にも相當する事也 ● 隣國の齊より攻め苦しめらる、恤(ウレヒ)を生じて ● 君は陶に據りて其地を保つ能はじ ● 聖人も自己の力にて時を作る事は出來ず、只時を失はざるのみ ● 殷の湯王周の武王 ● 燕の先代惠王が齊に破られたる恥 ● 燕の昭王が樂毅をして齊を伐たしめ齊の七十餘城を降したる其功を今日完成せよ。この七十餘城が惠王の時齊に取返されたる也 ● 此句書經秦誓には「爾德薄而、除惡務本」に作る ● 吳王夫差趙を伐ち中途にて和議を結びし故に後に句踐の擒となる ● 燕の亂に齊之を伐ちて功を卒へず、故に樂毅齊を伐ちて其七十餘城を拔く事あり ● 害を除きて之を根だやしせざりし故也 ● 今日只今 ● 燕の相國をさしていふ也 ● 舜に同じ。何かの事情で急に齊に從ふやうにならんも知られず ● 齊の ● 燕の罪を責めば ● 大國 ● 中國の諸侯と使者を往來せしめて對等の交際を爲し

疾不盡也。非下以此時也。成君之功。除中君之害。秦卒。有他事而從齊。齊趙合。其讎君必深矣。挾君之讎。以誅於燕。後雖悔之。不可得也。已。君悉燕兵。疾攻之。天下之從君也。若報父子之仇。誠能亡齊。封君於河南。爲萬乘。途於中國。南與陶爲鄰。世世無患。願君之專志於攻齊。而無

他慮也。

頃襄王二十年。秦白起拔楚西陵。或拔鄢郢夷陵。燒先王之墓。王從東北。保于陳城。楚遂削弱。爲秦所輕。於是白起又將兵來伐。楚人有黃歇者。游學博聞。襄王以爲辨。故使於秦。說昭王曰。天下莫強於秦。楚今聞大王欲伐

頃襄王二十年、秦の白起、楚の西陵を抜き、或は鄢郢夷陵を抜き、先王の墓を焼く。王、東北に徙て、陳城を保つ。楚遂に削弱せられ、秦の爲めに輕んぜらる。是に於て白起又兵に將として來り伐つ。楚人に黃歇なる者あり、游學して博聞なり。襄王以て辨と爲す。故に秦に使ひせしむ。昭王に説いて曰く、「天下秦・楚より強きは莫し、今聞く大王楚を伐たんと欲すと。此れ猶ほ兩虎相闘つて、驚犬其敵を受くるがごとし。楚を善くするに如かず。臣請ふ其説を言はん。臣之を聞く、『物至りて反るは、冬夏是れ也。致至りて危ふきは、累基是れ也』と。今大國の地、天下に半して、二垂を有つ。此れ生民より以來、萬乗の地、未だ嘗て有らざる也。先帝文王・武王・王の身三世にして、地を齊に接して以て從親の要を絶つを忘れざりき。今王、成橋をして事を韓に守らしむ。成橋地を以て秦に入る。

楚。此猶兩虎相鬪。而罵犬受其敵。不如其說。臣請言之。物至而反。冬夏是也。致至而危。累基是也。今大國之地。半天下。有二垂。此從生民以來。萬乘之地。未嘗有二也。先帝文王也。先王之王。三世而不接。地於齊以絕。從親之要。今王使成橋守事於韓。成橋

是れ王甲を用ひず、威を伸べずして、百里の地を出ださしむ。王、能と謂つ可し。王又甲兵を擧げて魏を攻め、大梁の門を杜き、河内を擧げ、燕酸・棗盧・桃人を抜き、楚・燕の兵、雲翔して敢て校せず。王の功や亦多し。王、甲を休め衆を息ふる二年、然る後之を復し、又蒲衍・首垣を取つて、以て仁平丘に臨めば、小黃・濟陽、城に嬰かりて魏氏服せり。王又濮・磨の北を割いて、之を燕に屬し、齊・秦の要を斷ち、楚・魏の脊を絶つ、天下五合六聚して、敢て救はず。王の威亦憚からる。王若し能く功を持し威を守り、攻伐の心を省きて、仁義の誠を肥し、復た後患無からしめば、三王も四とするに足らず、五霸も六とするに足らず。王若し人徒の衆きを負み、甲兵の強きを恃んで、魏氏を毀るの威に乗じて、力を以て天下の主を臣とせんと欲せば、臣、後患あらんを恐る。詩に云く、「初あらざるは鮮し、克く終あること鮮し」と。易に曰く、「狐其尾を濡す」と。此れ始の易く終の難きを言ふ也。何を以て其の然るを知るや。智氏趙を伐つる利を見て、榆次の禍を知らず。

以北入燕。是王不用甲不伸威。而出百里之地。王可謂能矣。王又舉甲兵而攻魏。杜大梁之門。舉河內。拔燕酸。棗盧。桃人。楚燕之兵。雲翔而不取。校王之功亦多矣。王休甲息衆二年。然後復之。又取蒲衍。首垣。以臨仁平丘。小黃。濟陽。嬰城。而魏氏服矣。王又割濮磨

吳、齊を伐つる便を見て、干隧の敗を知らず。此の二國は大功なきにあらず。利に前に没して、患を後に易れば也。吳の越を信するや、從へて齊を伐ち、既に齊人に艾陵に勝ちて、還つて越王の爲めに三江の浦に禽にせらる。智氏は韓・魏を信じ、從へて趙を伐つて、晉陽の城を攻め、勝つこと日ありしに、韓・魏之に反して智伯瑤を擊臺の上に殺せり。今王、楚の毀れざるを妬んで、楚を毀るの、魏を強うするなるを忘る。臣大王の爲めに、慮つて取らざる也。詩に云く、「大武は遠宅に涉らず」と。此に從て之を觀れば、楚國は援也、隣國は敵也。詩に云く、「他人心あり、予之を忖度す。躍躍たる兔兎、犬に遇ひて之に獲らる」と。

● 楚王横の諺「頃襄王……臣之を聞く」の問は楚宏の後語によりて補ふ所、舊本には此文なくして「物至れば」の上に「説楚王曰」の文字あり ● 春申君也 ● 離離の土也 ● あいぼれたる犬が兩虎の鬪りしてたる所に附込みて之を制するが如し ● 其どんぐめ迄行けば又もとに復る、其例は冬至の日の最短に至れば反つて又夏至の日の最長に向ふに至る是也 ● 兩點に達すれば危ふきは、基石を累ねて其の極に至れば必ず崩るゝが如し ● 西北二方の邊塞の地を保つ ● 天が人類を生じてより此かた ● 貴國程の大國は其例なし ● 先代の

之北。屬之燕。斷齊秦之要。絕楚魏之脊。天下五合六聚而不救也。王之威亦憚矣。王若能持功守威。省攻伐之心。而肥仁義之誠。使無復後患。三王不足四。五霸不足六也。王若負人徒之衆。恃甲兵之強。壹下毀魏氏之威。而欲以力臣天下之主。臣恐有後患。詩云。

韓魏の二國を破つて直ちに地を齊に接し、以て合縱の組合を爲す所の大切なる土地を絶ち切るを念とせり。正解により史記の文に従つて「不接」の間に「忘」の一字を加へ「不忘接」となして譯したり。要は腰也、韓魏は中央の地に於て之を人體に比すれば腰の如し。又要は約也と解するも通ずべし。一説原文のまゝにて「地を齊に接して以て從親の要を絶たず」と訓じ、中間に韓魏を隔つるが故に齊は地を齊に接して以て山東從親の約を絶つ能はずと解す。○ 齊人成蹕をして韓魏の政事に關與せしむ。○ 韓王に説きて其地を齊に入れしむ。原文「北」は「地」「秦」の誤。○ 甲兵即ち軍隊。○ 魏の都。○ 取あげ。○ 皆魏の地。○ 魏に出したる援兵。○ 齊の同類するが如く齊兵を恐れ避けて敢て敵對せず。校は抗也。○ 再び兵を起し。○ 共に魏の地名。或は蒲・衍・首垣の三個の地とす。○ 魏の地名、仁・平丘といふ二つの地名とする説あり。○ 二つの地名。此地の人は城内に立て籠りて敢て刃向はず魏遂に降服せり。○ 澠水・磨城。○ 開君長の説に「秦」は「韓」の誤とす。要は腰也。つまり齊韓楚魏の要地を絶ちて各國の聯絡を切りたる也。○ 幾度もく相集まりて如何にせん」と相談するのみにて。○ 天下の諸侯に畏れ慚られたり。○ 史記には「地」に作り、高誘の國策註には「地は猶ほ道のごとし」といふ、國策亦古く「地」に作りしならんか。「肥し」は厚うしの意。○ 何ぞ三王五霸と加へて四と爲し六と爲すに足らんの意。前にも出づ。○ 原文「壹」の字史記新序によりて「衆」に改め詩すと加へて天下各國の主。諸侯。○ 誰しも最初はよく物事を慎みなせども終りになると多くは意り油断して失敗す。○ 周易未濟象辭に「小狐汔濟(ホトンドワタル)濡其尾」とあり、小狐の大川を渉るに、殆ど濟りをはらんとする間際になりて其尾を濡し終に濟る能はずと也。○ 智伯瑤。○ 其身檢次の地にて趙襄子に殺さるゝの禍あらんとは心付かざりき。○ 利便。○ 夫差が越に敗られて死にし處。○ 前の方の利にのみ没頭して

靡不有初。鮮克有終。易曰。狐濡其尾。此言二始之易。終之難也。何以知其然也。智氏見伐趙之利。而不知二輪次之禍也。吳見伐齊之便。而不知二干隧之敗也。此二國者。非無大功也。沒利於前。而易患於後也。吳之信越也。從而伐齊。既勝。齊人於艾陵。還爲越王。食於三江之浦。智氏信韓魏。從而伐趙。攻晉陽之城。勝有日矣。韓魏反之。殺智伯瑤於壑臺之上。今王拓楚之不毀也。而忘楚之強魏也。臣爲大王慮。而不取。詩云。大武遠宅不涉。從此觀之。楚國援也。鄰國敵也。詩云。他人有心。予忖之。躍躍毚兔。遇犬獲之。

後にある禍患に油断したる結果斯く失敗に終りし也。○ 越王を従へて共に齊を伐ち。○ 地名。○ 國に還りて。○ 智伯瑤。○ いつゝは勝つて晉陽の落城と其日取まできまりしに。○ 檢次にあり、晉陽を水攻めにする時渠を壅ちて汾水を瀧ぐ爲めに掘り上げた土を積んで作りたる臺也。○ 逸詩也。威武の大なる者は遠地に涉りて人を攻めず、必ず近敵の伐つべき者あり、以て還く楚を攻むべからざるに喩ふる也。一説に「武」を足跡の義とし、大なる足跡のものにても遠方の場處には涉り至ること能はずと解す。結局遠交近攻の意ならん。○ 遠方の楚國は相侵さざる故に秦の援國也。○ おしはかりである。此詩小雅巧言の章に出づ。○ 躍々。○ 跳走の貌、毚は狡也。兔は善く走れども時に犬に遇へば犬よく之を得、人心知り難きも或は之を忖度すべしとの喩、つまり韓魏の心算は如何に巧みに取りつくるひてもお分りになる筈といふ意ならん。

今王、中道にして韓・魏の王に善きを信ず。此れ正に吳の越を信ぜし也。臣聞く、「敵は易る可らず、時は失ふ可らず」と。臣、韓・魏の辭を卑うし患を慮つて、實

敵不可易。時不可失。臣恐韓魏之卑辭。慮患而實欺。大國也。此何也。王既無重世之德。於韓魏。而有累世之怨。焉。夫韓魏父子兄弟。接踵而死。於秦者百世矣。本國殘。社稷壞。宗廟墮。刳腹折頤。首身分離。暴骨草澤。頭顱僵仆。相望於境。父子老弱。保處相隨。於路。鬼

は大國を欺かんを恐る。王既に韓・魏に重世の徳なくして、累世の怨あり。夫れ韓・魏の父子兄弟、踵を接して秦に死する者百世なり。本國殘はれ、社稷壞たれ、宗廟墮られ、腹を刳き頤を折き、首身分離して、骨を草澤に暴し、頭顱僵仆して、境に相望み、父子老弱保處せられて路に相隨ひ、鬼神狐祥して食む所なく、百姓生を聊んぜず、族類離散し、流亡して臣妾となり、海内に満てり。韓・魏の亡びざるは、秦の社稷の憂也。今王の楚を攻むる亦失せずや。且つ王、楚を攻むるの日は、則ち悪くにか兵を出さん。王將に路を仇讐の韓・魏に藉らんとするか。兵出づるの日は、王其の反らざるを憂へん。是れ王、兵を以て仇讐の韓・魏に資するなり。王若し路を仇讐の韓・魏に藉らざるば、必ず隨陽の右壤を攻めん。此れ皆廣川大水山林谿谷、不食の地なり。王之を有すと雖も、地を得たりと爲さず。是れ王、楚を毀るの名あつて、地を得るの實なき也。且つ王、楚を攻むるの日は、四國必ず悉く起ちて王に應ぜん。秦・楚の兵構へて離れざるや、魏氏將に兵を出

神狐祥無所食。百姓不聊生。族類離散。流亡爲臣妾。滿海內矣。韓魏之不亡。秦社稷之憂也。今王之攻楚。不亦失乎。且王攻楚之日。則惡出兵。王將藉路於仇讐之韓魏乎。兵出之日。而王憂其不反也。是王以兵資於仇讐之韓魏。王若不藉路於仇讐之韓魏。必攻

して、留・方與・鉅・胡陵・碭・蕭・相を攻めんとす。故の宋必ず盡きん。齊人南面せば、泗北必ず擧げられん。此れ皆平原四達膏腴の地也。而るに王、之をして獨り攻めしむ。王、楚を破りて、以て韓・魏を中國に肥して齊を勁うせば、韓・魏の強き、以て秦に校するに足らん、而して齊は、南、泗を以て境と爲し、東、海を負ひ、北、河に倚つて後患なからん。天下の國、齊より強きは莫し。齊・魏、地を得、利を葆つて、詳はりて下吏に事へば、一年の後帝たらん。若し未だ能はざるも、以て王の帝たるを禁するに於て餘あらん。夫れ王の壤土の博き、人徒の衆き、兵革の強きを以てして、一たび衆を擧げて、地を楚に注ぎ、令を韓・魏に誦し、帝の重きを齊に歸す。是れ王の失計也。臣、王の爲めに慮るに、楚に善くするに若くは莫し。秦・楚合して一と爲り、以て韓に臨まば、韓必ず首を授けん。王、襟するに山東の險を以てし、帶するに河曲の利を以てせば、韓必ず關中の侯たらん。是の若くにして、王、十萬を以て鄭を虜らば、梁氏寒心し、許・鄆陵、城に嬰かり、

隨陽右壤。此皆廣川大水。山林谿谷。不食之地。王雖有之。不爲得地。是王有毀楚之名。無得地之實也。且王攻楚之日。四國必悉起。應王。秦楚之構而不離。魏氏將三出。兵而攻。留方與登。胡陵。陽。蕭。相。故宋必壽。齊人南面。泗水必舉。此皆平原。四達。膏腴之地也。而王

上蔡・召陵 是往來せざるべし。此の如くならば、魏も亦關内の侯たらん。王一たび楚に善くして、關内二萬乗の主あり、地を齊に注がば、齊の右壤は手を拱して取る可し。是れ王の地、一に兩海に經つて、天下を要絶する也。是れ燕・趙は齊・楚なく、齊・楚は燕・趙なき也。然して後、燕・趙を危動し、齊・楚を持せば、此の四國は痛を待たずして服せん。」

● 信じたると同じ事にて後に必ず悔ゆるあらん ● 秦をいふ ● 代々恩惠を施したる事なく ● 相ついで ● 秦と戦ひ死せる事百代も續けり ● 國都をいふ ● おとがひを折る、惨死責傷をいふ ● されかうべはたふれよし ● 國境に引きつゞいてある ● 捕虜となりざるべしとつながら護送されて行く ● 祖先や戰死者の靈を祭るべき子孫たえて、情り過りて祭祀を受くるまじし。狐祥は史記には孤傷に作る、徘徊して倚る所なき義也 ● 逃げさすらひて ● いつ何時復讐せんもはかりがたき故に也 ● 計を失す、誤りたる計策也 ● 韓魏之を復讐の好讐として秦兵を要撃し之を皆殺しとするの要あらん ● 韓魏に與へて復讐せしむる也 ● 臨は水の名、陽は水の北、境は地也 ● 産物なき不毛の地 ● 齊趙韓魏 ● 味方せん ● お互に兵を構へ結んで解けず之に國力を傾注する時 ● もとの宋國が領有せし地は必ず盡く魏に占領せられん ● 南に向ひて楚を攻め、泗水附近の地は舉げて齊の有とならん ● 交通至便地味肥えたる地 ● これら魏齊の國々をして ● 抗也。對抗して勢を復するに足る ● 泗水 ● さればと補ひ見よ ● 保に同じ

使二之獨攻。王破楚以肥韓魏於中國。而勁齊。韓魏之強。足以校於秦。一矣。而齊南以泗爲境。東負海。北倚河。而無後患。天下之國。莫強於齊。齊魏得地葆利。而詳事下吏。一年之後。爲帝。若未。能。於。以。禁。王之爲。帝。有餘。夫以王壤土之博。人徒之衆。兵革之強。一舉衆而注地於楚。誥令韓魏。歸帝重於齊。是王失計也。臣爲王慮。莫若善楚。秦楚合而爲一。以臨韓。韓必授首。王襟以三山東之險。帶以二河曲之利。韓必爲關中之候。若是。王以二十萬戍鄭。梁氏寒心。許鄆陵嬰城。上蔡召陵。不往來也。如此而魏亦關内侯矣。王善楚。而關内二萬乘之主。注地於齊。齊之

● 伴也、弱さうに見せ掛けて王の下役人に事へ以て秦に油断させば ● 天下の帝王 ● 兵を起して。 ● 史記新序には「事」に作る ● 秦の地を楚に接續せんとして。正解は史記によりて「注地」を「樹怨」に作るべしといふ、即ち「怨みの種を楚に蒔きて敵を作る」の謂也 ● 自ら韓魏を強うし、其命令に屈從するに至り。謂は屈也 ● 皇帝といふ重き位を齊に贈る ● 服從して敵對せざるをいふ。史記には「手を敵(マサ)む」に作り、新序には「手を拱(コマヌ)く」に作る ● 前方を閉ぢ塞ぐ所の要害 ● 固きめがらすに黄河を以てす。黄河は一曲千里故に河曲といふ ● 「候」史記により「候」とす、秦が山東河曲を襟帶とすれば韓の地は其中に在りて關中即ち秦の地内の侯となりて臣事すべし。秦は四方に關ありて其中に在る故に關中といふ ● 韓の國都 ● 梁は魏の都なる故に魏を梁氏といふ。魏は心腹を塞くして恐れ ● 城に瀕りて守り ● 此兩地は氣脈を絶たれて孤立とならん ● 意味は關中の侯に同じ、蓋し關内侯は秦の爵名也 ● 關内侯として韓魏の兩主を有し、以て領土を齊に接續せば ● 手をこまぬき何の勞苦もせずして ● 西海より東海に亘つて所有し。兩海は兩方の邊境荒涼の地をいふ。經は直也 ● 要は腰也。天下の地を中斷して相救助し得がらしむ ● 齊楚といふ強國なくの義 ● 危險といふ事を以ておどし動かす ● 執持して離畔するを得がらしむ ● 攻伐して之を痛むる迄もなく

使二之獨攻。王破楚以肥韓魏於中國。而勁齊。韓魏之強。足以校於秦。一矣。而齊南以泗爲境。東負海。北倚河。而無後患。天下之國。莫強於齊。齊魏得地葆利。而詳事下吏。一年之後。爲帝。若未。能。於。以。禁。王之爲。帝。有餘。夫以王壤土之博。人徒之衆。兵革之強。一舉衆而注地於楚。誥令韓魏。歸帝重於齊。是王失計也。臣爲王慮。莫若善楚。秦楚合而爲一。以臨韓。韓必授首。王襟以三山東之險。帶以二河曲之利。韓必爲關中之候。若是。王以二十萬戍鄭。梁氏寒心。許鄆陵嬰城。上蔡召陵。不往來也。如此而魏亦關内侯矣。王善楚。而關内二萬乘之主。注地於齊。齊之

右壤。可_レ拱_レ手而取_レ也。是王之地。一經_二兩海_一。要_二絕天下_一也。是燕趙無_二齊楚_一。齊楚無_二燕趙_一也。然彼危_二勳燕趙_一。持_二齊楚_一。此四國者。不_レ待_レ痛而服矣。

段産謂_二新城君_一曰。夫宵行者。能無_レ爲_レ奸。而不_レ能_レ令_二狗無_レ吠_一已。今臣處_二邯鄲_一中。能無_レ議_二君於王_一。而不能_レ令_二人母_一。願_二臣於君_一。願君察_レ之也。

段産、新城君に謂つて曰く、「夫れ宵行_{（一）}く者は能く奸_{（二）}を爲す無きも、狗をして己_{（三）}に吠ゆる無からしむる能はず。今臣は邯鄲_{（四）}中に處り、能く君を王に議する無きも、人をして臣を君に議する母らしむる能はず。願はくは君之を察せよ。」

- 乘人 ● 秦王の外舅といふ ● 奸惡を爲す無き者にて、既に其難を受くべき夜分にある事ゆゑ ● 王に近侍する役也 ● 貴君の事を王に向ひて彼れ此れと論議する事は無けれど ● 人が私_{（一）}の事を疑ひて彼れ此れと貴君に申すをば止める譯には行かず

段干越人謂_二新城君_一曰。王良之弟子。駕_二取_レ千里馬_一。遇_二造父之弟_一。造父之弟

段干越人、新城君に謂つて曰く、「王良の弟子、駕_{（一）}して云ふ『千里を取るの馬』と。造父の弟子に遇ふ。造父の弟子曰く、『馬千里ならじ』と。王良の弟子曰く、『馬は千里の馬なり。服は千里の服なり。而るに千里を取る能はずとは何ぞや』と。曰く、『子の纒牽長し』と。故より纒牽の事に於ける萬分の一也。而も千里の行を難し

とす。今臣は不肖なりと雖も、秦に於て亦萬分の一也。而るに相國の臣を見る、塞_{（一）}ぐ者を釋かず。是れ纒牽長き也。」

- 段干は姓、越人は名、魏人にして當時秦に在りし者といふ ● 趙國子の御者 ● 或馬を馬車に附け試みていふ ● 「取_{（一）}路」の義。走るをいふ ● 亦有名なる御者、齊王の御者といひ、又列子によりて周穆王の御となして時代合はずと爲す。要するに著名の人物を借りての寓言のみ ● 此馬は千里を行く事能はじ ● 馬の御し方は千里を走りする使ひ方也 ● 造父の弟子曰く ● 子の馬を御する手綱が長すぎる。纒牽は手綱也 ● 馬を使ふ仕事の上にては ● 萬分の一にたる用はあり ● 臣と貴君との間を塞ぐ者を解かず其まゝにおかる、これ微事なれども大局に於て事に密あらん

子曰。馬不_二千里_一。王良弟子曰。馬千里之馬也。服千里之服也。而不_レ能_レ取_二千里_一。何也。曰。子纒牽長。故纒牽於_レ事。萬分之一也。而難_二千里_一之行。今臣雖_二不肖_一於_レ秦。亦萬分之一也。而相國見_レ臣。不_レ釋_二塞者_一。是纒牽長也。

卷第三下

秦下

昭襄王下

范子因王稽入秦。獻書昭王曰。臣聞明主莅正。有功者不得賞。有能者不得官。勞大者其祿厚。功多者其爵尊。能治衆者其官大。故不能者

范子、王稽に因て秦に入り、書を昭王に獻じて曰く、「臣聞く明主の正に莅むや、功ある者は賞せざるを得ず、能ある者は官せざるを得ず、勞大なる者は其祿厚く、功多き者は其爵尊く、能く衆を治むる者は其官大なりと。故に不能の者は敢て其職に當らず、能ある者は亦蔽隠するを得ず。臣の言を以て可と爲さしめば、則ち行うて益其道を利せよ。若し將に行はざらんとせば、則ち久しく臣を留むること爲すなき也。語に曰く、「人主は愛する所を賞して惡む所を罰す。明主は則ち然らず、賞は必ず有功に加へ、刑は必ず有罪に斷す。今臣の胸は以て權實に當る

不敢當其職焉。能者亦不得蔽隱。使下以臣之言爲可。則行而益利。其道若將弗行。則久留臣。無爲也。語曰。人主賞所愛而罰所惡。明主則不然。賞必加於有功。刑必斷於有罪。今臣之胸。不足以當權實。要不足以待斧鉞。豈敢以疑事待試於王乎。雖以臣爲賤而輕

に足らず、要は以て斧鉞を待つに足らず。豈に敢て疑事を以て王に嘗試みんや。臣を以て賤しと爲して、臣を輕辱すと雖も、獨り臣を任ずる者は、後に、前に反覆する無き者なるを重んぜざるか。臣聞く、周に砥厄あり、宋に結緑あり、梁に懸黎あり、楚に和璞あり。此の四寶は工の失せし所、而も天下の名器と爲る。然らば則ち聖主の棄つる所の者、獨り以て國家を厚くするに足らざらんや。臣聞く、善く家を厚くする者は之を國に取り、善く國を厚くする者は、之を諸侯に取る。天下に明主あれば則ち諸侯擅に厚くするを得ず。是れ何故ぞや。其の榮を凋るが爲め也。良醫は病人の死生を知り、聖主は成敗の事に明かなり。利なれば則ち之を行ひ、害なれば則ち之を捨て、疑はしければ則ち少しく之を嘗む。堯・舜・禹・湯復た生ると雖も、改むる能はざる已。語の至れる者は、臣敢て之を書に載せず。其の淺き者は、又聽くに足らず。意ふに臣愚にして王の心に闔はざるか。亡其臣を言ふ者、將に賤しうして聽くに足らずとするか。是の若くなるに非ずんば、則

尊臣。獨不重。任臣者。後無三反。覆於前者上耶。臣聞周有二砥厄。宋有二結綠。梁有二懸黎。楚有二和璞。此四寶者。工之所失也。而爲天下名器。然則聖主之所棄者。獨不足三以厚國家乎。臣聞善厚家者。取之於國。善厚國者。取之於諸侯。天下有明主。則諸侯不得擅厚矣。是何故

ち臣の志願はくは少しく游觀の閒を賜へ。足下に望見して之を入れんと。書上つる。秦王之を説ぶ。因て王積に謝して人をして車を持して之を召さしむ。

● 范雎也、史記范雎傳參照 ● 棄の人、當時唯魏に因む、王の魏に使者を因りたりて秦に入りし也 ● 政也、君位に即き居るをいふ ● 官に用ふ ● 才能をまはひかくして跡を晦まし用ひられぬやうにする ● 之を實行して益こ臣の體抱せる道を都合よく實現せしめよ ● 何の役にも立たぬ事也 ● 史記「廉主」に作る ● 裁斷して之を加ふ ● 樞實も亦斧鉞也、共に罪人を斬戮する具也。要は腰也。至微至賤國家の刑罰を受くるにも足らぬ程の身也といふ意ならん ● 嘗試の二字にて「コ、ロミル」と訓ず。試みに申上げて見るといふ如き譯にあらず、確たる所見ありて申上ぐる也 ● 棄の王が也 ● 保証して王に推薦したる者即ち王積は後になりて王の前記前言をかへし推薦の實を全うせざるが如き事を爲す者にあらざる點を重し給はざるか ● 以下四つ皆美玉の名也。「砥厄」は史記に從つて「砥礪」に作るべし ● 史記「良工」に作る、從ふべし。「失」は鑿定を誤りしをいふ ● 魏に棄てられし自分の如きものにてもの意を含めていふ也。故國の爲め特に良工を主といふ也 ● 利する。益する ● 自家を厚く益する大夫は。大夫に家と稱し、諸侯に國と稱す ● 用ふべき人材を自分の仕へてゐる國の内より抜き取る ● 明主が諸侯の國より人材を抜き取り以て其國の榮を潤ませやぶれば也 ● 至極大切な語。機密に涉る話 ● 遺傳な話 ● 亡乃の如し、棄るの意 ● 臣の事を王に申上げたる王積が賤しき身柄にて應き入れ給ふ程の人物にあらずとして臣を信じ給はざるか ● 游觀のひまを削いで下され ● 王の足下(アシモト)を仰ぎ望んで愚見を御座に入れ申さん ● 人材を推薦したる事を謝して

也。爲其測榮也。良醫知病人之死生。聖主明於成敗之事。利則行之。害則舍之。疑則少嘗之。雖堯舜禹湯復生。弗能改已。語之至者。臣不敢載之於書。其淺者。又不足聽也。意者臣恐而不闕於王心耶。亡其言臣者。將賤而不不足聽耶。非若是也。則臣之志願。少賜游觀之閒。望見足下。而入之。書上。秦王說之。因謝王積。使人持車召之。

范雎至。秦王庭迎。謂范雎曰。寡人宜以身受命久矣。會義渠之事。急寡人日自請太后。今義渠之事已。寡人乃得以身受命。躬竊聞然不敏。敬執賓主之禮。范雎辭讓。是日見范雎。見者無不變色。易

范雎至る。秦王、庭に迎へて范雎に謂つて曰く、「寡人宜しく身を以て命を受くきや久し。義渠の事急なるに會し、寡人日に自ら太后に請ふ。今義渠の事已む。寡人乃ち身を以て命を受けん。躬ら竊かに不敏なるに闕然たり。敬んで賓主の禮を執らん」と。范雎辭讓す。是の日范雎の見ゆるを見る者、色を變じ容を易へざる者なし。秦王、左右を屏く。宮中虚しくして人なし。秦王跪いて請うて曰く、「先生何を以て幸ひに寡人に教ふる。」范雎曰く、「唯唯。」閒ありて、秦王復た請ふ。范雎曰く、「唯唯」と。是の若くすると三たびなり。秦王聽いて曰く、「先生幸ひに寡人を教へざるか。」范雎謝して曰く、「敢て然るに非ざる也。臣聞く、始時呂尙の文王に遇ふや、身漁父と爲つて、涓陽の濱に釣せしのみ。是の若きものは交り

容者秦王屏
左右宮中虛
無人秦王處
而請曰先生
何以幸教寡
人范雎曰唯
唯請范雎曰
唯唯若者是
三秦王曰
先生不幸教
寡人乎范雎
謝曰非敢然
也臣聞始時
呂尚之遇文
王也身為漁
父而釣於渭
陽之濱耳若
是者交疏也
已說而立為

疏なる也。已に一説して、立て、太師となし、載せて與に俱に歸れるものは、其言
深ければ也。故に文王果して功を呂尚に收め、卒に天下を擅にして、身立つて帝
王と爲れり。即し文王をして、呂望を疏んじて與に深く言はざらしめば、是れ周
は天子の徳なくして、文・武は與に其王を成す無かりしならん。今臣は羈旅の臣也。
交王に疏し。而して陳せんと願ふ所の者は、皆君臣の事を匡し、人の骨肉の間
に處す。以て臣の陋忠を陳するを願へども、未だ王の心を知らず。王の三たび問
うて對へざる所以のものは、是れ也。臣畏るゝ所ありて敢て言はざるに非ず。今
日之を前に言つて、明日誅に後に伏するを知るも、然かも臣敢て畏れざる也。大
王信に臣の言を行はゞ、死も以て臣が患と爲すに足らず、亡も以て臣が憂と爲す
に足らず、身に漆して厲と爲り、髪を被りて狂と爲るも、以て臣が恥とするに足
らず。五帝の聖なるも死し、三王の仁なるも死し、五霸の賢なるも死し、烏獲の
力なるも死し、奔育の勇なるも死す。死は人の必ず免がれざる所なり。必然の勢

太師。載與俱
歸者。其言深
也。故文王果
收功於呂尚。
卒擅天下。而
身立爲帝王。
即使文王疏
呂望。而弗與
深言。是則無
天子之徳。而
文武無與成
其王也。今臣
羈旅之臣也。
交疏於王。而
所願陳者。皆
匡君臣之事。
處人骨肉之
間。願以陳臣
之陋忠。而未
知王心也。所

に處し、以て少しく秦に補ある可くんば、此れ臣の大いに願ふ所なり。臣何を
か患へんや。伍子胥は豪載して昭關を出で、夜行いて晝伏し、葭水に至る、以て
其口を餌する無し。坐行蒲服して、食を吳の市に乞ひ、卒に吳國を興して、闔閭
覇となる。臣をして謀を進むること伍子胥の如くなるを得しめば、之に加ふる
に幽囚を以てし、終身復た見えずとも、是れ臣の説の行はるゝ也、臣何ぞ憂へん。
箕子・接輿は身に漆して厲となり、髪を被りて狂となりしも、殷・楚に益なし。
臣をして行を箕子・接輿に同じうし、以て賢とする所の主を補ふ可きを得しめば、
是れ臣の大榮也、臣又何ぞ恥ぢんや。臣の恐るゝ所は、獨り、臣死するの後、天
下、臣の忠を盡して身懸れたるを見、是を以て口を杜き足を裏んで、肯て秦に即
く莫きを恐るゝのみ。足下は、上、太后の嚴を畏れ、下、奸臣の態に惑ひ、深宮の
中に居て、保傅の手を離れず、終身闇惑、與に奸を照す無く、大にしては宗廟滅
覆し、小にしては身以て孤危す、此れ臣の恐るゝ所のみ。夫の窮辱の事、死亡の

以王三問而
不_レ對者。是也。
臣非_三有_レ所_レ畏
而不_二敢言_一也。
知_レ今日言_二之
於前_一而明日
伏_中誅於後。然
臣弗_二敢_レ畏_一也。
大王信行_二臣
之言_一。死不足_三
以爲_二臣_一。亡
不足_三以爲_二臣_一。
愛_レ漆_レ身而爲_レ
賊。被_レ髮而爲_レ
狂。不足_三以爲_二
臣_一。五帝之
聖而_レ死。三王
之仁而_レ死。五
霸之賢而_レ死。
烏復_レ之力而

患の若きは、臣敢て畏れざる也。臣死して秦治まらば、生くるに賢らん。」

● 堂を下りて庭に出迎ふ ● 早速自ら教を請ふべき領なりしも ● 西戎の義渠國の事件。義渠の事は前にも見ゆ、是より先、秦取りて以て縣と爲し其君を臣とす、是に於て義渠戎王秦の太后と私通し二子を生む、太后詐りて戎王を甘泉に殺し遂に兵を起して義渠を滅す ● 自ら太后の指圖を仰ぎて多忙を極めたり ● 自ら自己の不肖を憐む ● 國寶として待遇せんとす ● 王の范雎を遇するの厚きを見て驚き恐れたるならん ● はい、と答ふるのみ ● 昔時 ● 太公望 ● 渭水の北の岸 ● 國君と漁夫となれば平生の親あるにあらず交り疎き者也 ● 一たび説く。一説に「説」は「悦」に同じ ● 自分の事に頼せ同業して ● 呂尚の言ふ所遠近の説に非ざりし故也。但下文と相對して考ふれば「其言ふこと深かりし也」と訓じ、共に深くいひかはしたる處に解するを可とすべきか ● 呂尚から十分の成功を收めて。即ち十分に呂尚を任用してそれによつて成功して ● 若に同じ ● 文王武王 ● 王業 ● 君臣間の過りを匡正す ● 他人の親しき間柄の事に立入りて事を爲す。下文にある太后、權侯を指す也 ● 君の御前に ● 身を滅亡するも ● 癩病也。うるしにかぶれて癩病の如くなるをいふ ● 髪をふりみだして ● 古への大力士 ● 奔は一に「貫」に作る、孟賁、夏育といふ古の二人の大勇士 ● 死をいふ ● 少しでも棄れたるに ● 魏にて罪を得て脱る、時、身を愛中に入れ、包みの如く見せ掛けて車上に載せ楚の昭關といふ關所を出づ ● 川の名 ● 加河也。はらばよ ● 吳王 ● 伍子胥の困苦に加ふるに ● 芈子は殷の王族、接輿は楚の隱君子 ● 歌し進まざ ● 向ひ至る ● こびへつらひて人を惑はす態度 ● 女の御守役や御附き ● 臣下中にも共に相談役となりて奸惡の者を見分くる人物なし ● 孤立となりて危ふし。

死。奔育之勇而死。死者。人之所_二必_一不_レ免。處_二必_一然_レ之_レ勢。可_レ以_レ少_レ有_レ補_レ於_レ秦。此_レ臣_二之所_一大_レ願_一也。臣何患乎。伍子胥棄_レ載_レ而出_二昭_一關。夜行而晝伏。至於_レ澠水。無_レ以_レ餌_レ其_レ口。坐行蒲服。乞_レ食於_レ吳市。卒_レ與_レ吳國_一。闔_レ閭_レ爲_レ霸。使_レ臣_二得_レ進_一。謀_レ如_レ伍子胥_一。加之_レ以_レ幽_レ囚。終_レ身_二不_レ復_一見_レ。是_レ臣_二說_レ之_レ行_一也。臣何愛乎。箕子接_レ輿_レ漆_レ身而爲_レ厲。被_レ髮而爲_レ狂。無_レ益_レ於_レ殷。楚_レ使_レ臣_二得_レ同_一行_レ於_レ箕子_一。接_レ輿_レ可以_レ補_レ所_レ賢_レ之_レ主_一。是_レ臣_二又_レ何_レ恥_一乎。臣之所_レ恐_レ者。獨_レ恐_レ臣_二死_レ之後_一。天下_レ見_レ臣_二盡_レ忠_一而_レ身_二斃_一也。是以_レ杜_レ口_レ塞_レ足_レ。莫_レ肯_レ即_レ秦_一耳。足_レ下_レ上_レ畏_レ太后_一之_レ嚴。下_レ惑_レ奸_レ臣_二之_レ態_一。居_レ深_レ宮_レ之中。不_レ離_レ保_レ傅_レ之_レ手。終_レ身_二闔_一。惑_レ無_レ與_レ照_レ奸_一。大_レ者_レ宗_レ廟_レ滅_レ覆_レ。小_レ者_レ身_二以_レ孤_一危_レ。此_レ臣_二之所_レ恐_一耳。若_レ夫_レ窮_レ辱_レ之_レ事。死_レ亡_レ之_レ患。臣_二弗_レ敢_レ畏_一也。臣_二死_レ而_レ秦_一治_レ。賢_レ於_レ生_一也。

秦王跪曰。先生是何言也。夫秦國僻遠。寡人愚不肖。先生乃幸至。此。此天以_二寡人_一。先生。而存_二先王_一之_レ廟。也。寡人得_レ受_レ命於_レ先生。此

秦王跪いて曰く、「先生是れ何の言ぞや。夫れ秦國僻遠、寡人愚不肖なり。先生乃ち幸ひに此に至る。此れ天寡人を以て先生を慰して、先王の廟を存する也。寡人命を先生に受くるを得るは、此れ天先王に幸して、其孤を棄てざる所以なり。願はくは先生悉く以て寡人に教へよ。寡人を疑ふ無かれ」と。范雎再拜す。秦王亦再拜す。范雎曰く、「大王の國、北に甘泉・谷口あり、南に涇・渭を帯び、隴・

天所下以幸二先
生。而不要二其
孤也。先生奈
何而若此。
事無大小。上
及太后。下至
大臣。願先生
悉以教寡人。
無疑寡人。一也。
范雎再拜。秦
王亦再拜。范
雎曰。大王之
國。北有甘泉
谷口。南帶涇
渭。右隴蜀。左
關阪。戰車千
乘。奮擊百萬。
以秦卒之勇。
車騎之多。以
當諸侯。譬若

蜀を右にし、關・阪を左にす。戰車千乘、奮擊百萬あり。秦卒の勇、車騎の多きを以て、以て諸侯に當る、譬へば韓・魏を馳せて蹇兔を逐ふが若し。霸王の業致す可し。今反つて關を閉ぢて、敢て兵を山東に窺はせざる者は、是れ穰侯國の爲めに謀ると不忠にして、大王の計失する所あればなり。」王曰く、「願はくは計を失ひし所を聞かん。」唯曰く、「大王、韓・魏を越えて強齊を攻むるは、計に非ざるなり。少しく師を出さば、則ち以て齊を傷ふに足らず、之を多くすれば、則ち秦に害あり。臣意ふに、王の計は、少しく師を出して、韓・魏の兵を悉さんと欲す、則ち不義なり。今ま與國の親しむ可らざるを見つゝ、人の國を越えて攻むる、可ならんや。計に疏なり。昔は齊人楚を伐ち、戰勝つて、軍を破り將を殺し、再び千里を辟く。膚寸の地も得る無きものは、豈齊、地を欲せざりしならんや。形有する能はざりし也。諸侯、齊の罷露し、君臣の親しまざるを見、兵を舉げて之を伐つ。主辱しめられ、軍破れて、天下の笑となれり。然る所以のものは、其の楚を

馳韓・魏二面逐蹇兔也。霸王之業可致。今反閉關。而不三敢窺兵於山東者。是穰侯爲國謀不忠。而大王之計。有所失也。王曰。願聞所失。計。唯曰。大王越韓。魏二面攻。強齊。非計也。少出師。則不。足以傷齊。多。之。則害於秦。臣意王之計。欲少出師。而悉韓・魏之兵。則不義矣。今

伐つて韓・魏を肥せしを以て也。此れ所謂賊に兵を藉し、盜に食を齎すもの也。王遠交して近攻せんに如かず。寸を得れば則ち王の寸なり、尺を得れば亦王の尺なり。今此を捨て、遠く攻む、亦謬ならずや。且つ昔は中山の地、方五百里、趙獨り之を擅にす。功成り名立ちて、利附し、天下能く害する莫かりき。今韓・魏は中國の處にして、天下の樞なり。王若し霸たらんと欲せば、必ず中國にして、以て天下の樞たるに親しんで、以て楚・趙を威せ。趙強くば則ち楚附かん、楚強くば則ち趙附かん。楚・趙附かば、則ち齊必ず懼れん。懼れば必ず辭を卑うし幣を重くし、以て秦に事へん。齊附かば韓・魏虚しうす可きなり。」王曰く、「寡人魏に親しまんと欲すれども、魏は變多きの國也。寡人親しむ能はず。請ひ問ふ、魏に親しむには奈何せん。」范雎曰く、「辭を卑うし幣を重くして、以て之に事ふるは不可なり、地を削りて之に賂ふは不可なり、兵を舉げて之を伐て」と。是に於て兵を舉げて邢丘を攻む。邢丘抜けて、魏附かんことを請ふ。曰く、「秦・韓の地形、

見_二與國之不_レ可_レ親。越_二人之_レ國_一而攻。可乎。疏_二於計_一矣。昔者齊人伐_レ楚。戰勝破_レ軍殺_レ將。再辟_二千里_一。膚寸之地無_レ得者。豈齊不_レ欲_レ地哉。形弗能_レ有也。諸侯見_二齊之罷露_一。君臣之不_レ親。舉_レ兵而伐_レ之。主辱軍破。爲_二天下笑_一。所以然_一者。以其伐_レ楚而肥_二韓魏_一也。此所謂藉_二賊兵_一而濟_二盜

相錯はること縹の如し。秦に韓あるは、木の蠹あり、人の心腹を病むが若し。天下變あらば、秦の害を爲す者は、韓より大なるは莫けん。王、韓を收むるに如かず。王曰く、「寡人韓を收めんと欲するも、韓聽かすんば、之れを爲す奈何。」范雎曰く、「兵を舉げて策陽を攻めば、則ち成臯の路通ぜず、北太行の道を斬らば、則ち上黨の兵下らじ。一舉して策陽を攻めば、則ち其國斷えて三とならん。韓必ず亡ぶべきを見れば、焉くんぞ聽かざるを得ん。韓聽かば、霸事成る可きなり。」王曰く、「善し。」

- 先生に御苦勞を掛けて
- 原文「先生」を史記によりて改譯す
- 其後續者たる孤兒同様のたより無き自分
- 涇水渭水を過らし
- 函谷關と關阪。又商坂に作るべしともいふ。要するに二個の要害の地名也
- 壘つて敵を撃つ強兵
- 有名なる駿犬
- びつこのうさぎ
- 軍隊
- 悉く出兵せしめん
- 身勝手に不義理也
- 同盟國即ち韓魏
- 其親しむべからざる他人の國
- 土地を開拓する事千里
- 然るに實際は膚寸の地(手を側め立てる程のごく僅かの地)をも得ざりしは
- 實際の形勢上餘り餘絶の地ゆゑ保有する能はざりし故に取らざりし也
- 蠹は蠹也。疲弊をいふ
- 齊の王
- 齊が
- 古語也。兵は兵也、獨らずは送り届ける意、わざ／＼骨を折つて自分の妨害者に強みを付ける意
- さすれば一寸の地を

食_一者也。王不_レ如_二遠交而近_一攻。得_レ寸則王_レ之寸。得_レ尺亦_レ王_レ尺也。今舍_レ此而遠攻。不_レ亦_レ繆_二乎_一。且昔者中山之地。方五百里。趙獨擅_レ之。功成名立利附焉。天下莫_レ能害_レ。今韓魏。中國之處。而天下之樞也。王若欲_レ霸_二中國_一而以爲_二天下樞_一。以威_二楚趙_一。趙強則楚附。楚強則趙附。楚趙附。則齊必懼。懼必卑。辭重幣。幣以事_レ秦。齊附而韓魏可_レ虛也。王曰。寡人欲_レ親_レ魏。魏多_レ變之國也。寡人不能_レ親。請問_レ親_レ魏奈何。范雎曰。卑_レ辭重_レ幣以事_レ之。不可_レ削_レ地而賂_レ之。不可_レ舉_レ兵而伐_レ之。於是舉_レ兵而攻_レ邢丘。邢丘拔_レ而魏請_レ附。曰。秦韓之地形。相錯如_レ縹。秦之有_レ韓。若_レ木之有_レ蠹。人之病_レ心腹。天下有_レ變。爲_レ秦害_レ者。莫_レ大_レ於_レ韓。王不_レ如_レ收_レ韓。王曰。寡人欲_レ收_レ韓。韓不_レ聽。爲_レ之奈何。范雎曰。舉_レ兵而攻_レ策陽。則成臯之路不通。北斬_二太行_一之道。則上黨之兵不_レ下。一舉而攻_レ策陽。則其國斷而爲_レ三。韓見_二必亡_一。焉得_レ不_レ聽。韓聽而霸事可_レ成也。王曰善。

他國より得れば 國の名。趙は其隣國也、近攻の利を例證していふ也 中國に居りて 樞要の地 魏魏をいふ 秦に也 其國を滅して、都也都邑を丘墟と爲さしむべきをいふ 詐りて變り易き 魏の地名 范雎又昭王を説いて曰く ぬいとり 木の心を食ふ害蟲 むね、はら 味方に取り込む 韓の地名 往來出來ずして孤立せん 斷ち切る 高地より下り来る事能はず 斷ち切れて三つとなり互に相援助すべからず 覇者となりて天下の諸侯を従はする事

范雎曰く、「臣、山東に居りしとき、齊の田單有るを聞いて、其の王有るを聞かず、秦の太后・穰侯・涇陽・華陽・高陵有るを聞いて、其の王有るを聞かざりき。夫

其有王。聞秦之有太后穰侯涇陽華陽高陵。不聞其有王。夫擅國之謂王。能專利害之謂王。制殺生之威之謂王。今太后擅行不顧。穰侯出使不報。涇陽華陽擊斷無諱。高陵進退不請。四貴備而國不危者。未之有也。爲此四者下。乃所謂無王已。然則權焉得不傾。

れ國を擅にするを王と謂ひ、能く利害を専らにするを王と謂ひ、殺生の威を制するを王と謂ふ。今太后、擅行して顧みず、穰侯、使を出して報ぜず、涇陽、華陽、擊斷して諱むこと無く、高陵、進退して請はず。四貴備はつて國危ふからざる者、未だ之あらざる也。此の四者の下となる、乃ち所謂王無き已。然らば則ち權焉くんぞ傾かざるを得ん。令焉くんぞ王より出づるを得ん。臣聞く、善く國を爲むる者は、内其威を固くし、外其權を重くすと。穰侯の使者、王の重きを操り、諸侯を決裂し、符を天下に剖き、敵を征し國を伐つ。敢て聽かざる莫く、戰ひて勝ち攻めて取れば、則ち利は陶國に歸し、諸侯を弊御せん。戰ひ敗るれば、則ち怨百姓に結んで禍社稷に歸せん。詩に曰く、「木實繁き者は其枝を披き、其枝を披く者は其心を傷る。其都を大にする者は其の國を危うし、其臣を尊む者は其主を卑しむ」と。淳齒は齊の權を管し、閔王の筋を縮いて、之を廟梁に懸け、宿昔にして死せり。李兌は趙に用ひられて、食を主父に減じ、百日にして餓死せ

而令焉得從王出乎。臣聞善爲國者。內固其威。而外重其權。穰侯使者。操王之重。決裂諸侯。剖符於天下。征敵伐國。莫敢不聽。戰勝攻取。則利歸於陶國。弊御於諸侯。戰敗則怨結於百姓。而禍歸社稷。詩曰。木實繁者。披其枝。披其枝者。傷其心。大其都者。危其國。尊

り。今秦は太后・穰侯事を用ひ、高陵・涇陽・華陽之を佐く。卒に秦王無し。此れ亦淳齒・李兌の類也。臣今王の獨り廟梁に立つを見る。且つ臣將に後世の秦國を有たん者は、王の子孫に非ざらんを恐る」と。秦王懼る。是に於て乃ち太后を廢し、穰侯を逐ひ、高陵・涇陽・華陽を關外に出す。昭王、范雎に謂つて曰く、「昔は齊公、管仲を得、時に以て仲父とせり。今吾れ子を得、亦以て父と爲さん。」

- 權勢家 ● 涇陽君は太后の弟羊茂、華陽君、高陽君は皆太后の寵子 ● 我々勝手をして一向權はす ● 王に申上りてして擅に使を外に遣す ● 妄り勝手に人を處刑す ● 王は何はして擅に人を過温す ● 斯る四人の貴き者 ● 今王は ● 秦國には ● 王權 ● 内に向つては國家の威力を堅固にし、外に對しては國家の權力を重くする ● 表面上秦王の重き威光をあやつり ● 分裂させて合従の約を破る ● 符を各國諸侯に分ち秦王の號令に託して各國の兵を徵す ● 諸侯が也 ● 穰は侯の私邑なり ● 弊は敵に通ず、斷也。御は制也。戰勝の餘威にて天下の諸侯を制御するをいふ ● 秦の百姓の怨は固く結びて解けず ● 亂は悉く秦の國家に歸す ● 詩經に見えず「豎」又は「語」の訛なり ● 折也。木の實の重みにて枝を折る ● 都は諸侯の子弟が封ぜられたる邑、國は其本國即ち諸侯の國也 ● 楚の將 ● 蔣が齊を伐ちし時、楚は淳齒を將として齊を救はしめ因て閔王の相として齊の政權を專にせしめたり ● 筋は身の筋也。韞は權に通ず、抽也 ● 一夜 ● 一説「趙を用ひて」と訓じ、趙の政事を自由にしての義とす ● 趙の武靈

其臣一者。卑其主。淖齒管齊之權。縮閔王之筋。懸之廟梁。宿昔而死。李兌用趙。滅食主父。百日而餓死。今秦太后穰侯用事。高陵涇陽。華陽佐之。卒無秦王。此亦淖齒李兌之類也。臣今見王獨立於廟朝矣。且臣將恐後世之有秦國者。非中王之孫也。秦王懼。於是乃廢太后。逐穰侯。出高陵涇陽。華陽於關外。昭王謂范雎曰。昔者齊公得管仲。時以爲仲父。今吾得子。亦以爲父。

王、位を子庶文王に譲り自ら主父といふ
 朝廷の中に孤立す
 函谷關外
 齊の桓公
 其當時
 尊敬して父に比したる也

應侯謂昭王曰。亦聞恆思有神叢與。恆思有悍少年。請與叢博。曰。吾勝叢。叢藉我神。三日。不勝叢。叢困我。乃左手爲叢投。右手自爲投。勝叢。叢藉二

應侯、昭王に謂つて曰く、「亦恆思に神叢あるを聞けるか。恆思に悍少年あり。叢と與に博するを請うて曰く、『吾れ叢に勝たば、叢我に神を藉すと三日なれ。叢に勝たずんば、叢我を困しめよ』と。乃ち左手叢の爲めに投じ、右手自ら爲めに投ず。叢に勝つ。叢其神を藉すること三日。叢往いて之を求む。遂に歸さず。五日にして叢枯れ、七日にして叢亡びぬ。今ま國は王の叢なり、勢は王の神なり。人に藉すに此を以てせば、危ふきこと無きを得んや。臣未だ嘗て、指の臂より大に、臂の股より大なるを聞かず。若し此れ有らば、則ち病必ず甚しからん。百人瓢を

其神三日。叢往求之。逐弗歸。五日而叢枯。七日而叢亡。今國者。王之叢。勢者。王之神。藉人以此。得無危乎。臣未嘗聞指大於臂。臂大於股。若有此。則病必甚矣。百人與瓢而趨。不如一人持而走疾。百人誠與瓢。瓢心裂。今秦國。華陽用之。穰侯用之。太后用之。王亦用

與ひて趨るは、一人持して走るの疾きに如かず。百人誠に瓢を興はゞ、瓢必ず裂けん。今秦國は、華陽之を用ひ、穰侯之を用ひ、太后之を用ひ、王亦之を用ふ。瓢の器たるに稱はずば則ち已む、已に瓢に器たるに稱はゞ、國必ず裂けん。臣之を聞く、木實繁き者は、枝必ず披け、枝の披くる者は其心を傷る。都の大なる者は、其國を危ふうし、臣の強き者は其の主を危うすと。且つ今邑中、斗食より以上、尉・内史及び王の左右に至るまで、相國の人に非ざる者有るか。國事無ければ則ち已む、國事あらば、臣必ず王の獨り庭に立つを見ん。臣竊かに王の爲めに恐る、恐らくは萬世の後、國を有つ者は王の子孫に非ざらん。臣聞く、古の善く政を爲す者は、其の威内に扶け、其權外に布いて、而して治政亂れず逆はず、使者道を直くして行ひ、敢て非を爲さざりきと。今太后の使者、諸侯を分裂して、符天下に布き、大國の勢を操りて、強兵を徴し、諸侯を伐ち、戰ひて勝ち攻めて取れば、利は盡く陶に歸し、之の幣帛竭く太后の家に入り、境内の利は華陽に

分移す。古の所謂主を危くし、國を滅ぼすの道、必ず此より起らん。三貴國を竭くして以て自ら安んず。然れば則ち令何ぞ王より出づるを得ん、權何ぞ分る、母きを得ん。是れ王果して三分の一に處る也。」

● 范雎也、昭王范雎を封じて應侯と爲す ● 地名神農は嶺南の森の樹 ● 悍暴なる少年 ● 博奕、すこなくの類 ● 神農即ち神祕不可思議の力を貸す ● 穀子(サイ)を也 ● 根據地といふ意の喩 ● 生命とすといふ意の喩 ● 若しと訓ずるも可ならん ● 原文「心」に作る、今鮑註によりて改譯す。あちこち引張られて裂けん ● 秦が國の器用となると同じき機物の物ならずば別に議論はなし。稱は適也、それに相當する意 ● 郡邑の中にて ● 諸侯百解に滿たず日に計れば一斗二升の穀を食む、激謙の者をいふ ● 郡守を佐り、兼ねて武備甲兵を司る官 ● 京師を治むるを掌る官 ● 權侯 ● 朝廷に孤立す ● 其威力を内に向つて扶持す ● 原文「輔」に作るは誤也、權力は外に弘布す ● 命を奉じて事を用ふる者。或は命を奉じて外國に使ひする者と見るも可ならん ● 權侯を曰ふ。正解に於て前節に出でたるに從ひ「權侯の使者」に作るといへり ● 前節に出づると同義也 ● 其に同じ ● 秦の國境内の利益は華陽君に分ち移して與ふ ● 太后、權侯、華陽 ● 秦國を、太后用ひ、權侯華陽用ひ、王亦用ひて、つまり各三分の一の處に居る制也也。

之。不稱。已稱。器則已。已稱。爲。必裂矣。臣聞之。木實繁者。枝必披。枝之披者。傷其心。都大者危。其國。臣強者危。其主。且今邑中。自斗。食以上。至尉內史。及王左右。有非。相國之人。一者上乎。國無事。則已。國有事。臣必見王。獨立於庭也。臣竊爲王恐。恐萬世之後。有國者。非王子孫也。臣聞古之善爲政者。其威內扶。其輔外布。而治

政不亂不遊。使者直道而行。不致爲非。今太后使者。分製諸侯。而符布天下。操大國之勢。微強兵。伐諸侯。戰勝攻取。利盡歸於陶國。之幣帛竭入太后之家。境內之利。分移華陽。古之所謂危主。滅國之道。必從此起。三貴竭國以自安。然則令何得從王出。權何得母分。是王果處三分之一也。

秦昭王謂左右曰。今日韓魏孰與始強。對曰。弗如也。王曰。今之如耳魏齊孰與孟嘗芒卯之賢。對曰。弗如也。王曰。以孟嘗芒卯之賢。帥強韓魏之兵。以伐秦。猶無下寡人何上。也。今以無能

秦の昭王、左右に謂つて曰く、「今日の韓・魏は、始の強きに孰れぞや。」對へて曰く、「如かず。」王曰く、「今の如耳・魏齊は、孟嘗・芒卯の賢に孰れぞ。」對へて曰く、「如かず。」王曰く、「孟嘗・芒卯の賢を以て、強き韓・魏の兵を帥る、以て秦を伐ちしも、猶ほ寡人を奈何ともする無かりき。今無能の如耳・魏齊を以て、弱き韓・魏を帥る、以て秦を攻むるも、其の寡人を奈何ともする無きや亦明けし。」左右皆曰く、「甚だ然り」と。中期、琴を推し對へて曰く、「王の天下を料ること過てり。昔六晉の時、智氏最も強うして、范・中行を滅破し、又韓・魏を帥るて、以て趙襄子を晉陽に圍み、晉水を決して、以て晉陽に灌ぐ。沈まざる者三板のみ。智伯出で、水を行る。韓康子御たり、魏桓子驂乘たり。智伯曰く、「始め吾れ水の人の

之如耳。魏齊帥弱韓魏以攻秦。其無奈寡人何。亦明矣。左右皆曰。甚然。中期推琴對曰。王之料天下過矣。昔者六晉之時。智氏最強。滅破范中行。又帥韓魏以圍趙襄子於晉陽。決晉水以灌晉陽。城不沈者三板耳。智伯出行。水。韓康子御。魏桓子驂乘。智伯曰。始吾

國を亡ぼす可きを知らざりき。乃ち今之を知れり。汾水は以て安邑に灌ぐに利あり、絳水は以て平陽に灌ぐに利あり」と。魏桓子、韓康子を肘し、康子、魏桓子を履んで其踵を躡み、肘足車上に接して、智氏分たれ、身死し國亡びて、天下の笑と爲れり。今秦の強きは智伯に過ぐる能はず、韓・魏弱しと雖も、尚ほ其の晉陽の下に在りしに賢る。此れ乃ち方に其の肘足を用ふるの時也。願はくは王の易る勿らんことを。」

● 近侍の臣 ● 以前の強かりし時と今日とどちらが強きか ● 今日以前の強きに及ばず ● 韓の相 ● 魏の相 ● 晋を出でて魏に相たりし孟嘗君 ● 魏の將 ● 秦の臣 ● 推し遣りて ● 晉の六卿、智氏、范氏、中行氏、韓氏、魏氏、趙氏各々晉國を分割す、故に六晉といふ ● 趙氏の居城 ● 堤防を切りて ● 一板を一丈とも八尺とも二尺ともいふ、故に二尺説によるべからん。即ち城は今少しして沈む程になりたりと也 ● 巡視す。一本、按ずるに作る ● 趙の主人たる韓康子が智伯の御者たり、魏の主人たる魏桓子が附乘たり ● 魏桓子の邑 ● 韓の邑也 ● 肘にて突きて其言に注意せしむ ● 足を踏んでわざと其かゝとをふみつけ注意を促がす ● 斯く車上に肘と足と相接して注意しあひたるが動機となりて。蓋し兵車は將中央にあり、御は左、陪乘は右に居る、故に二人ひそかに斯く相警むるを得る也 ● 韓魏裏切りして智氏の領土を離れ趙三家に分割される ● 智伯に従ひて晉陽城下に至りし時にはまさる

不知水之可亡人之國也。乃今知之。汾水利以灌安邑。絳水利以灌平陽。魏桓子肘韓康子。康子履魏桓子。其踵。肘足接於車上。而智氏分矣。身死國亡。爲天下笑。今秦之強。不能過智伯。韓魏雖弱。尙賢其在晉陽之下也。此乃方其用肘足時也。願王之勿易也。

秦宣太后愛魏醜夫。太后病將死。出令曰。爲我葬。必以魏子爲殉。魏子患之。庸芮爲魏子說太后曰。以死死者爲有知乎。太后曰。無知也。曰。若太后之神靈。明知死者之無知矣。何爲空以生所愛。葬於

秦の宣太后、魏醜夫を愛す。太后病んで將に死せんとし、令を出して曰く、「我が葬を爲すに、必ず魏子を以て殉と爲せ」と。魏子之を患ふ。庸芮、魏子の爲めに太后に説いて曰く、「死者を以て知る有りとするか。」太后曰く、「知る無し。」曰く、「若し太后の神靈、明かに死者の知る無きを知らば、何爲れぞ空しく、生きて愛する所を以て、知る無きの死人に葬むらん。若し死者知る有らば、先王怒を積むの日久し。太后過を救うて贖らす。何の暇ありてか乃ち魏醜夫を私せん。」太后曰く、「善し」と。乃ち止む。

● 淫亂にして私愛せる也 ● 殉死者 ● 秦の臣 ● 御生存中に寵愛し給へる魏醜夫を殺して ● 死人と共に ● 御先代が太后の御身持を怒る ● 御自身の過失を贖ひて以て先王の御立腹を解くに忙しからん ● 私かに寵愛するを得ん。

無知之死人哉。若死者有知。先王積怒之日久矣。太后救過不贖。何暇乃私魏醜夫乎。太后曰。善。乃止。

秦攻韓圍陘。范雎謂秦昭王曰。有攻地者。有攻地者。穰侯十攻魏而不得傷者。非秦弱而魏強也。其所攻者地也。地者。人主所甚愛也。人主者。人臣之所樂爲死也。攻人主之所愛。與樂死者。圖故十攻而弗能勝。

秦、韓を攻め陘を圍む。范雎、秦の昭王に謂つて曰く、「人を攻むる者有り、地を攻むる者有り。穰侯十たび魏を攻めて傷るを得ざるものは、秦弱くして魏強きに非ず、其の攻むる所の者地なればなり。地は人主の甚だ愛する所也、人主は人臣の爲めに死するを樂ふ所なり、人主の愛する所を攻めて、死を樂ふ者と闘ふ。故に十たび攻めて勝つ能はざる也。今王、將に韓を攻めて陘を圍まんとす。臣願はくは王の獨り其地を攻むる母くして、其人を攻めんことを。王、韓を攻め陘を圍むに、張儀を以て言と爲せ。張儀の力多くば、且に地を割いて以て自ら王に贖はんとす。幾地を割いて韓盡きざらんや。張儀の力少くば、則ち王張儀を逐うて、更めて儀に如かざる者と市へよ。則ち王の韓に求むる所の者、盡く得可けん。」

● 韓の邑 ● 攻むる目的は地を得るにあり ● 其爲めに。臣は君の爲めに死せん事を願ひ望むと也 ● 地を得んとして人臣と闘ふ ● 口實とせよ。即ち張儀が不都合なる故に韓を攻むると言へ ● 豈に同じ、ほとんごと訓ずるも可 ● 隙より放逐して ● 交換せよ ● 人物が平凡なる上に王の恩に報ぜんとする故に事意のまゝならん

也。今王將攻韓圍陘。臣願王之毋獨攻其地。而攻其人。王攻韓。圍陘。以張儀爲言。張儀之力多。且削地。而以自贖於王。幾割地。而韓不盡。張儀之力少。則王逐張儀。而更與不如張儀者上市。則王之所求。於韓者。盡可得也。

を得んとして人臣と闘ふ ● 口實とせよ。即ち張儀が不都合なる故に韓を攻むると言へ ● 豈に同じ、ほとんごと訓ずるも可 ● 隙より放逐して ● 交換せよ ● 人物が平凡なる上に王の恩に報ぜんとする故に事意のまゝならん

應侯曰。鄭人謂玉未理者。璞。周人謂鼠未腊者。璞。周人懷璞。過鄭。賈曰。欲買璞乎。鄭賈曰。欲之。出其璞。視之。乃鼠也。因謝不取。今平原君自以賢。顯名於天下。

應侯曰く、「鄭人は玉の未だ理めざる者を璞と謂ひ、周人は鼠の未だ腊せざる者を璞と謂ふ。周人璞を懷いて、鄭の賈に過つて曰く、『璞を買はんと欲するか。』鄭の賈曰く『之を欲す』と。其璞を出して之を視せば、乃ち鼠也。因て謝して取らざりき。今平原君自ら賢を以て、名を天下に顯はす。然れども其主父を沙丘に降して、之を臣とす。天下の王尚ほ猶ほ之を尊ぶ。是れ天下の王、鄭賈の智に如かず、名に眩して其實を知らざる也。」

● 腊はじし也、鼠の乾物の未だこもりに乾し固まらぬ者を ● 商人の所に立寄りて ● 璞と標との同音

然降其主父。沙丘而臣之。天下之王尚猶尊之。是天

なる所より誤解したる譯を以て其品を謝絶して買取らざりき。名は勝、趙の惠文王の弟。惠文王は平原君の父なりし趙の武靈王の老後の稱號。沙丘といふ地の別宮に押込みて。但趙記には「公子成李兌」とあり、平原君は文字の誤なりといふ。賢者といふ空名に眩惑して

天下之士合從。相聚於趙。而欲攻秦。秦相應侯曰。王勿憂也。請令廢之。秦於天下之士非有怨也。相聚而攻秦者。以己欲富貴耳。王見大王之狗臥者。臥起者。起者。起者。母相與

天下の士合從し、趙に相聚まつて、秦を攻めんと欲す。秦の相應侯曰く、「王憂ふる勿れ。請ふ之を廢めしめん。秦天下の士に於て怨あるに非ず。相聚まつて秦を攻むるものは、己富貴を欲するを以てのみ。王、大王の狗を見よ。臥する者は臥し、起つ者は起ち、行く者は行き、止まる者は止まり、相與に鬪ふ者母し。之一骨を投ずれば、輕起して相牙むものは、何ぞや。則ち爭意あれば也」と。是に於てか唐雎をして音樂を載せしめ、之に五千金を予へ、武安に居て高會し、相與に飲ましむ。謂へらく、「邯鄲の人、誰か來つて取る者ぞ。是に於て、其の謀る者には固より未だ予ふるを得可らず。其の予ふるを得可き者は、之と昆弟たれ。」

鬪者。投之一骨。輕起相牙者何。則有爭意也。於是使唐雎載音樂。予之五千金。居武安。高會相與飲。謂邯鄲人。誰來取者。於是其謀者。固未可得予也。其可得予者。與之昆弟矣。公與秦計功者。不問金之多少。天下之士大相與鬪矣。

公、秦の與めに功を計らば、金の之く所を問はじ。金盡きば功多からん。今人をして復た五千金を載せて、公に隨はしめん」と。唐雎行いて武安に至り、散する三千金なる能はずして、天下の士大いに相與に鬪ふ。

- 策士 士より譽を受くべき徳なし
- 投げ與ふる時は 忽ち起つて牙にて噛みあふ譯は 音樂の器を車に乗せ
- 趙の地 盛大なる宴會を開き
- 應侯が唐雎に謂ふ言葉也
- 趙の都
- じん
- 人物が金を取りに來ようか
- 其取りに來た場合に於て
- 秦を攻めんと謀りたる者には勿論富方より謝絶して金を與ふべからず
- 金を與へて然るべき者即ち秦を謀らざる策士には金を與へたる上に兄弟の如く親しく交はるべし
- 唐雎に對する對稱也
- 金の使ひ途はどの様にも構はず
- 金を獲らざれば盡せばそれだけ功多き譯
- 公に渡したる五千金の外に別に又
- まだ三千金も撒かぬ内に
- 利益に目が眩みて同士打を始め合從攻秦の策は自然立消えとなりたる也

謂應侯曰。君禽馬服君乎。曰。然。又即圍

應侯に謂つて曰く、「君、馬服君を禽にするか。」曰く、「然り。」又即ち邯鄲を圍むか。」曰く、「然り。」曰く、「趙亡びば、秦王、王たらん。武安君三公たらん。武

邯鄲乎。曰。然。趙亡。秦王王矣。武安君爲三公。武安君所以爲秦戰勝攻取者。七十餘城。南亡鄆。鄆漢中。禽馬服之軍。不亡一甲。雖周邵呂望之功。亦不過此矣。趙亡。秦王王。武安君爲三公。君能爲之下乎。雖欲無爲之下。固不得之矣。秦嘗攻韓邢丘。困於上黨。上黨

安君秦の爲めに、戰ひて勝ち、攻めて取る所以の者、七十餘城。南、鄆、鄆、漢中を亡ほし、馬服の軍を禽にして、一甲だも亡はす。周・邵・呂望の功と雖も、亦此に過ぎじ。趙亡びば、秦王、王たり、武安君三公たらん。君能く之が下たらんか。之が下たる無からんと欲すと雖も、固より之を得じ。秦嘗て韓の邢を攻め、上黨を困しむ。上黨の民皆返つて趙の爲めにせり。天下の民、秦の民たるを樂はざるの日固より久し。今趙を攻めば、北地は燕に入り、東地は齊に入り、南地は楚・魏に入らん。則ち秦の得る所幾何もなからん。故に、因て之を割き、以て武安の功を爲す無きに如かず。」

● 或人が ● 史記に武安君とあり、公よべし、秦將白起也 ● 趙の將趙括也、禽は擒に同じ、ことの事實は殺戮也、蓋し古文には殺戮をも亦擒といへり ● 天下の王 ● 楚の地 ● 一兵 ● 古への周公召公奭(セキ) ● 太公望呂尚 ● 原文一本に従つて「刑丘」に作る非也 ● 韓の上黨の地を攻め困しむ ● 秦に降らざして却て趙に降り趙の爲に盡せり ● 史記に従つて「亡」の字に作るを可とす ● 趙が敗戦の結果和議を請ふに因りて、其領土を割きて秦に獻せしめ、以て和議を結ぶべし、戰つて趙を亡ぼし、因て以て武安君の功を爲さしむるは不可也 ● 原文「因」は「無」の誤

之民。皆返爲趙。天下之民。不樂爲秦。民之日固久矣。今攻趙。北地入燕。東地入齊。南地入楚。魏。則秦所得無幾何。故不如因而割之。因以爲武安功。

應侯失韓之汝南。秦昭王謂應侯曰。君亡國。其憂乎。應侯曰。臣不憂。王曰。何也。曰。梁人有東門吳者。其子死而不憂。其相室曰。公之愛子也。天下無有。今子死而不憂。何也。東門吳曰。吾嘗無子。無子之時不憂。今

應侯、韓の汝南を失ふ。秦の昭王、應侯に謂つて曰く、「君、國を亡ぶ。其れ憂ふるか。」應侯曰く、「臣憂へず。」王曰く、「何ぞや。」曰く、「梁人に東門吳といふ者あり。其子死して憂へず。其相室曰く、「公の子を愛する、天下有る無し。今子死して憂へざるは何ぞや」と。東門吳曰く、「吾嘗て子なし、子なきの時憂へず。今子死す、乃ち即ち子なきの時と同じ」と。臣奚ぞ憂へんや。臣亦嘗て子たり。子たりし時憂へず。今汝南を亡ぶ。乃ち即ち梁の餘子たると同じ。臣何爲れぞ憂へん」と。秦王以て然らずとし、以て蒙傲に告げて曰く、「今や寡人、一城圍まるも、食ひて味を甘しとせず、臥して席を便とせず。今ま應侯、地を亡うて、憂へずと言ふ。此れ其情か。」蒙傲曰く、「臣請ふ其情を得ん」と。乃ち往いて應侯に見えて曰く、「傲死せんと欲す」と。應侯曰く、「何の謂ぞや。」曰く、「秦王の君を師とする、

子死。乃即與
無子時同也。
臣奚憂焉。臣
亦嘗爲子。爲
子時不憂。今
亡。汝南。乃即
與。爲。梁。餘。子
同也。臣何爲
憂。秦王以爲
不然。以告蒙
傲。曰。今也寡
人一城。圍。食
不甘。味。臥不
便。席。今應侯
憂。此其情也。
蒙傲曰。臣請
得其情。蒙傲
乃往見應侯。曰。傲欲死。應侯曰。何謂也。曰。秦王師君。天下莫不聞。而況於秦國乎。今傲勢
得。爲。秦。王。爲。將。將。兵。臣。以。韓。之。細。也。顯。逆。誅。奪。君。地。傲。尚。奚。生。不。若。死。應。侯。拜。蒙。傲。曰。願

天下聞かざる莫し。而るを況んや秦國に於てをや。今傲勢ひ秦王の爲めに將と爲り、兵を將るを得たり。臣以ふに韓の細にして、顯かに誅に逆ひて君の地を奪ふ。傲尚ほ奚ぞ生きん。死するに若かじ」と。應侯蒙傲を拜して曰く、「願はくは之を卿に委せん」と。蒙傲以て昭王に報ず。是よりの後、應侯毎に韓の事を言ふ者、秦王聽かず。其の汝南の爲めにするを以へば也。

● 韓の汝南の地を取り後又韓に取戻されし也 ● 蒙傲の長 ● 他に類なし ● 餘子 ● 蒙は魏の別名也。餘子は我邦にていふ郡縣住又は居候の類也、固より知行所なし史記范雎傳に「魏王二事ヘント欲ス、蒙賞シク以テ自ラ賣スル無シ乃チ先ツ魏ノ大夫須賀ニ事フ」 ● 眞情かそれとも表面を詐り飾りて言ふか ● 聞君長は「辛比」の説といふ ● 微細、微弱の小國の意 ● 秦王の誅責に違ふべきを知りながら公然これに逆ひて ● 武士の體面上生きて見れば居られぬと也、つまり兵力にて取返して差上げんとの底意を示したる也 ● 此れに應侯の心情を突き留めれば其次節を以て ● 一本により原文の「蒙」字を省きて譯す。正解には「蒙」は「廉」の誤とせり

委之。卿。蒙傲以報於昭王。自是之後。應侯每言韓事者。秦王不聽也。以三其爲汝南虜也。
昭王既息民。織兵。復欲伐趙。武安君曰。前年國虛民飢。君不量百姓之力。求下益軍糧。以滅趙。今寡人息民以養士。蓄糧糧食。三軍之俸。有倍於前。而曰不可。其說何也。武安君曰。長平之事。秦軍大克。趙軍大破。秦人歡喜。趙人畏

昭王既に民を息め兵を繕めて、復た趙を伐たんと欲す。武安君曰く、「不可なり。」王曰く、「前年國虛しく民飢う。君百姓の力を量らず、軍糧を益して、以て趙を滅ぼさん事を求めき。今寡人、民を息め、以て士を養ひ、糧食を蓄積す。三軍の俸前に倍するもの有り。而るに不可と曰ふ。其說何ぞや。武安君曰く、「長平の事、秦軍大いに克つて、趙軍大いに破れ、秦人は歡喜し、趙人は畏懼す。秦民の死する者は厚く葬むり、傷く者は厚く養ひ、勞したる者は相饗し、飲食餽饒以て其財を靡せり。趙人の死する者は收むるを得ず、傷く者は療するを得ず、涕泣して相哀しみ、力を斃せ憂を同じうし、田を耕して疾作し、以て其財を生ぜり。今王、軍を發する其前に倍すと雖も、臣料るに、趙國の守備も亦以て十倍せん。趙、長平より已來、君臣憂懼し、早に朝し晏く退き、辭を卑うし幣を重くして四面に出嫁し、親を燕・魏に結び、好を齊・楚に連ね、慮を積み心を并せ、秦に備

懼。秦民之死
者厚葬。傷者
厚養。勞者相
饗。飲食備饒。
以靡其財。趙
人之死者不
得收。傷者不
得療。涕泣相
哀。勤力同憂。
耕田疾作。以
生其財。今王
發軍。雖倍其
前。臣料趙國
守備。亦以十
倍矣。趙自長
平已來。君臣
憂懼。早朝晏
退。卑辭重幣。
四面出線。結
親燕魏。連好

ふるを務と爲す。其國內に實ち、其交外に成る。今の時に當つて、趙未だ伐つ可らざる也。」王曰く、「寡人既に以て師を興せり」と。乃ち五校大夫王陵をして、將として趙を伐たしむ。陵戦つて利を失ひ、五校を亡ふ。王武安君を使はさんと欲す。武安君疾と稱し行かず。王乃ち應侯をして往いて武安君を見、之を責めしめて曰く、「楚の地、方五千里、持戟百萬、君前に數萬の衆を率ゐて楚に入り、郟野を抜き、其廟を焚いて、東、竟陵に至る。楚人震恐し、東に徙つて敢て西に向はず。韓・魏相率ゐて兵を興すこと甚だ衆し。君が將ゐる所の卒、之に半する能はず。而も之と伊闕に戦つて、大いに二國の軍を破り、流血齒を漂はし、首を斬ると二十四萬。韓・魏故を以て今に至るまで東藩と稱す。此れ君の功なり。天下聞かざる莫し。今趙卒の長平に死する者已に十に七八、其國虛弱なり。是を以て寡人大いに軍人を發して、趙國の衆に數倍す。願はくは君をして將たらしめ、必ず之を滅ぼさんと欲す。君嘗て寡を以て衆を撃ち、勝を取ることを神の如し。況んや

強を以て弱を撃ち、衆を以て寡を撃つをや。」

- 備ひ治めて軍備を一新す ● 白起 ● 賈しくして善積なし ● 廉秩 ● 戰後 ● 互に獎勵して慰む
- 飲食物を食はしたり贈りたりして ● 散財して奢りに傾けり ● 涙を流して泣き哀む ● 休息せざして速かに作る ● 長平の敗軍 ● 朝廷に出動し ● 四方の列國に使者を出す ● 國內の官は充實し外交も成功せり ● 軍 ● 五校は五部隊也。一校は八百人、其五部隊を帥るる官の王陵 ● 五隊の人數。高誘の註に「五校ハ軍數也、其營校ノ部ヲ亡フヲ言フ」と ● 戟(ホコ)を持つ戰士 ● 東の方陣に従りて西の方陣に向はず ● 大屠 ● 東に在る屠國の聲 ● 昭王の自稱、こゝは應侯が明王の言辭のまゝを取次ぐ也 ● 小人數にて大人數を撃ち

齊楚。積慮并
心。備秦爲務。
其國內實。其
交外成。當今
之時。趙未可
伐也。王曰。寡
人既以興師
矣。乃使五校
大夫王陵將
而伐趙。陵戰
失利。亡五校。
王欲使武安君。武安君稱疾不行。王乃使應侯往見武安君。責之曰。楚地方五千里。持戟百萬。君前率數萬之衆入楚。拔鄢郢。焚其廟。東至竟陵。楚人震恐。東徙而不敢西向。韓魏相率興兵甚衆。君所將之卒。不能半之。而與之戰於伊闕。大破二國之軍。流血齒。斬首二十四萬。韓魏以故至今稱東藩。此君之功。天下莫不聞。今趙卒之死於長平者。已十七八。其國虛弱。是以寡人大發軍人。數倍於趙國之衆。願使君將。必欲滅之矣。君嘗以寡擊衆。取勝如神。況以強擊弱。以衆擊寡乎。

武安君曰。是時楚王恃其

武安君曰く、「是の時、楚王は其國の大を恃んで、其政を恤へず。而して羣臣相

國大。不恤其政。而羣臣相妬。以功諛諂。用事。良臣斥疎。百姓心離。城池不修。既無良臣。又無守備。故起所入。多得引兵。深入。多倍城邑。發梁焚舟。以專民心。掠於郊野。以足軍食。當此之時。秦之士卒。以軍中爲家。將帥爲父母。不約而親。不謀而信。一心同力。死不旋踵。

妬むに功を以てし、諛諂事を用ひ、良臣斥疎せられ、百姓心離れ、城池修まらず。既に良臣なく、又守備なし。故に起、兵を引きて深く入り、多く城邑を倍にし、梁を發し舟を焚き、以て民心を專らし、郊野を掠めて、以て軍食を足すを得たり。此の時に當つて、秦の士卒、軍中を以て家と爲し、將帥を父母と爲す。約せずして親しみ、謀らずして信じ、心を一にし力を同じうし、死するも踵を旋らさず。楚人は自ら其地に戦ひ、咸其家を顧み、各々散心ありて、鬪志ある莫し。是を以て能く功ありしなり。伊闕の戦、韓孤にして魏を顧み、先づ其衆を用ふるを欲せず。魏は韓の銳を恃んで、推して以て鋒と爲さんと欲す。二軍便を争うて、之の力同ならず。是を以て臣、疑兵を設けて、以て韓陣に持し、軍を専らしし銳を并せて、魏の不意に觸るゝを得たり。魏軍既に敗れて韓軍自ら潰ゆ、勝に乗じて北ぐるを追ふ。是を以ての故に能く功を立つ。皆形勢を計り利す、自然の理なり。何の神か之れ有らん。今秦、趙の軍を長平に破り、遂に時を以て、其の振

楚人自戰其地。咸顧其家。各有二心。莫有固志。是以能有功也。伊闕之戰。韓孤顧魏。不欲先用其衆。魏恃韓之銳。欲推以爲鋒。二軍爭便。之力不同。是以臣得設疑兵。以持韓陣。專軍并銳。觸魏之不意。魏軍既敗。韓軍自潰。乘勝逐北。以是之故。能立功。皆計利形勢。

懼に乗じて之を滅ぼさず、畏るとして之を釋し、耕稼して以て蓄積を益し、孤を養ひ幼を長じて、以て其衆を益し、兵甲を繕治して、以て其強を益し、城を増し池を浚くし、以て其固めを益すを得しむ。主は節を折りて以て其臣に下り、臣は體を推して以て死士に下る。平原君の屬に至るまで、皆妻妾をして行伍の間に補縫せしむ。臣人心を一にし、上下力を同じうす。猶ほ句踐の會稽に困しめる時のごとし。今を以て之を伐たば、趙必ず固く守らん。其軍に戦を挑むとも、必ず肯て出でじ。其國都を圍むとも、必ず克つ可らず、其の列城を攻むとも、必ず未だ抜く可らず、其の郊野を掠むとも、必ず得る所無けん。兵出で、功なくば、諸侯心を生じ、外救必ず至らん。臣其害を見て、未だ其利を睹ず。又病みて未だ行く能はず」と。應侯慙ちて退き、以て王に言ふ。王曰く、「白起微くとも、吾れ趙を滅ぼす能はざらんや」と。復た益々軍を發し、更に王龔をして王陵に代つて趙を伐たしむ。邯鄲を圍むこと八九ヶ月。死傷する者衆くして下らず。趙王懼銳を出し

自然之理。何神之有哉。今秦破趙軍於長平。不遂以時乘其振懼。而滅之。長而釋之。使得耕稼。以益蓄積。養孤長幼。以益其衆。繕治兵甲。以益其強。增城浚池。以益其固。主折節以下。其臣。臣推體以下。死士。至於平原。君之屬。皆令妻妾補。縫於行伍之間。臣人一。心。

て、以て其の後に寇す。秦數々利あらず。武安君曰く、「臣の計を聽かず。今果して如何」と。王之れを聞いて怒り、因て武安君を見て、強ひて之を起たしめて曰く、「君病めりと雖も、強ひて寡人の爲めに、臥しながら之に將たれ。功あらば寡人の願なり、將に重きを君に加へんとす。如し君行かすんば、寡人君を恨みん」と。武安君頓首して曰く、臣、「行かば功なしと雖も罪を免がるゝを得、行かすんば罪なしと雖も誅を免かれざるを知る。然れども惟願はくは、大王臣の愚計を覽て、趙を釋て、民を養ひ、以て諸侯の變を觀、其恐懼を撫し、其驕慢を伐ち、無道を誅滅して、以て諸侯に令せば、天下定む可し。何ぞ必ずしも趙を以て先とせんや。此れ所謂一臣の爲めに屈して、天下に勝つ也。大王若し臣の愚計を察せず、必ず心を趙に快くして、以て臣を罪に致さんと欲せば、此れ亦所謂一臣に勝つて、天下の爲めに屈する者也。夫れ一臣に勝つての嚴焉たるは、天下に勝つての威大なるに孰若ぞや。臣聞く、明主は其國を愛し、忠臣は其名を愛すと。破國復た完う

す可らず。死卒復た生かす可らず。臣寧ろ伏して重誅を受けて死すとも、辱軍の將たるに忍びず。願はくは大王之を察せよ」と。王答へずして去る。

上下同力。猶下句踐困於會稽之時也。以今伐之。趙必固守。挑其軍戰。必不肯出。圍其國都。必不可克。攻其列城。必未可拔。掠其郊野。必無所得。兵出無功。諸侯生心。外救必至。臣見其害。未睹其利。又病未行。應侯慙而退。以言於王。王曰。微白起。吾不能滅趙乎。復

政をあるそかにして心配せず 互に他人の功を妬みあふ 君にこびへつらふ小人 排斥除外 心が上を離れて之を怨む 白起の自稱 倍は背に同じ、敵の城邑を取りては進み取りては退きして多くの敵城を己れの背後にして深く進み入る也 艦梁を破壊し舟を焚きて味方をして生還脱走の念を絶たしめ 敵地城外の田畝 約束を破にせずして自ら相親しみ 障め相談せずとも自ら信を失はず 敵にうしろを向けて逃走することなし 自分の土地に居て戦ふ事ゆゑ 心散亂して闘ふに専らならず 勢孤立なるが故に魏をして敵に當らしめんとし、先づ自國の兵を以て戦ふを欲せず 精銳の兵 先鋒 互に自分に便利な機に相争ひて協力一致せず 之の力は「其力」也 敵を疑惑せしむる兵。例へば小敵の兵を大敵の如く見せ掛け、右を衝く如く見せて左を衝く類 韓の陣と對陣し之を牽制して持ちこたへる、一本「持」を「待」に作る、亦同意也 軍を専ら魏の方に向け精銳を併せて魏を不意撃ちす 敵はずして自ら潰走す 我軍は 三國の形勢を計りて之を利す、我軍の勝は自然の理歟のみ 前「神の如し」といへるに應じ、「神などとははめ下さる程の不思議の事にあらず」と也 其當時 細ひおそれて人心恟々たり 趙が畏れて我に屈服せりとして之をゆるす。即ち前章に出でたる事にて、范雎が勸めて趙の和をゆるしたる事實を指す也 孤兒 人散、人口 兵器甲冑を備ひなほし 防壁の固め 君臣尊卑の禮節を屈し其臣下に頭を下げて禮遇す 己の身を推

益發軍。更使下
王鮪代王陵一
伐趙。困邯鄲一
八九月。死傷
者衆而弗下。
趙王出輕銳。
以寇其後。秦
數不利。武安
君曰。不聽臣
計。今果如何。
王聞之怒。因
見武安君。強
起之曰。君雖
寡人。恨君。武
安君。願首曰。
臣知下。行雖
無功。得免於
罪。雖不行。無
罪。不也。免於
誅。然惟願大王
覽臣愚計。釋
趙。養民。以
觀諸侯之變。
撫其恐懼。伐
其驕慢。誅無
道。以令諸侯。
天下可定。
何必以趙爲
先乎。此所謂
爲一臣。屈而
勝二天。下也。
大王若不察
臣愚計。必欲
快心於趙。以
致臣罪。此亦
所謂勝一臣。而
爲二天下。屈
者也。夫勝一
臣之嚴焉。孰
若勝二天下
之威。大邪。臣
聞明主愛其
國。忠臣愛其
君。王不答而
去。

秦攻邯鄲。十

謹し身を卑うして義決死の勇士に下る (一) ともがら。如き人々 (二) 軍隊の意。聞君長曰。卒伍聞クル
有レバ、妻妾ヲシテ其間ヲ補給セシム所謂補給スルノ若シ (三) 趙王 (四) 我軍出でて (五) 秦を輕
蔑するの心を生じ (六) 外部より趙に助くる救援 (七) 趙を伐つについての密 (八) 趙の都 (九) 輕く銳
い兵を出して秦兵の背後を討たしむ。「其後」は出征せる兵の後面即ち秦の地に入りて寇を爲すの意と解すべきか
起たせて戦地に向はしめんとして曰く (一〇) 重遇を君に加へん (一一) 御考へ下され (一二) 形勢の變化
秦の威を畏れて屈伏する諸侯を撫恤し (一三) あごり高ぶりに我をなぞる者を伐ち (一四) 暴逆にして民
を苦しむる者を誅す (一五) 號令せば (一六) 趙を伐つを先務とする要なし (一七) 武安君自身を指していふ也
趙を伐ちて胸を晴ませ (一八) 威嚴あるは (一九) 名を辱しめざらん事を念とす (二〇) 其軍の名譽を辱
しむる意。敗軍の將といふに同じ

秦邯鄲を攻め、十七月下らず。 (一) 莊、王稽に謂つて曰く、「君何ぞ軍吏に賜はざる
や。王稽曰く、「吾れ王に與せり、人の言を用ひず。」莊曰く、「然らず、父の子に
於ける、令必ず行はるゝ者あり、必ず行はれざる者あり。曰く、「貴妻を去れ、愛妾
を賣れ」と。此れ令の必ず行はるゝ者なり。因つて曰く、「敢て思ふ母れ」と。此れ
令の必ず行はれざる者なり。守閭の嫗曰く、「某の夕、某の孺子某の士を内る」と。
貴妻已に去り、愛妾已に賣る、而して心有らず。之を教げんと欲する者は、人の
心固より有り。今君、王に幸せらると雖も、父子の親に過ぎず、軍吏賤しと雖も、
守閭の嫗より卑しからず。且つ君、主を擅にし、下を輕んずるの日久し。聞く、
三人虎を成し、十夫椎を揉む、衆口の移す所、翼母くして飛ぶと。故に曰く、軍吏
に賜うて之に禮せんに如かず」と。王稽聽かず、軍吏窮す。果して王稽・杜擘を惡
するに反を以てす。秦王大いに怒り、兼ねて范雎を誅せんと欲す。范雎曰く、「臣
は東鄙の賤人也。罪を魏に開き、遁逃來奔す。臣、諸侯の援、親習の故なし。王、
臣を驕旅の中より擧げて、事を賦らしむ。天下皆臣の身と王の舉とを聞く。今

七月不下。莊
謂王稽曰。君
何不賜軍吏
乎。王稽曰。吾
與王也。不用
人言。莊曰。不
然。父之於子
也。令有必行
者。必不行者。
曰。去貴妻。賣
愛妾。此令必
行者也。因曰。
母敢思也。此
令必不行者
也。守閭嫗曰。
某夕某孺子
內某士。賣妻
已去。愛妾已
賣。而心有
欲教之者。人

七月不下。莊
謂王稽曰。君
何不賜軍吏
乎。王稽曰。吾
與王也。不用
人言。莊曰。不
然。父之於子
也。令有必行
者。必不行者。
曰。去貴妻。賣
愛妾。此令必
行者也。因曰。
母敢思也。此
令必不行者
也。守閭嫗曰。
某夕某孺子
內某士。賣妻
已去。愛妾已
賣。而心有
欲教之者。人

心固有。今君雖幸於王。不_レ過父子之親。軍吏雖賤。不_レ卑於守閭。且君擅主。輕_レ下之日久矣。聞三人成虎。十人操_レ椎。衆口所_レ移。母_レ異而飛。故曰。不_レ如_レ闕_二軍吏_一而禮_レ之。王稽不_レ聽。軍吏窮。果惡_二王稽_一杜_レ鞅以_レ反。秦王大怒。而欲_レ兼_レ誅_二范雎_一。范雎曰。臣東部之賤人也。聞_二罪於

愚惑して、罪人と心を同じうし、而して王明かに之を誅せんとす。是れ王の過舉(二九)天下に顯はれて、諸侯の爲めに議せられん。臣願はくは藥を請ひ死を賜はん。而して恩もて相を以て臣を葬むれ。王必ず臣の罪を失せずして、而も過舉の名なからん。王曰く、「之あり」と。遂に殺さずして、善く之を遇せり。

- 趙の都 ● 人名、姓未詳 ● 秦の將 ● 軍吏(將校)に物を與へて慰勞せざるや。永き陣にて困迫し軍吏の遂に不平を抱くに至らんを恐れて斯くす、むる也 ● 與は許也、約束する也。吾は決して他人の言を用ひず一に王命に待たんと王に約したり、故に今君の言を用ふる能はず ● 命令 ● 愛妾に對して貴といふ、大事の妻の義 ● 其去り又賣りたる妻妾を思慕する勿れ ● 里門の番をする老女 ● 何日の夕 ● 美しい少女の稱 ● 引入れ密合せり。一説に此下に「此言有_二必行_一也」の一句を漏脱したるならんといふ。最も然るべき説と覺ゆ ● 其富人の本心に有らず故に思慕なき能はず、これ合行はれざる例也 ● 教は告也。女が男を引張り込む、かゝる秘事を見ては鬼角人に告げんと欲する者固より人心本來の情、故に人之を信じて其言が行はる ● 寵愛せらる ● 王の令は必ずしも行はるべきにあらず、而も軍吏若し君の惡口を王に告げば其言は必ず行はれんとす ● 主君の寵威を專にし ● 三人市に虎ありと言へば人必ず之を信ず。魏策にも見ゆ ● 十人扱れば鐵椎をもたわますべし。前説の語と共に衆口の恐るべき也 ● 王稽の副官 ● 惡は殺也。惡しざまに王に讒するに兩人の讒反を以てす ● 王稽は范雎の推舉せし所なるを以て也 ● 范雎の生國魏は

秦の東にある故にいふ ● 始めて罪を請ひ得 ● 王の近習に故舊(なじみ)あるなし ● 素生(スジヤウ) ● 登用 ● 王稽をいふ ● 通つて臣を常用したる事 ● 誹謗されん ● 國の宰相たる儀式にて葬るの恩典を賜へ ● 如何にも尤も也

魏。遁逃來奔。臣無_二諸侯_一之授。親習之故。王舉_二臣_一於_二羈旅_一之中。使_レ職_レ事。天下皆聞_二臣_一之身。與_二王_一之舉_二也。今愚惑與_二罪人_一同心。而王明誅_レ之。是王過舉_二顯_二於_二天下_一。而爲_二諸侯_一所_レ議也。臣願_レ請_レ藥_レ死。而恩_レ以_レ相_レ葬_レ臣。王必不_レ失_二臣_一之罪。而無_二過舉_一之名。王曰。有_レ之。遂弗_レ殺_レ而善_レ遇_レ之。

秦攻_レ趙。蘇子爲_二謂_二秦_一王曰。臣聞_二明王之於_二其民_一也。博論_レ而技_レ藝_レ之。是故官無_レ乏事。而力不_レ困。於_二其言_一也。多聽_レ而時_レ用_レ之。是故事無_レ敗業。而惡_レ不_レ章。臣願_レ王察_二臣

秦、趙を攻む。蘇子、爲に秦王に謂つて曰く、「臣聞く、明王の其民に於けるや、博く論じて之を技藝にす。是の故に、官事に乏く無くして、力困まず。其言に於けるや、多く聽いて時に之を用ふ。是の故に事に敗業無くして、惡章はれずと。臣願はくは、王の臣が調す所を察して、之を一時の用に效されんことを。臣聞く、重寶を懐く者は、以て夜行かず、大功に任ずる者は、以て敵を輕せずと。是を以て、賢者は任重くして行ひ恭、智者は功大にして辭順なり。故に民其尊を惡まず、而して世其業を始まず。臣之を聞く、百倍の國は、民後あるを樂はず。功業世に

之所。謂。而效。之。於。一。時。之。用。也。臣。聞。懷。重。寶。者。不。以。夜。行。任。大。功。者。不。以。輕。敵。是。以。賢。者。任。重。而。行。恭。智。者。功。大。而。辭。順。故。民。不。惑。其。尊。而。世。不。妬。其。業。臣。聞。之。百。倍。之。國。者。民。不。樂。後。也。功。業。高。世。者。人。主。不。再。行。也。力。盡。之。民。仁。者。不。用。也。求。得。而。反。靜。聖。主。之。制。

高き者は、人主再び行はず。力盡くるの民は、仁者用ひず。求得て靜に反るは、聖主の制也。功大にして民を息むるは、兵を用ふるの道也。今兵を用ひて終身休めず、力盡くるも罷めず、趙を怒りて其を己が邑に必ず。趙僅かに存する哉。然り而して四輪の國なり。今邯鄲を得と雖も、國の長利に非ず。意ふに地廣うして耕さず、民羸れて休まず、又之を嚴にするに刑罰を以てせば、則ち従ふと雖も止まらじ。語に曰く、「戰勝ちて而も國危き者は、物斷えざれば也。功大にして而も權輕き者は、地入らざればなり」と。故に任に過ぐるの事は、父も子に得ず、己む無きの求めは、君も臣に得ず。故に微の著を爲すを識る者は強く、民を息むるの用を爲すを察する者は弱たり、輕の重を爲すを明かにする者は王たり。「秦王曰く、「寡人兵を案じ民を息めば、則ち天下必らず従を爲し、將に以て秦に逆はんとす。」蘇子曰く、「臣以て天下の従を爲して、以て秦に逆ふ能ざるを知る有り。臣田單・如耳を以て大いに過てりと爲す。豈獨り田單・如耳のみ大いに過てりと爲さん

也。功大。而。息。民。用。兵。之。道。也。今。用。兵。終。身。不。休。力。盡。不。罷。怒。趙。必。於。其。己。邑。趙。僅。存。哉。然。而。四。輪。之。國。也。今。雖。得。邯。鄲。非。二。國。之。長。利。也。意。者。地。廣。而。不。耕。民。羸。而。不。休。又。嚴。之。以。刑。罰。則。雖。從。而。不。止。矣。語。曰。戰。勝。而。國。危。者。物。不。斷。也。功。大。而。權。輕。者。地。不。入。也。故。過。

や。天下の主も亦盡く過てり。夫れ慮りて亡齊・罷楚・弊魏と、知る可らざるの趙とを收めて、以て秦を窮しめ韓を折かんと欲す。臣以て至愚と爲す也。夫れ齊の威・宣は、世の賢主也。徳博くして地廣く、國富んで民用ひられ、將武にして兵強し。宣王之を用ひて後、韓を破り魏を威し、以て南、楚を伐ち、西、秦を攻む。齊兵の爲めに殺塞の上に困しめらるゝ十年、地を攘きしも、秦人迹を遠ざけて服せず、齊は虚戻と爲る。夫れ齊兵の破れたる所以、韓・魏の僅かに存する所以のものは何ぞや。是れ則ち楚を伐ち秦を攻めて、而して後其殃を受けたれば也。今富は齊の威宣の餘有るに非ず、精兵は富韓・勁魏の庫有るに非ず、而して將は田單・司馬の慮あるに非ず。破齊・罷楚・弊魏・知るべからざるの趙を收めて、以て秦を窮しめ韓を折かんと欲す。臣以て至つて誤れりと爲す。臣以爲らく従一たびも成る可らざるなり。昔、秦人兵を下し、懷を攻めて其人を服す。三國之を従はんとす。趙奢・鮑佞將たり。楚に四人あり。起つて之を従はんとし、懷に臨み